
蒼いダイヤ 第二章

レン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼いダイヤ 第二章

【Nコード】

N8167T

【作者名】

レン

【あらすじ】

前回蒼いダイヤ第一章の続きです。

魔物と一緒に鏡の中に消えた大坂と、残されたレンがそれぞれ懸命に生き抜いていく物語です。

その後

大坂がいなくなつて1ヶ月が過ぎようとしていた。

レンは元気を取り戻してまたいつもの様に仕事に戻っていた。

ピポピポピポ

「あん？・・・もうこんな時間？」

朝の目覚ましの音で起こされてまずシャワーを浴び、さっと着替え
て簡単な朝食をとる。

それからすぐに仕事に出て、スタジオ入りして雑用をこなす。

前の事件のあと、サリナさんは以前とは別人のように優しくなり
回りも驚くような変貌振りだった。

マネージャーの石川萌子さんはあのあとしばらく休養していたが

無事現場へ復帰し、今ではボクの面倒もよくみてくれていた。

サリナさんはあの時の記憶がまったくなくて、ただなんかわかんないけど

ボクと大坂に助けてもらったような……

そんなぼやけたイメージしか残ってなかった。

ただ萌子さんは……

記憶も鮮明に残ったままで、ショックも大きく立ち直るのに時間がかかったようだった。

でも、サリナさんも萌子さんもとても優しくボクの会社へも

仕事を多く依頼してくれて、今では一緒の時間がとても多くなっていた。

あんな事件があったとは信じられないくらい、そんな平穏な時間が

過ぎていった。

.....

「それでは、お疲れ様ですー」

「はい、お疲れ様」

ザワザワ・・・

夜の9時・・・ようやく片付けも終わり、何とか帰り支度をしてた時に

「ねえ、レン！」

「え？あ？はい？」

レンは萌子に呼び止められた。

「もう帰るの？もしよかったらちよつと食事にもどろつ？」

萌子が仕事の帰りにレンを食事に誘うのは珍しくなかった。

ただ・・・

「はい！今日はこれに着替えてね！」

仕事帰りに萌子がレンを連れて行く時には必ず、そう言って女装させる・・・

萌子は事件前後の記憶を失っていないからあのときのレンを覚えて

いる訳で

どうやら女の子姿のレンが気に入ったようだった……

「メイクは慣れててすぐ出来るでしょ？20分で支度しなさいね」

こんな風にレンはいつも萌子のペースに巻き込まれていた。

でもそれが結構楽しくて、あまり私服を持っていないレンは

いろんな服が着れるだけでなく、いろんな所へ出かけるのが嬉しかった。。

萌子はレンにとっても優しいお姉さんか、友人みたいに接して

あんな事件のあとのレンのココロを慰めてくれ、大坂を失った傷を癒してくれた。

その日もいつものように車に乗り込み、銀座の高級な御寿司屋さんへ……

「あ？ここ？こないだテレビでやってた……」

貧乏なレンの給料じゃあ、絶対に来れないようなお店だった。

「さあ、好きなだけ食べていいよ」

萌子はそう言うと、自分もいろいろ注文してビールや焼酎を飲んでいろいろ話し出していた。

7

内容はもちろんあの時のこと……

自分はどついつぶうに見えたのか？

何であんなことになったのか？

サリナさんは本当にもう大丈夫なのか？

記憶が残っている萌子にしては、何度確認しても不安で不安で仕方ない事だった。

レンはそんな萌子の話を繰り返して聞いて、それに答えて安心するよ
うに

不安を取り除いたあげていた。

この日も同じような話を繰り返してもう帰ろうとした時に、萌子が
言った。

「あ？そういえばあなた？あの時の蒼いネックレス、ぜんぜんしな
いわね？」

「え？あ？はい……」

「どうして？あれ綺麗でかわいいのに」

「あれはちょっと……なんか……もし付けててなくしたり壊れ
たらイヤだし……」

「ふう〜ん、そうなんだ・・・あれ、大坂君に買ったって言ったよね?」

「はい!だから絶対に大事にしないと・・・」

そんな会話をしてお店を出てから、頼んでおいた代行運転で萌子は帰っていった。

そのあとレンも萌子から貰ったタクシー代で自宅へ戻った。

「何で今日はあのネックレスのこと聞いたんだろ?」

萌子が聞いてきた蒼いダイヤのことが、気になりながら自宅マンションの

エレベーターへ乗り込もうとした時、いきなり一人の男の人が駆け込んできた。

「あ!すいませーん!ハアハア!」

レンは慌てて扉を開けてその男を待った。

「すみません、ハアハア……よかつたまにあつて」

(あ！……やば……)

レンはその時萌子との食事帰りの為、彼女の用意した服

つまり女の子の姿ということをつっかり忘れていた。

デニムの超ミニに黒のブーツ

ロングのウィッグをかぶってメイクも念入りしていたので

下を向いてれば近くで見られてもばれない？

そんな思いに襲われるエレベーターという個室……

ウイ~~~~ン

もちろん会話などなくシーンとするエレベーター内

(どの階の人だろ？あまり見かけない人だなあ)

その男性はレンと同じくらいの年頃で、背は180cm位の長身で髪は短髪でとても体格のいいスポーツマンタイプのすごく男らしい人だった。

するとしばらく無言だったその男性が行きなりレンに話しかける

「このエレベーターって、乗り過ぐすと戻ってくるのに時間かかるんですよね」

いや〜、待ってくれて助かりました。有難うございます。」

「え？あ・・・いえ、いいですよ・・・」

懸命に女の子の声を作って返事するレン

「あの・・・あまりお見かけしませんが、最近引越してこられた方ですか？」

（げー？これ以上喋らせないでよー！）

「あ・・・はい・・・半年ほど前に・・・」

「そうですか。いやあ、こんな綺麗な人がいたなんて知らなかったなあ」

（あぐ！なんだ？こいつ？よくまあこんな恥ずかしい事、初対面でサラッとと言えるわ？）

などと思いながら、レンは恥ずかしくなって顔を伏せたまま黙ってしまった。

チーン！

「あ、じゃあ僕はこの階なので。お先に失礼します」

その男はペコリと頭を下げてエレベーターを降りていった。

「ハアハアよかった！！！ボクが先に降りるのやだったしー！助かった〜」

男性が下りて扉が閉まって、思わず独り言を言うレン。

そのあと自分の階でエレベーターを降りて部屋の鍵を開けようとしたとき、

またあの萌子さんの会話が頭をよぎるのだった。

「何で蒼いネックレス付けてないの？」

なんで？

なんでって？

その時です

「あ？なに？なんか？呼んでる？」

ガチャリ！

扉を開けた瞬間、レンの目に蒼いダイヤの眩しいほどの輝きが飛び込んできた！

「あ！！！！」

レンは全身が震えだした。

大坂がいなくなっただけからは、薄い光しか発していなかったそれが

この時はまるで別物のように光り輝いていた。

そしてレンのココロへ大坂の意識が流れ込んできた。

「おおさか？ おおさかなの？ だいじょうぶっ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おおさかー！ ねえ！ 返事してよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

意識は確認出来ても返事はこない・・・

何度も何度も問いかけても、大坂からの返事はレンに届かなかった。

そしてレンはそのまま疲れて眠ってしまった。

静かな出会い

翌朝

レンが目覚めると、蒼いダイヤの輝きは昨夜のように激しくなく以前の優しいものへと戻っていた。

「なんでだろ？あれは夢？」

ちがう・・・夢なんかじゃあない・・・

あの、直接心に流れ込んでくる大坂の意識は、まだはっきりと覚えている。

「じゃあなぜ？あれからまた感じないのはなぜ？」

考えていても答えが出るわけもなく会社へ行く時間もないので、

レンは朝の支度にかかった。

昨夜はそのまま寝てしまった為、メイクも落とさずに借りていた服も着たままだった。

レンはその姿のまま鏡の前に立ち、自分を見つめた。

「この姿のまま生きたいよ・・・」

このまま女の子の姿で生活がしたい・・・

レンの瞳から大粒の涙がこぼれだす。

「うつつうつつ・・・おおさか・・・ボクさみしいよ・・・早く帰ってきてよ・・・」

昨夜感じた大坂の存在が、立ち直ろうとしていたレンを

再び悲しみの底へ突き落とそうとしていた。

しばらくそのままの姿で洗濯物を干したり片付けをして行く準備にかかり、

(いつまでもメソメソしてらんないや。大坂に笑われるし・・・)

そう思って支度し、昨日の借りていた服を紙袋へ詰めて

玄関へ向かおうとした時に、レンの動きが止まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レンは大坂に貰った蒼いダイヤのネックレスの前で立ち止まり、ジッと見つめていた。

そしてそのネックレスを手に取り、カバンの中へ詰め込み玄関を出て行った。

「あーやばー！もうこんな時間だよ！メソメソしてる間にこりゃー完全に遅刻だわ！」

エレベーターを待つレン。

.....

イライラ.....

イライライラ.....

「だー！何でここのはこんなに来るの遅いんだろ！.....あ！」

レンの頭に昨日の男の人が浮かんできた。

『このエレベーターってほんと来るの遅いんですよね』

(そうだあの人もそんなこと言ってたな)

「もう!まってるらないや!」

レンは待ちきれずに階段をかけ降りだした。

ダダダダダダ!

大急ぎで階段を下りるレン。

何階か降りていったその時です!

ドン！

キヤッ！

イテテテ！

慌てて駆け下りた為、下の階から現れた人とぶつかり、

レンは大きく弾き飛ばされて転び、相手の人もしりもちをついてしまった。

「いったゝ・・・」

「ああ・・・ごめんごめん・・・大丈夫ですか？」

その人はレンを気遣い声をかけてきた。

「あ？ええ・・・だいじょ・・・あ！」

レンが顔を上げて相手の人を見てみると

それは昨夜エレベーターで一緒になったあの男性だった。

「いきなりだったから気がつかなくてごめんな」

「あ？はい！だいじょうぶです！こっちこそすいません！」

昨夜と今は違う姿・・・

レンは懸命に男口調で話した。

でも……

手に持っていた紙袋を転んだはずみで投げ出してしまい、

昨夜着ていた女性用の服が飛び出てしまった。

「あわわわ!」

レンは慌ててそれらをかき集めて紙袋に詰め込んで

「本当にごめんなさい!じゃあ僕急ぎますんで!」

そう言って、走り去ってしまった。

「あ！ちょっと！」

その男性は走り去るレンの後姿を見て呼び止めようとしたが、

レンはまったく気付かずに行ってしまうのだった。

「あ〜あ〜・・・えらい慌ててあいつ、これ落としていったよ・・・」

その人はレンの部屋の鍵を手に持っていた。

「でも？あいつの落とした袋に入ってたあの服は確か昨日の・・・？」

中東での窮地

「ハアハアハア あ~~~~びっくりした。いきなり昨日の人とぶつかるんだもんなあ」

そのまま駅まで走っていったレンは電車の中でまだ息を切らせていた。

(やばかったかな？服見られたし・・・ 昨日の今日だからな・・・
・なんかやだな・・・)

その時はまだ部屋の鍵を落としたことなど、まったく気がつかなかった。

.....

そのころ

日本から遠く遠く離れた異国の地で一人の男が彷徨っていた。

「はあ〜？どこだよ？ここ・・・」

その男は、長い長い地平線に続く道をひたすら歩いていた。

「まいったなあ、戻れたのはいいけど、どこにいるかなんてまったくわからないし・・・」

レンジのやつはペンダントをつけないのか、全然連絡も取れないし・・・」

化物に異次元へと連れ込まれた男が、ようやく異国であろう地に姿をあらわせていた。

照りつける太陽

どこまでも続く長い道

まわりにはまったくなくなにもなく、所持しているものも何もない彼は
途方にくれながら歩いていると、前方から1台の車が近づいてきた。

「あーラッキー！何とか乗せてもらおう！」

彼は大きなゼスチャーで近づくと車へ止まるように合図する！

「おおーい！止まってくれー！」

車はかなりのスピードで走ってきたため、手を上げる彼の前を通り
過ぎた。

「げー？行っちゃまうのかよー！」

と！その時

前を通り過ぎた車が少しして止まってくれた。

「おお！止まった！よーしー！」

喜んで車へ駆け寄り近づくと、中から4人もの男が降りてきた。

「あ………」

その男たちは各自手に拳銃を持っていたのだった。

（わっちゃん……やべーよ……それにここ中東？みたいな人達だし）

彼の読みどおり、次元のひずみから現世に戻れたのだが、

出れたのは日本ではなく、外国……

それも、内戦や反乱が続く中東の小さな国境付近だった。

「ksijjksaok... jdufkeisджа
jrranajak wasad!?!?!」

「iddsjaj ksa.jjff ks.jka uhdh
hkr!!!」

男達は各々外国語で大坂に怒鳴りつける！

「えー？なんだって？言葉全然わかんねーよ？」

「Wriu!!kusisi!!!!!!」

そして一人の男が、興奮気味に手に持っていた拳銃の弾装を確かめ
だして、

その銃口を向けた！

「うわ！ちよ！まって！やっべー！」

彼はとつさに体をその男へ近づかせて発射を阻止しようとしたが
周りにいた数人に押さえ込まれて両手を後ろで持たれ、ひざまづか
された。

「うぐっ！」

そして彼の横に拳銃を構えた男が立ちこめかみに銃口を当てた。

するとそのとき

「しゃーねーなー！もっ！」

彼はそう言うと目を閉じて、沈黙した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

拳銃を構えた男の動作が止まる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

大坂は黙ったまま動かさずジツとしていた。

「o o s a k a ? d u d h f a s j o o s a k a ? ? ?」

男は不思議な顔をして「おおさか？おおさか？」と繰り返した。

現世に戻れた彼は、この異国の男達に心の中から話しかけて

自分は「大坂」と言う日本人だと説明した。

そしてこの「不思議な力を持つ」オレを殺す事は出来ないと話しかけていた。

次に両手を押さえている後ろの男にも同じように問いかけだした。

「 d u u a f h j k . . . d s u f j ? o o s a k a ? o
o s a k a ? 」

大坂は自分のもつ不思議な力

それによってこの窮地を逃れようとしていた。

霊体に語りかける要領でコンタクトする為、その国の言語は関係しなかつた。

しかし直接魂に話しかけられた男達は強烈なショックを受けて大坂を見ていた。

彼らにとってもそんな経験などもちろん初めての事だった。

そして数人が話し合いだして、拳銃をひき大坂を車へ乗せて走り出したのだった。

「ふう〜、やばかったな〜 あれ普通殺されてるパターンだよな〜」

大坂は車の中で男達にまた直接話しかけていた。

どうやら男達はこの国境付近でテロを起こすグループの一員のようにだった。

そしてこんな道の真ん中で、無防備にも助けを求める大坂を不審に思い、

止まってはみたものの面倒がないようにすぐ殺してその辺に捨てていこうとしたのだ。

「勘弁してくれよ・・・殺してその辺に捨てるって・・・」

しかし大坂はその不思議な力のおかげで殺されずにすみ、

一旦アジトに連れて行く事になったのだった。

車は延々と走っている

大坂が乗り込んで、もう2、3時間は過ぎていた。

あたりは日も落ちだし、薄暗くなっていた。

その間大坂は男達とずっと話しこみ男達も彼に気を許すまでになっていた。

それほど、大坂のおこなっている

「魂に直接話しかける」は、人の心を揺さぶるほどのインパクトがあった。

車はそれからどんどん走り、真っ暗になるほど時間もたった頃

ようやくアジトに到着したのだった。

男達は車から降りて、大坂をリーダー達のいる部屋へと連れて行く。

そこは結構広くていろんな機器が並んでおり、パソコンのほかに

リーダーや軍事機類と思われるような物まで設置されていた。

男達は大坂を指差して、懸命にリーダーに説明している。

そしてそのまわりには15〜6人ほどの屈強な兵士らしき男が取り囲んでいた。

彼の超能力

そこでリーダーがいきなり怒鳴りだし、

大坂と一緒に来た男の一人を殴り飛ばした！

「i s d j s d k ! ! k f a k f k f o a k k n j d !
g e s g g !」

ガッツ！

その様子を周りは無表情で見ている。

大坂と同じ車でここまで戻った男達だけが、殴られた兵士にかけよっていった。

それ以外の兵士の中で一人の男がゆっくりと大坂に近づいてきた。

しかしそれに大坂はまったく見向きもせず、リーダーの方を見詰めている。

大坂の無言の視線が気に入らないリーダーがその兵士に合図を送った

その合図と同時に、男はいきなり大坂に殴りかかった！

ドガッ！！！

「うぐぐぐぐ！！！」

だが、いきなり殴られて苦しんだのは大坂ではなくその兵士だった。

男は殴りつけた自分の右腕を抑えてうずくまり苦しんでいた。

それを気にも留めずリーダーへの視線をはずしていない大坂は、

ゆっくり彼の魂へ話しかけた。

「だめだめ、俺には何も危害を加えられないよ……何なら拳銃で頭を撃ち向いてみるよ！」

そう心に直接挑発されたリーダーは、バカにされたのを怒るように

激怒して拳銃を手に取り大坂に向けた！

ダン！ダン！ダン！ダン！

銃弾は大坂めがけて4発発射されたのだが・・・

信じられないことにそのすべてが彼の身体の数センチ前で停止していた。

そして・・・

コトン！コトコトコトン！

そのまま床に落ちたのだった。

周りにいた兵士達やリーダーも、目の前で起こっている事が理解出来ずにいる。

そして大坂は啞然とするリーダーの近くに行き

自らの頭を直接リーダーの額に当てて言った。

「これが俺の力だよ。お前達では俺をどうすることも出来ない・・・

だからもう俺を殺そうとするのはあきらめなよ」

大坂は先の化物との戦いで、異次元の中でまた新たに不思議な力を手に入れていたのだった。

.....

一方場所は日本

レンはその日もサリナの事務所へ出向き撮影の為にスタジオ入りしていた。

ホストクラブ

「へ〜そんな事があつたんだ〜」

昨夜のエレベーターでの事と今朝ぶつかった事を休憩中に萌子さんに話をするレン。

「そーなんですよ。昨夜はレン女の子でしょ・・・で・・・今朝は男だし・・・」

「レン・・・んで？そいつはいい男なの？」

「え？なっ！？なに言ってるんですかー！」

そんな目で見てませんよ！まったくモコさんったら。」

「あははは〜、レンちゃんかわい〜ね。意識して見てたの丸わかりだよ〜」

「そんなことないですって！もー！」

萌子はレンに優しくかった。

あの事件から救ってくれたのは大坂かもしれないが、

今身近にいるレンは萌子にとってはそれ以上の存在になりつつあった。

.....

そして撮影も終了し、片付け中のレンに萌子が近寄り、「さう言った。」

「ねえ〜レンちゃん！」

「え？あ！はい？」

「今夜もちよっと付き合ってくれない？」

「えー！今夜もですかー!?」

「うん・・・ちょっといいお店見つけたんだ・・・」

「・・・えー?・・・でも・・・」

「なにいつてんの!業務命令です!」

「ああ〜ん・・・はいはい!わかりましたよ!

それで?今夜は何着て行けばいいんですか?」

「うふふ〜、かわいいな〜レンちゃんは　はい!今日は

これに着替えてね!」

満面の笑みを浮かべて萌子はレンに紙袋を渡した。

「じゃあ片付けがあと30分ほどかかりますから、1時間は待たないと駄目ですよ・・・」

「いいわよ!ただし40分ですべて用意してね」

「えー!無理ばっかり言ってー!もうー!」

「はいはい!そういつてる間に時間過ぎちゃっつよ!」

「わかりましたよー!はい!」

レンはいつも萌子のペースに巻き込まれてしまう。

しかしその強引さがレンには少し心地よかった。

大坂のいない寂しさを萌子は充分紛れさせてくれていた。

レンは大急ぎで片付けを済ませて、萌子に手渡された紙袋を持って着替えにかかった。

ゴソゴソ……

「今日はどんな服？ん？げ！超ミニじゃん！」

レンは嫌そうにしても、いろんな服が着れるのでこの瞬間が好きだった。

黒のタイツに脚を通し、白のタイトミニ

こんな姿で外出するようになるとは……

以前では考えられない事だった。

でもそれも萌子がレンを連れまわす為で、レンにはそれも嬉しい事だった。

「はあはあ……すいませーん！お待たせしちゃって……」

「あら、よく似合ってるわよ。ほんと、食べちゃいたいくらいかわいいわ。」

「え……お世辞でも嬉しいですよ。有難うございますー！」

「うふふふ、さあ行くわよー！」

そういつて萌子は車に乗り込みレンと一緒に走り出した。

「今日はご飯はもういいでしょ？」

「あ……はい。もうお弁当頂きましたから」

「じゃあ呑みにいこっか！」

「はい！」

しばらく走って車は、古い雑居ビルの駐車場へ入っていった。

いつもは高級店ばかりに足を運ぶ萌子にしては珍しく、

普通の安酒場が入り込んでいるようなビルだった。

「へえ〜、こんな所にもくるんだ・・・」

レンは少し不思議な感じで萌子に言った。

「そりゃあそつよ、私だって気に入ったところがあれば

こんな感じの所にもよく来るのよ」

エレベーターに乗り込み、5階まで上がって降りるとすぐにお店のドアがあった。

「さあ」

萌子はドアを開けて店に入ってしまった。

「あ……あの……」

「ん？どうかしたの？」

「え？いいえ……」

「うん？ここはそうよ、ホ・ス・ト クラブよ」

「えー？やっぱりそうですよねー！」

「つべこべ言わないの！さあ行くよー！」

「あーくん！待ってくださいよー！」

レンは萌子に手を引かれて店に引き込まれていった。

「いらっしやませ。」

店に入ると黒服の紳士が出迎えてくれた。

ホストクラブって・・・こんなの？

中は思った以上に広く、ゆっくりと座れる席がいくつもあった。

レンは始めてくるホストクラブに興味心身だった。

「わ〜〜〜すごい・・・思ったより綺麗ですね。」

「そりゃそうよ。私が気に入るんだから当たり前でしょ。」

「ボクはホストクラブっていったら、もっとこうなんか・・・」

「あはは〜、若い男が群がって騒いでて落ち着かなさそうだと思うんですけど？」

「うん・・・そうですね・・・」

「ホストクラブにも色々あってね、確かにそんなお店も多くあるわよ。」

でもここは違うの。ここは落ち着いて吞める静かなホス

トクラブなの」

「へ〜〜そうなんだ・・・全然来た事ないから

テレビとかで見たのしか知らないんですよ・・・」

「それにここね、結構いい男いるのよ〜」

「やっぱりそこですか！まったく・・・」

「当たり前じゃないの〜。レンも今日はいい男見つけて帰りなさいよ〜」

「な！バカなこと言わないでくださいよ！ボクは男ですよ！」

「シィ〜・・・そんなの言わなければあなたのこと男なんて誰にもわからないわよ・・・」

「でも〜・・・」

連夜のように萌子に連れまわされて、その度に女装しているレンは

もうすっかり女装外出にも慣れていたのだが・・・

それでもあらためてそう言われるとやはり嬉しくて、

いつまでもこのひと時が続けばいいと思うのだった。

「いらっしやいませ」

そういつている間に、レンと萌子のテーブルに男性ホストが二人やってきました。

「こんばんわ・・・あれ？そっちの人は？」

「はい、石川様。こっちは先月から新しく入った新人です。」

「ちょっと紹介しておこうと思ひまして。」

いつもの萌子のお気に入りのホストが、横の男を紹介しだした。

「はじめまして。竜也と申します。宜しくお願い致します。」

それまで顔を伏せていたその男が深々と頭を下げ、挨拶し、ゆっくりと顔を上げた。

「はい、いい男ね。こちらこそ宜しくね。」

レンはそのやり取りをする萌子に目を取られていたが、

挨拶をした新人ホストが顔を上げてそれを見た瞬間に
仰天した！

「あ—————！」

レンは思わず大きな声を上げてその新人ホストの顔を指差したのだ。
った。

「え？・・・」

薄暗い店内の中、そのホストはレンの方を見て不思議そうな顔をしていた。

「わ！やべー！」

次の瞬間レンはさっと自分の顔を伏せて

「ああ・・・なんでもないです・・・ごめんなさい・・・」

そう言って誤魔化そうとした。

「ん？ああ・・・ごめんね。この子ったらこんなお店初めてだから

なんか緊張しちゃってて。なんでもないわよ

「あ・・・はい・・・そうですか。わかりました。

では早速お飲み物の準備からさせていただきます。

「

「ええ、お願いしますね」

萌子はレンの様子をすぐに察知し、何もなかったかのようにその場を収めた。

レンと萌子のテーブルに、飲み物の準備をするホストたち。

その中の萌子のお気に入りホストが言った。

「おい、竜也は向こうのテーブルについてくれ。ここは俺一人でも大丈夫だから」

「あ、はい。わかりました。それでは失礼します」

そう言うと新人ホストはお辞儀をして席を離れた。

その新人が席を離れたのを見計らって萌子はレンに小さな声で話しかけた。

「も〜、レンだったら・・・で？なんなの？ あの新人見たことあるの？」

「え？・・・あ・・・はい・・・実は・・・さっき話してた昨日の・・・」

「えー！あの今朝も階段でぶつかっただっていう、同じマンションの人？」

「うん・・・多分・・・そうだと思います・・・」

「あははははは〜　　おつかし〜の〜　　運命だね〜これ
つて〜」

「もお〜！笑わないでくださいよ！

「こっちはばれないように必死なんですからね！」

「あ〜〜ごめんごめん。そっか〜ばれないようにか〜」

そう言うと萌子は不敵な笑みを浮かべてレンを見ていた……

それからしばらくなじみのホストと3人で楽しく雑談が進んでいた。

もちろんレンの素性は、そのホストにも明かさずに

萌子と同じ事務所の新人ということに通していた。

「そうですか。レンさんも石川さんと同じ事務所なんですか」

「あ……はい……」

「サリナさんほどの売れっ子になると、そのまわりの方も大変でし
ゃうね。」

「あ……あの……あ……はい……」

（もぉ〜ほんとホストってよく喋る！もうちよつと静かにできな

いかな？

っていつか！レンにあまり喋らせないでよ！モ

ー！)

その少し困っている様子を、横で何も言わずにニヤニヤして見て楽しむ萌子がいた。

「あ！ちよつとごめんね。私トイレに行ってくるね」

しばらくして萌子は急に何か思い出したかのように席を立ち

それとほぼ同時にホストも席を離れた。

レンは一人取り残された状態になってしまった……

レンの鍵の行方

キヨロキヨロ・・・

ドキドキ・・・

一人にされたレンはどこか落ち着きがなかった。

その時トイレに立った萌子は、通路で馴染みのホストを呼び出していた。

62

「はい？どうされました？」

「あ、うん。あの私の連れのおねえさん。最初に紹介してくれた・・・

あの・・・え〜と？竜也くんだったっけ？」

「え？あ！はい。竜也ですか？」

「そう！竜也くんが気に入ったんだって。」

だからすぐに彼にテーブルについてもらいたいのよ。」

「あ~~~~はい。わかりました。すぐにそう伝えます。」

「ありがとうね~~~~。私はもう少しここから見てるわ。ウフ」

萌子はわざと席に戻らず、少し離れた椅子に腰掛けてレンの様子を伺っていた。

一方レンは

（これだけミニだと気をつけないと座ってるだけでパンツ見えちゃうよ……）

モジモジ……キョロキョロ……

着慣れないミニスカートを気にしながら

「はあ〜おそいな〜モコさん・・・なにしてんのかな〜」

そう呟いていると、一人の青年がレンのいるテーブルへやって来た。

「お待たせしました。竜也をご指名どうも有り難う御座います」

彼はレンの前でひざまづいて、深々と頭を下げた。

「へ？！ご指名？！？？ りゆうやー！？！？！？」

離れた席でその驚きようを見て大笑いする萌子。

「ウッププププ！あの慌てようったら〜！あ〜可笑しい〜！あつはははは〜」

面白いからもつ少し様子を見てやる〜と「と

カチャカチャ・・・

「水割りのおかわりをどうぞ」

竜也はとても上品に飲み物を勧めて、話しかけてきた。

「先ほどお連れれの石川様からお聞きしました。

レン様が私を気にいってくださっているとか・・・本当に有難う御座います」

「な？なにー？あ・・・いや・・・なんですって！もおー！あのモ
コめー！」

事情を察したレンはつい顔を上げて萌子を探して周りを見渡した。

その様子を見ていた萌子は、もう可笑しくて笑いが止まらなかった。

「うひゃひゃひゃひゃひゃ～あ～～はははは～おっかし～」

周りを見渡すレン！

その上げた顔をマジマジと見る竜也

「ん？？？あれ？？？あの・・・レンさんって」

「え？あ？？はい？？？」

慌てて顔を伏せようとするレン。

「レンさんってどこかで会いませんでしたっけ？」

ドッキドッキドッキドッキ！

「え〜〜そんな事ないですよ・・・なんか勘違いしてるんじゃないかな
いですか？」

伏せるレンの顔を下から覗き込む竜也。

(わ〜〜覗き込まないでよ〜!)

下から見られないようにに プイツ!と横を向くレン

「ああ・・・すみません・・・そうですか〜勘違いかな〜・・・」

竜也はそう言って覗き込むのをやめた。

(ホッ!よかった・・・)

「いや〜〜なんかね・・・レンさんってうちのマンションにいる人に似てたんですよ」

「え?」

「あ・・・その人は男の人だから・・・」

ドッキーーー!

「昨夜会った女の人もレンさんに似てるかなって思ったんだけど

髪の毛の長さも色もスタイルも違うしね」

(わ〜〜〜やばいよ〜〜疑ってるかも・・・)

「今朝会った男の人もレンさんに似てたような気が・・・」

ドキドキドキドキ・・・

「でもそれは男の人だからもつと違いますよね」

レンはニッコリと笑って竜也に言いった。

「そりゃ〜そうですよ。私は女だからね」

「あははは〜すいません。くだらないこと言っちゃって」

「いいえ、いいんですよ」

「でも今朝の人困ってるだろうな・・・」

「え??？」

「あ・・・いえね・・・今朝ぶつかった男の人ね・・・」

その時に家の鍵を落としていったんですよ・・・」

「え??？鍵?・・・」

「ええ。そのままにしておくのもなんだし、管理人さんは連絡つかないし」

・・・
「僕も困ってるんですけど、鍵はまだ持ったままなんですよね」

「ええー!!!!鍵を落としたのー!!!!」

レンは慌てて自分のかばんを開けて、中を探り出しました。

ガサゴソガサゴソ・・・

「ない！ない！ない！ほんとにないや・・・」

「え？レンさん？なにしてんですか？」

「え？だってー！今鍵落としたから持つてるって言ったじゃあないですかー！」

「ええ、言いましたよ・・・今朝男の人がってね・・・」

「ウグッ！・・・」

「ええ、それでなんでレンさんがそんなに慌てるんですか？」

「あ・・・いや・・・それはその・・・」

レンがうるたえているとそこへ萌子が帰ってきた。

萌子にはらわねる？

「あ~~~~すつきりした〜 最近便秘だったからもう大量よ！た
いりょう〜」

「あー！もおーモコさん！何が大量ですか！

レンが困るのわかってて仕組んだでしょー！」

「え？なんのこと？」

「とぼけないでくださいよ！竜也さんをこのテーブルに行くように

頼んだのわかってんですからね！」

「あれ〜？まっきは竜也さんカツコイイなんて言ったの誰だっけ
」？」

「えー？そんなの事レン言ってますんよー！」

「あははは、まあまあレンさんも落ち着いて下さいよ」

「だってー！モコさんったら・・・」

「でもちよつとショックだな・・・せつかくこんな素敵なレンさんに気に入られて

呼んで頂けたと思ったのになあ・・・」

「え？あ？・・・ごめん・・・なさい・・・」

「アハハハ・・・うそうそ、うそですよ。ショックて言うのはウソです。」

「え~~~~~?」

「でも、レンさんが素敵でかわいい女性だと言つことはほんとです」

「なっ？……………」

「それに、僕がガツカリしたと言ったらすぐにゴメンナサイなんて・
・

そのかわいくて優しいところなんか僕の心はもうレンさんに夢
中になりそうですよ……………」

「ばっ！バカなこと言わないでよ！」

カー……………

（なに！このひと？よくまあこんな恥ずかしいことを……………）

「あははははー！レン真っ赤になってるー！」

「まあ……………モコさん……………レンもう泣きそうですよ……………」

「あはははは、うめんうめん。。。で？何の話してたの？」

「あ！そつだ！鍵！」

「え？かぎ？」

「ええ、僕が今朝ぶつかった男の人の家の鍵を」

まだそのまま持つてる

って話してたんですよ

「え？ぶつかった人の家の鍵を？」

「ええ、そしたらレンさんが急に自分のカバンの中を確認しだしましてね・・・」

レンは下を向いたまま口をへ字にして泣きそうな顔で萌子の方を横目で見ていた。

「ぶっくん・・・じゃあもしそれがレンの家の鍵だったら、

今日はレン家に入れないんだ……」

萌子はニヤリと微笑みながら言った。

（あ……モコさんまた何か考えてる……）

「あ〜〜竜世くんね〜」

「え？はい？なんですか？」

「実は本当のことというところの子ね〜」

「え？」

「わーーーー！ちょっとーーーー！モコさん！いつちゃ！ダメダメー
ー！」

「あなたは、ちょっと黙ってなさい！」

萌子はレンの頭を上から押さえつけて手で口を押さえて言った。

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……！」

もかくレンを無視して、萌子は竜也に話し始める。

（うえ〜〜ん、かんべんして〜〜モコさんばらさないで〜〜）

「なんですか？石川様」

「実はこの子に聞いたんだけどね。あなたと昨夜エレベーターで会ったんだって」

「あれ？・・・やっぱり昨夜の女の人はレンさんだったんですか？・・・」

でも、髪の毛の長さも色も違いますよ……」

「ああ〜それは、女の子は色々と変身しちゃっからね。」

そこんところはあまり気にしないの!」

「ふ〜ん……そうなんですか〜」

「ええ、それでね……今朝ぶつかった男の人は……」

「づいづいづいづいがくわっ!」

レンは必死で萌子の言う事を遮ろうとするが、萌子はそれをさせない!

「あの人はね、実はレンちゃんの弟なのよ」

「え?弟?姉弟?ですか?」

「そうなのよ……。それも双子なんだよ」

「あぐわー！ぶぐ？・・・ぶが？」

「えー！そうなんだ！どつりでよく似てると思いましたよ」

「だからその鍵を返してあげてくれないかな？」

「あ〜はいはい。そういう事ならわかりました。」

レンさんに返しておけばいいんですよね

「ぶはあっ！！」

ようやく萌子の押さえつけから解放されたレンが、言った。

「はいはい！弟なんですよ！あれおとうとー！ごめんね、」

鍵拾ってくれてありがとうね！

「いえ、いいですよ。同じマンションですしね。」

僕もどうしようかと思ってたんですよ。

はいどうぞ」

竜也は鍵をレンに渡そうとした・・・

が！

その時その鍵を横から萌子が サッ！っと奪い取ってしまった。

「え？」

「あ？」

「だめだめ〜、まだそんな簡単に渡してはだめだよ〜ん」

オンナノコとして扱われ

「えー？なぜですかー？」

「竜也くん！あなたね〜」

「はい？」

「レンが双子の姉弟で、その弟があなたとぶつかって鍵を落とした
んでしょ？」

「ええ、そう・・・ですが？」

「でもそれはあくまでここでの話だけでしょ？」

「はい、そうですね」

（なに？なにを言おうとしてるの？この！バカモエコ？）

「その男の人はレンと似てるけど、もしかして違う人かもしれないじゃない？」

「え？・・・」

「うっっん？・・・」

「それにレン！」

「あ・・・はい？」

「あなたね、弟が鍵落としたのはわかるけど、あなたはなぜ今鍵持ってないの？」

「え？あ？あの？・・・それは・・・」

「あなた今日は鍵持ってくるの忘れたんでしょ？」

萌子はレンにウインクして合図を送った。

「だから弟に連絡して、鍵開けて貰おうと思ったんでしょ？」

「う……はい……」

「でも弟が本当に落としてるんだったら、

連絡してもだめだし、2人とも今日は家に入れない
わよ」

「ええ……まあ……そ……なんですけどね……」

「だったら尚更……！鍵返してくださいよ……！」

「レンはもういい！黙ってなさい！」

「ええー？」

「竜也さん！あなた悪いけどこの後の予定は？」

「はい？このあとですか？」

「だからね、あなた今日は何時にあがりなの？」

「え？ええ、もうすぐあがれますよ。今日は早出だったからあと30分ほどで終わりです」

「そう、それならちょうどよかったわ。あなた仕事終わったら

レンと一緒に家まで行って鍵が合うのか
確認しなさい！」

「え？家まで行ってですか？」

「ええー……？……！！！」

「ええ、そうよ。鍵が合えば問題ないけど、合わなかったら、この子が困るじゃない」

「こまらない！こまらない！！！」

「あなたが拾ったあつかあわないかわからない

鍵を、初対面のレンに渡すのって無責任じゃあないの？」

「はい！そりゃーそうですよ。そのとおりだ！僕がつかつでした。ゴメンなさい、レンさん」

「なに納得してんのよ！この男は！その鍵あたしのだってー！

かえしてよー！エー！ーん……

「いえいえ、やっぱりそんな無責任なことは出来ないですよ！レンさんの家まで行って

ちゃんと合つのかどうか確認します！」

「そうよ、それでこそ男よ。じゃあ頼んだわよ」

「はい！わかりました。レンさんはここでちょっと待っていてください。

もうそろそろ時間なのであがる準備を

してきますね」

「そう、じゃあ私も明日早いからもう帰るわ。レンは竜也くんと一緒にね」

竜也はサッと席を立てて奥へ入っていった。

「も！こ！さ！ん！！！！」

「あははは〜、どう？うまく誤魔化したでしょ？」

「なにがうまくなんですか！全然うまくじゃあないですよ！」

「あら？どつして？」

「だって、すんなり鍵を・・・」

「あなたね〜・・・あの状況でどうやって鍵を返してもらえるの？」

「え？それは・・・」

「私は今朝ぶつかった男の同一人物なんです！って、正直に言

うつもりだったの？」

「……………」

「だから私が機転を利かせてあげたんでしょ？」

レンは口を尖がらせて、何か納得いかない表情だった。

「でも……家まで来るって……」

「そりゃーそうよ、そうしないとなんか不自然だもん。」

それに、あんないい男とって食っちゃいなさいよ

「ばっ！なに言ってるんですか！そんな事したらモロばれじゃあないですか！」

「あははは、冗談よ冗談！鍵が合ったらすぐにお礼言っ
てもらったらいいのよ」

「う……うん……そうなんだけど……」

「あれ？それともレンちゃん、なんか期待してたりして？」

「ちがいますよー！そんな訳ないじゃあないですか！」

「そつでしょ？なら何も心配いらないじゃないの？」

とにかく私はもう帰るよ。あとはしっかりやり

なさいよ〜」

「はあ〜・・・そんなにうまくいくのかな〜・・・」

「じゃあね、また明日。明日はあなたもまたうちの撮影チームに入っているから遅れないでね」

「あ・・・はい！お疲れ様でした！」

レンはお店を出て行く萌子に小さくお辞儀をして見送った。

そのあとしばらく一人で待つレン。

(あ・・帰る前に・・トイレに・・)

そう思って、レンはトイレに行った。

(やっぱりこの格好じゃあ、女子トイレだよね・・)

レンは少し躊躇しながらも、女子トイレにはいり、

その個室でスカートをあげて便座に腰を下ろす。

(大丈夫だよね・・そう・・すぐ帰ってもらえばいいんだよね)

レンはさっきの事を思い返していた・・

(あなたあの状況で何て言って鍵返してもらったの?)

(たしかになあ・・なんてって・・あ！)

あの時竜也さんは鍵を渡そうとしたわ

よね・・・)

「あー！ー！ー！ー！ー！それをあのバカモコが横から奪って！くっそー！やられた〜・・・」

トイレで大きな声を出して悔しがるレン・・・

すんなり返してもらえそうなのを萌子に嵌められた事によつやく気がついたのだった。

トイレから出ると、竜也はもう支度を済ませてレンの来るのを待っていた。

「ああ〜、ごめんなさい。待たせちゃいましたね」

「いえいえ、僕も今準備が出来たところですよ。じゃあ行きましょうか？」

竜也はそう言うとレンの前を歩いてお店を出た。

レンはそのあとをついていく。

竜也はサツと扉を開けてレンを外へ招きだし、エレベーターの扉が開くまではレンを後ろに。

開くと先にレンを乗せた。

(なに? なんなのこれ?)

「あの・・・あまり気を使わないで下さいね」

「はい? なんですか?」

「いや? さつきからなんかレンをエスコートしてるよつで」

「あゝ、そんなこと気にしないで下さい。かわいい女性にはいつもごじつですよ。」

(げー! 誰にでもそんなことしてるんだ!)

はずかしい・・・

はずかしい……

かわいい???

だれが???

レンのこと???

竜也さん……レンを意識してエスコートしてるの？

なんでもない竜也の仕草が、レンには気になって仕方がなかった。

キス！キス！キス！

外に出て、すぐにタクシーを捕まえる竜也

「どござ」

ドアが開いてそこでもレディーファースト

レンは竜也のその気配りに快くし、車の中でも彼はレンを退屈させなかった。

「なんか不思議な感じですよね」

「え？なにがですか？」

「だって、さっき始めて会った・・・あ・・・いや・・・違うか・・・

・昨日会ってたんだ・・・」

「ああ・・・そういう事ですか・・・」

「ええ。それがもうこうして一緒に車に乗って話してるんですけどね」

「本当にごめんなさいね・・・」

「え？どうしてです？」

「だって、レンが・・・じゃあないや・・・弟がドジで鍵落とさなければこんな迷惑

竜也さんにかげずにすんだのに・・・」

「なにが迷惑なもんですか。僕はすごく喜んでるのに・・・」

「え？なに？どうしてですか？」

「昨夜エレベーターで会ったあなたに、すごく心揺らぐられて、

んです」

今日も朝からまた会えないかとずっと思ってた

「えー！？」

「お店に來られた時、すごく似ててもしかして！なんて期待して・

でも髪型違うし別人か〜ってガツカリしてたらこんな展開になって・・・」

「あ・・・いや・・・でも・・・」

「レンさん！」

「あー！はい？」

「僕はこの鍵がレンさんの家の鍵であることを祈ってます。」

「・・・・・・・・・・」

竜也はレンの目をじっと見つめて話している。

「やばいな〜〜．．．まいりましたよ．．．」

「え？なに？」

「こりゃあ確実にレンさんに一目ぼれしちゃいましたわー！」

ドッキーン！！！

(なんだ？なに？何でこんなドキドキしてるの？)

恥ずかしいセリフを、恥ずかしげもなくサラッと言い放つ竜也。

その屈託のない笑顔で見つめられるレンはどんどん彼の術中にはま
っていくのだった。

．．．．．

そして車はレンの自宅マンションへ到着した。

二人はすぐ降りてエレベーターに乗り込みレンの部屋の階へ向かった。

時間は夜中12時過ぎ

部屋の扉の前で、早速鍵を取り出す竜也。

彼はレンの顔を見て、サッと鍵を差し込むと

カチャリ！

鍵はすんなりと開いた。

「やった！やっぱりそうだったんだ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レンはすぐさま扉を背にして竜世の方を向いて言いつた。

「あ……有難うございました……」

「え？あ……いえいえ……よかったです。やっぱりそうだったんだ」

「ええ、本当に色々ご迷惑をおかけして……」

「そんな事ないですよ、それにまだ弟さん戻ってないようでよかったですね。」

「え？ああ……はい。もうすぐ戻ると思います……」

「ほんとうによかったです。それじゃあ僕はこれで……」

ホッ・・・

レンは内心ドキドキしていた。

申し訳なく思っている、お礼に上がってもらってお茶でもなんて
言える筈もなく・・・

竜也はくるっとレンに背を向けて進みだした。

レンも竜也に背を向けてドアのノブに手をかけて

扉を開いた時！

いきなりレンの両肩に二本の手が伸びてきた。

「え？」

後ろからグッと抱きしめてきたのは一旦去ったかに見せた竜也だった。

レンは背後から竜也に優しく抱きしめられた。

「あ……ちょ！ちょっと待って……」

レンはそれを拒もうと身体を揺すって言おうとしたが、それを遮るように竜也が話す。

「いきなりごめんなさい……でもほんの少しだけ今日のお礼とと思って……」

「なに？え？アン……だめだって……」

レンがそう言うと同時に竜也はサッとレンの向きを変えさせてすばやく唇を奪った！

「んんん！」

部屋の扉はレンが開けてしまった為キスをされた体勢のまま二人は部屋の中へ……

バタン！

二人が入ったあと、扉は閉じてしまった。

「んんんん……」

玄関で竜也のキスは続く

(んん……だめ！やばいって！……)

レンがそう思った時、ようやく唇を離れた竜也が言いつた。

「ごめん……どうしても……我慢できなくて……レンさんとこっしたくて……」

レンはそのキスで我を忘れかけていたが、すぐ正気に戻り扉を開け

て竜也を外へ押し出した。

「あ……あの……今日は本当に有難うございました。それじゃあ私明日もまた早いのでこれで……」

そういうとレンは扉を勢いよく閉めて

カチャリ！

すぐに鍵をかけた。

「ハアハアハアハアハアハア……」

ドキドキドキドキ……

（ヤダ……心臓が破裂しそうなくらいドキドキしてる……）

すつと覗き窓から外を見ると、もう竜也の姿はなかった

なに？

なんなの？・・・

女の子の姿で外出して、萌子と一緒に食事をする。

そんな日が何日も続いていたレンだが、今日はいつもと違っていた。

いつもは自分の事を知っている萌子と一緒になので何も感じなかったのだが

この帰宅時は完全に女性として扱われて最後にキスまでされて・・・

ドキドキするレンは竜也の顔を思い浮かべていた。

レンの顔は真っ赤に紅潮して、なぜか頭はボーっとなっていた。

「ハアハアハアハア・・・」

（ヤダ・・・ボク・・・竜也さんにもっと・・・期待してたの？・・・）

レンは玄関から動けずにスツと自分の股間に手を当てた・・・

(ア・・・濡れてる・・・)

女性として扱われる事に喜びを感じて、その帰り道ですでに興奮状態だったのだ。

変化

「ア・・・ヤン・・・ダメ・・・」

レンは自らスカートをあげて股間を弄りだした。

声押し殺し・・・

外出していた女性の姿のまま・・・

竜也にまるで強引に組み伏せられるかのように・・・

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

目にクマを作ってボーっとした顔のレンがいた。

「ああ〜・・・ もうサイアク！」

ウィッグをはずしてもレンの髪は肩まであるので、それをクシヤクシヤにして掻きむしる。

（なんで？あんなことを想像して・・・しちゃったんだろ？）

レンは昨夜のことが頭からはなれなかった。

竜也にいきなり不意を突かれてされたキス・・・

（あれも拒もつと思えばもっと拒めたんだよね〜）

でもそのあと・・・

まさか自分が竜也に無理やりされることを想像しながらしてしまうとは・・・

レンはものすごい嫌悪感に襲われていた。

「あ？もうこんな時間だ・・・」

しかし仕事へ出る時間に気がついたレンは慌ててその準備にかかります。

髪の毛は後ろで一つに結び、ジーンズは細身のレディースものでTシャツにジャケット

そんなラフなスタイルで出かけようとしてレンは自分のカバンの中の蒼いネックレスに気が付いた。

「あ……」

昨日のキスが頭から離れないレン……

（大坂が知ったら怒られるだろうな……）

そう思ったレンは、大坂の事を思いながらそのネックレスを首につけた。

ドクン！

大坂の事を思って昨日の事を頭から消し去りたいレン……

ネックレスをつけた瞬間に身体が熱くなった。

ドクン！ドクン！

レンはネックレスを手で押さえながら目を閉じて鼓動が収まるのを待った。

「フゝ・・・」

しばらくしてようやく落ち着いたレンは、ネックレスをTシャツの中に隠して玄関を出た。

（久々にこれつけると・・・やっぱりなんか変・・・だ・・・すごく身体が熱いし

動悸も激しいや・・・前はこんな感じじゃあなか

ったのになぁ・・・)

その違和感が後にレンの運命を大きく変えることとなる・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

エレベーターに乗り込みマンションの入り口まで出たところで、そこで一人の男が待っていた。

「あ・・・」

「やあ、おはよう！」

それは昨夜のように着飾った姿ではないラフなジーンズにTシャツ姿の竜也だった。

「お……おはようございます……」

レンは小さな声で小さく会釈しながら竜也を見た。

「あ……昨日は鍵……有難うございました……」

「いや、いいんだよそんな事。それよりさ、お姉さんはもう出かけたの？」

「え？……」

「おねえさん、まだいるの？」

「あ……いえ……もう早くに出かけました……」

「ふ……ん……そうか……残念だな……」

「それじゃあ僕はこれで……」

「あー！ちょっとまってー！」

竜也は行くこうとするレンの手を掴んで呼び止めた。

「いったあい！」

そして彼はレンを強引に引き寄せて顔をマジマジと近くで見た……

「ふ~~~~ん……」

「なんですか？離してください！いたって！」

「あ……ごめんごめん……いや……それにしてもよく似てるな~~~~って思ってたね……」

「……」

「姉弟でも似すぎじゃないの？　なんだか同一人物みたいだよ」

「当たり前ですよ！双子なんだから！」

レンは掴まれている手を振り解いて、サッと身体を離し駆け去った。

「あーちょっと待って…… あゝあ……行っちゃったよ……

それにしても……双子ね……双子って

匂いまで一緒なんかね……」

竜也は走り去るレンの後姿をジッと見つめていた。

「ハアハアハアハア……なんだよもう……」

駅に着いたレンは息を切らせて電車を待っている。

(やばいよ……なんか疑われてる?)

レンは竜也のその言葉が気になっていた。

「なんだか同一人物みたいだよ・・・」

(どうしよ？住んでるところも知られて・・・どこまで誤魔化せるんだろ？)

レンは不安になりながら仕事場のスタジオへ到着した。

「おはようございますー！」

大きな声で挨拶して仕事場へ入るレン。

そしてすぐに萌子の所へ向かった。

コンコンー！

「ぶじぞ」

ガチャリ！

「おはようございます」

「ああ、レンちゃん昨夜はどうだったの？鍵はちゃんと合ったの？」

「もぉ〜！モコさん！たのみますよ〜・・・」

いきなり涙声で萌子に詰め寄るレン

「え？なに？どうしたの？」

レンは昨夜の事をすべて萌子に話した。

・・・

「あははは〜 そうなんだ〜。キスされちゃったんだ」

「笑い事じゃあないですよ！ほんとに大変だったんですから！」

「ああ〜ごめんごめん！でもさ〜、レンちゃんも結構楽しんでたんじゃないの？」

「もー！そんな事ないって！」

ドクン！

「あ……」

「あっはははは……あ？え？なに？どうしたの？」

「あ……いえ……なんでもないです……」

「なんなのよ……早く言いなさい！」

「いえ……あの……幽霊がね……」

「え？」

以前もそうだったように、大坂にもらった蒼いネックレスをつける
と、

不思議な力がその人に宿り霊が見えて触れたり話せたりするの
だった。

「今その壁をすり抜けてこの部屋に入ってきましたよ」

「もー？なに言ってるのよ！レンツたら！私はそんなことで怖がっ
たりしませんよ！」

「アハハ・・・信じなくていいですよ・・・」

レンはこの仕事場へくる途中でもいくつもの霊に会っていた。

「ねえ・・・レンちゃん・・・そんなことより・・・」

「え？なんですか？」

「あなた今日は何かしてきてるの?」

「はい? なにかしてきてるって? なにがですか?」

「あのね・・・こう言うてはなんだけど・・・あなた今日はいつもと全然違うよ・・・」

「ええー? なになに??? なにがちがうの?」

「あなたね・・・どう見ても女の子に見えるよ・・・」

「えー? オンナノコ?」

レン大改造

ジーンズは確かにレディースだけど、他のジャケットやTシャツはいつものようにメンズだから今日だけ違うところはないはず……

萌子は壁の鏡を指差して言った。

「ほら！その鏡で自分で見てごらんよ」

レンはそつと鏡の前に立って自分を見た。

「……………」

そこには見慣れたいつもの自分が写っているのだが……

「これのどこがいつもと違うんです？……か？」

「あのね……あなたにはわかんないのかもしれないけど、まず体

系も丸みを帯びて

女の子そのものよ。それに髪の毛も細くてサラサラだしそんな綺麗な男いないよ……」

言われてみて始めてその変化に気付くレン

所々を見れば明らかに昨日までの自分と違っていた。

お尻もいつもよりふっくらと盛り上がっている。

そして何より……

「ほお~~~~ら!これはなに?」

「きゃー!」

萌子はレンの後ろから手を入れて胸を掴んだ。

「あなたね・・・こんなに胸の腫れた男いないって・・・」

ドキドキドキドキドキ!

萌子はレンの胸をもみながら続ける。

「まったく・・・女性ホルモンとるなら相談してくれればいいのに・・・いいお医者さん紹介するよ。」

「違いますよ!ホルモンなんてとってませんよ!」

「じゃあこの胸はなんなの?それ以外ないでしょ?」

昨日と違う・・・

昨日と違うこと・・・

「どついたのレンちゃん……」

レンはTシャツの上からネックレスに手を当ててジツとして考えた。

「きつとそうだ……これね……大坂がくれたこれ……」

「なんのことよ？わかるように説明して……」

「レンにもよくわかんないけど……このネックレス不思議な力があるんです。」

幽霊が見えたり、大坂と話せたり……」

「えー？そうなの？って……バカバカしい！そんな事あるわけないじゃない！」

「ほんとうですよ！だから前の事件の時もレンは大坂の所まで行けたし、

それにサリナさんもこのネックレスに反応してたでしょ？」

「あ……それはそう……だよね……でも……だから
って何でそれで

レンが女の子みたいになっってくるの?」

「だからー!レンにもよくわかりませんよ!多分……だけど……

大坂の思いがそうさせるのかも……」

「え?大坂君の思い?」

「うん……だって大坂はやっぱりレンにかわいい女の子になっ
てほしいだろうし……」

だからこれを付けると、身体が女性化してくるのかも……」

「ふ〜ん……なんか……漫画みたいな話だね……でもいい
じゃん!

レンも女の子みたいになれて嬉しいでしょ?」

「そんな簡単にいきませんよ!だって周りの人はみんな

香川レンジって男で接してくれますもん……」

「ああ〜じゃあさ〜オカマのレンジでいいじゃん！あははは〜」

「もういい！萌子さんにはもう相談しないで！」

「あははは〜ごめんごめんって！わかったわ、私が何とかしてあげるわ！」

「え？なんとかって・・・」

「私に任せときなさいって！」

レンは不安で仕方がなかった・・・

（なんかいやな予感がするな〜・・・このパターンでうまくいったことないもんな〜・・・）

萌子はレンを残して一人部屋を出ていった。

.....

それから10分ほどして戻ってきた彼女は、レンに言いつた。

「あなた今日はもう上がりよ」

「え？あがりつて？」

「帰る準備をしなさい！」

「えー！まだ来たばかりで何もしてないですよー！」

「いいの！あなたとこの社長にはちゃんと言ったから。今日は有給扱いしてくれるって。」

「有給って……レンまだ正社員でもないのに……」

「ブツブツ言っていないで付いてきなさい！」

「あ！待ってくださいよー！」

萌子はそついつと部屋を出て、まるで人目を避けるかのように早足で

非常出口から地下の駐車場へ向かった。

「早くきなさいー！」

「ハアハア……早くって……モコさんが早すぎ！」

駐車場へ降りた二人はすぐに萌子の車に乗り込み走り出した。

「ねえ、萌子さん……今日は仕事休んでどうするんですか……？」

「あのね・・・これから今日一日で、あなたを女の子にしちゃうのよ」

萌子は小悪魔的な笑みを浮かべながら運転している。

「ふうん・・・レンを・・・女の子にね・・・」
「・・・レンを？女の子って？」

「そうよ？最近よく仕事帰りにやってるでしょ？」

「あ・・・いや・・・よくやってますけど・・・何で休んでまするんですかー？」

「うん、まず美容院行ってね、ちゃんと女の子の髪型にカットしてもらって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それからエステに行つて、そのあと洋服も揃えてあげるね。」

「エステー？ 洋服ー！？」

「そうよ。これからはもう毎日ずっと女の子でいなきゃいけないんだから」

服もたくさんいるでしょ？」

「いや・・・ちよつと・・・ずっと毎日って・・・よくわかんないんですけど・・・」

「あなたね、今のあなた鏡で見たでしょ？」

「あ・・・はい・・・」

「昨日までオトコだったあなたが、急にそんな外見になってたら

まわりの人になんていうの？ 今日からオカマちゃんになりましたたぐっていう気？」

「いや・・・それはその・・・まあそれでもいいかなあ〜って・・・」

「うん・・・それでもいいかなあ〜って！ ばか！ ちがうでしょ！

そうするよりもっといい方法があるのよ」

「なんですか……？いい方法って……？」

レンはなんとなく萌子の企てが読めてきていた。

「あなたちょうど今竜也君に双子の姉がいるって言ってるでしょ？」

「ええ……まあ………ハア」 やっぱりそこにきますか……」

「なんだ〜わかってるんじゃない！それなら話は早いわね」

「でも無理ですって！そんな完全に女性として働くなんて……」

「無理じゃあないわよ、周りのスタッフには香川君の双子のお姉さんとして

紹介するし、あなたの所の社長にはもう全部OK貰ってるよ」

「えー？ 社長知ってるんですかー！？」

「うん・・・あの社長さんには気をつけるのよ・・・」

「え？」

「あの人ね・・・男でも女でも何でもOKな人だから」

「あうあう・・・」

「ん・・・どうしたの？」

「どつりでやたらとお尻触ってきたり、後ろからギュッと抱きつかれたりしてたんだ・・・」

「あはははは~~~~やっぱりだ~~~~あなたモロに狙われてるよ~~~~」

「~~~~」
「・・・そうだったんだ・・・」

「まあとにかく社長はうちの言うことなら何でも聞くしそれにサリ

ナさんが大賛成してたわよ」

「え？サリナさんが？」

「うん。サリナさんもレンちゃんがかわいくなるんだったら協力するって」

「へ〜〜そうなんだ・・・サリナさんも・・・」

「ねえねえ・・・そんなことよりさ〜・・・」

「え？なんですか？」

「そのネックレスね・・・ワタシにもつけさせてくれないかな〜って・・・」

「あ・・・いいですよ。」

レンはそついつとサツと首からネックレスをはずした。

「あ・・・」

ネックレスをはずしたとたん、それまで感じていた動悸や

身体が火照るようなものがなくなったのだった。

（やっぱりこのネックレスの力で身体が女性化してたんだ・・・）

萌子はレンがはずしたそれを手に取り、運転しながら自分の首へかけた。

カリスマ美容師

「ふ〜ん・・・これがね〜・・・」

萌子はしばらくそのまま運転を続けていた。

「何にも変わらないよ・・・ほんとにこれにそんな力があるの?」

「いやいや、何にもって・・・萌子さん女ですから・・・それ以上どう女性化するんですか・・・」

「え〜?どう女性化つて〜・・・その・・・もっともっとお色気が出て、バストもボ〜ンって!」

「あははは〜そんな事なるわけないでしょ〜」

「ふんっ!〜!〜!」

レンに笑われて悔しがる萌子……

だがその時！

キキキキイイーーーーー！

彼女は突然急ブレーキを踏んだ！

「きゃー！」

突然のことにレンも驚いて

「どうしたんですかー！きゆうにー！」

「ごめんー！いまね！急に前に子供が飛び出してー！」

「えー！？それでその子はー？」

「ひ・・・ひいちゃった・・・たぶん・・・」

「た！大変じゃあないですか！」

レンはすぐに車から降りて後ろを確認する

続いて萌子も車から降りてきたが・・・

まわりを見渡すレン

「誰もいませんよ・・・」

「あー！あなた大丈夫なの？」

萌子は誰もいない場所に向かって叫んでいた。

「ねえねえ！あ！ちょっとまって！いかないでー！」

誰もいない方に手を伸ばして必死に呼び止める萌子……

レンはようやくそれがネックレスによって萌子にだけ見えている

霊の姿だということに気が付いた。

「あ……行っちゃった……」

「萌子さん、それがね……幽霊なの……」

「え？幽霊？い……いまのがそうなの？」

「まわりを見渡してください……何か見えませんか？」

そう言われて周りを見渡す萌子。

「まわりって・・・あ・・・あの人が何？」

「何か見えました？」

「あそこでジッと見つめてる女の人があるよ・・・」

「それでネックレスをはずしてください」

言われてはずしてみると・・・

「あ！・・・消えちゃった・・・」

レンは萌子の手からネックレスを取って言った。

「これでもう信じてくれますよね。これはあの大坂が自らの力を分け入れたネックレスです」

「うんうん・・・本当に不思議だよね・・・」

レンはネックレスをまた首にかけた。

「だから大坂の力で女の子にされるんだったら、レンも頑張ってみます！」

「え・・・ああ・・・うん、そうそう！がんばりなよ」

萌子はようやく先ほどのショックから抜け出して再び車に戻って走り出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

しばらく走った後、車は美容院の前で止まった。

「あー！ここ・・・テレビで見たことあります・・・」

「うん、うち専属の美容院よ。カリスマ美容師のカインがいるって有名なお店よ。」

テレビでも取り上げられてるしね。」

車を確認した中のスタッフが出てきて、萌子から鍵を預かり駐車場へ移動させた。

そして二人は車から降りて店内へ

「いらっしやいませ」

「いらっしやいませ石川様。先ほど連絡頂いていた人はこの方ですか？」

「あ……あ……ああ……」

レンはテレビでも見るカリスマ美容師のカインを目の前にして緊張から声がでない。

するとそれを見た萌子が横からレンの背中を平手で強く叩いた！

バッチーーン！

「キャー！！ イッターーーーーーイ！」

「あははは！何緊張してんのよ！この子は！」

「ひっどーい。 バカモコ……」

「ええ、カインさん。この子を飛びつきりかわいい女の子に変身させるんだけど出来る？」

萌子はレンの背中に手をやり、スッと前に軽く押し出した。

「あ……失礼ですが……こちらの方は……」

(えー・・・やだなー・・・男のくせにとか言われるんだろうな・・・)

レンは下を向いたまま自信なさそうにカインの言葉を待った。

「こちらの方はノーメイクのようですが、もうすでに充分お綺麗かと・・・」

あとはヘアスタイルとメイクをお任せ頂けるとい事ですか？」

「あ・・・いえ・・・あの・・・」

思いもかけない言葉にレンは返事が出来なかった。

「そつよ、カインさんにお任せするから好きなようにこの子を料理してあげてください。」

「あ・・・宜しく願います。」

レンはカインに深々と頭を下げた。

「あ……レンあなた……」

頭を下げているレンに萌子が言いつた。

「え？なんですか？」

「あなたね……ブラしてきてたんだ……」

「え？はい？」

「だから……仕事は男で来てるんでしょ？なのにブラは毎日して
たんだね……」

でもしててよかったね、そんなに大きくなるとブラないとま
ずかったよ。」

「あー！」

レンは驚いたように自分の胸に手を当てて確認すると

それはついさっき事務所で指摘された胸よりはるかに大きくなっていた。

ムニユ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ドキドキドキドキ・・・

（ヤダ・・・自分の胸だ・・・本当に自分にオッパイができてる・・・）

レンはその急激な女性化のスピードに戸惑いを隠せなかった。

「それじゃあお願いね。私は戻って仕事済ませてくるから、

3時間もすれば戻りますから、終わっていたら待ってね。」

そういつて萌子は仕事場へ戻っていった。

「それじゃあレンさんはこちらへどうぞ」

レンはいわれるまま席に着き、カインにすべてを任せる。

後ろにひとつで結んでいる髪の毛を解き、肩まで伸びたそれを手際よくカットし始めるカイン。

人気のカリスマ美容師の彼にカットしてもらうには予約だけでも1ヶ月以上先になるはず・・・

それを電話1本でOKさせるところなどはさすが

サリナの敏腕マネージャー萌子ならではのことだった。

「レンさんは？どのような髪型をお望みですか？」

緊張で硬くなっているレンに、カインは話しかける。

「え？あ・・・はい・・・どのようなって・・・」

女の子として美容院へくるのはもちろん初めての事・・・

そんな事など考えたこともなかったレンだった。

「本当にワタシに全部お任せいただいていいのですね？」

「はい！もちろんです！」

困っているレンを見て、カインは手際よくカットを続ける。

「それにしても綺麗な髪の毛だ・・・それにレンさんはスタイルも
いいし・・・」

「・・・そんなあ・・・そんな事初めて言われました・

「・・・」

「一つ聞いてもいいですか？」

「え？」

ドキッ

(ヤダ・・・何聞かれるんだろ？オトコってばれてる？)

「どうしてこんなラフな格好で、メイクもしないで、服はメンズですよね？」

あ・・・ジーンズはレディースかな？」

「え？こ・・・これはその・・・」

「私の疑問は単純にそれだけです。」

サツサ・・・チヨキチヨキ・・・

カインはカットしながら話しを続ける。

「レンさんはもっと自分に自信を持って磨けばいいと思いますよ。

きつと素晴らしい女性に変身できますから」

（……………なんだろ？これは夢？私があ有名なカインさんに力
ツトしてもらってて、

それで素晴らしい女性になれるって言われてる……………夢なら覚
めてほしくない……………）

レンはカットされながら夢心地でいた。

ポーっとするアタマ……………

鏡に写る自分の変化など目に入らなかった。

ただ、カインのハサミの音とその言葉でまるで催眠術にでもかかる
かのようにウトウトしていた

そしてそのまま時間がたち、カインの話に夢心地のレンは

「ハイそれではシャンプーで流させていただきますね」 という言葉で我に返った。

「あ？はい……」

（なんか私……ポーっとしてて……シャンプー？あ……髪の毛染まつてるし……）

自分の目に入る頬にかかる髪の毛は、それまでの黒いではなく

綺麗なブラウン系に変わっていた。

全体的にふんわりとしたウェーブがかかっていてとてもかわいいヘアスタイルに

「え？こ……これが……ぼく……？」

レンは啞然としていた。

バツと！後ろを振り向くレン。

「あ……あの……」

レンの後ろではカインが満面の笑みを浮かべて立っていた。

「はい。出来上がりましたよ」

「あ……なんでこんなに……あの……その……」

レンはドキドキして言葉がうまく出ない。

「おっしゃりたいのは髪の毛の量と長さですね。」

全体的にポリユーム感を出すために少々魔法を・

」

「え？マホウ??？」

カインはレンの髪の毛をゆっくり触りながら

「な・・・わけないですよ（笑）それ以上は秘密です。気に入って
もらえましたでしょうか？」

レンはボーっとしたままカインの目を見つめていた。

（あ・・・なんか・・・この人が人気あるのわかる・・・）

カインにカットされているこの数時間は、まさに夢心地のひと時だった。

そして出来上がったあとも、見つめられるその瞳……

引き込まれるような話術……

どれをとっても心地よい空間だった。

レンはニッコリして

「はい！ありがとうございます！」

ようやくはつきりとお辞儀をして御礼を言った。

「あ〜はははは やっぱりあなたおもしろいわ〜」

カインはそんなレンを見て笑い出しました。

「え？なんで？どうして笑うの……」

「えー！あわわわわわ・・・」

「ダメかな・・・？」

カインはレンの髪の毛を優しくなでながら、レンの指にもうひとつの手を絡めていく・・・

「ちょちょちょ・・・ちょっと・・・アン・・・待ってください・・・」

「ウフフフフ・・・じょうだんよ！ほんとにかわいいんだから

「こりゃーモコさんもほっとかないのわかるわ」

「えー！・・・もおー！・・・」

「あははごめんごめん。彼女とは古い友達でね。もちろん僕はゲイでもなんでもないよ。」

「ただちょっとかわいいレンさんをいじめてみたくなってね」

「はあ~~~~」・・・勘弁してくださいよ・・・でもね・・・

カインさん素敵だからちよっとその気になりましたよ・

・・・
「

「そーなんだー？　じゃあ今夜ほんとにする？」

「だめです！だってカインさんゲイじゃあないんでしょ？」

「うん！でもレンさんならできるよー！」

「ばっ！バカいわないくださいよ！まったくもう！・・・

で・・・でも・・・やっぱりお・・・おと・・・
「

「ん？なに？おと？」

「あ・・・やっぱり男ってわかります？・・・よね？」

「あ~~~~レンさんの？」

「うん・・・ゲイだからわかるってさっき・・・」

「ぜんぜん！わかんないよ。だってモコからあらかじめ聞いてたもん。

そうじゃあなければまったくわかんないって！」

「ほんとに？わかんない？」

「あたりまえじゃん！だってもう・・・」

カインはレンの顔の下、喉を覗き込みました。

「ほら・・・喉仏の切除もしたんだろ？ノドボトケないし」

「え？」

レンはすぐ自分の手のひらで喉を押さえました。

「あ・・・ほんと・・・に・・・ないや」

レンは喜びの中で自分の身体への不安も大きくなってきていた。

（ノドボトケって・・・女性ホルモンが多くでもなくならないよね・・・）

なに？なんで？？？レンの身体はどうなってるの？）

「今はもう芸能人でも元男性だとカミングアウトする人が多いから

レンさんも気にすることないよ。」

「あ・・・ハイ・・・ありがとうございます」

カインはレンの肩に手を置いていった。

「さあ次はメイクに入ろう。時間も押ししてるから急がなきゃ、モコが帰ってきて

まだ出来てないとあいつづるさいからな」

「あー！それわかりますーウフフフ」

「あはははは、そ、そ、だろ。」

カインは客であるレンを退屈させることなく流れるような展開でメイクに入り、

手際よくこなしていった。

ありえない変身

夕暮れの町を1台の車がかなりのスピードで走っていた。

キキキィー!!

信号が赤になり、急停止するそれを運転していたのは萌子だった。

「あゝゝ・・・まったく信じらんない・・・ほんともう・・・あのエロ親父ったら・・・」

撮影の打合せを早めに切り上げて、すぐにもレンの所へ帰ろうと思っていたのが、

予想外にクレームがついて手間取っていたのだった。

しかもその話のあいだ、萌子はずっとエロプロデューサーの舐めるような視線にさらされていた。

「うっっっ思い出しただけでもきもちわるうっっっい……」

なにが……なあ萌子君はどう思うっ？……よ……よ……しかもベ
タバタ身体触ってきて……」

現場で立ったままの打合せの為、萌子はそのプロデューサーに
ぴったりと寄り添われて肩や腰を触れられながら進められていたの
だった。

うまくいけば食事にでも……

そのあとは……

そんな魂胆がバレバレの相談に嫌気がさした萌子は

「ごめんなさいねっ。今夜はこのあと先客を待たせてるのでこれで
失礼しますね。」

と、一蹴して何とか現場から開放された。

「まったく！仕事の話があるっていつからわざわざ時間とったのに！

ほんと！むかつくー！ー！」

その感情がそのまま車の運転に出ている萌子。

それから数分して車はようやくレンのいる美容院に到着した。

玄関前に車を止めた萌子はそのまま中に入り受付の店員に

「ごめん！遅くなっちゃて。どう？レンはもう出来た？」と、尋ねた。

それを察知して奥からカインが近寄ってきた。

「レンちゃんはもう随分と待ってるよ。おそかったじゃん」

「うん、しめんしめん。仕事が長引いちゃってね・・・ んで？レ
ンは？」

「ああ、さっきトイレに行くって・・・あれ？そういえば長いな・・・」

「トイレ？わかった、私見てくるわ」

萌子はそういうとスツと奥のトイレに向かった。

このトイレは男性用と女性用にわかれておりカインの話だと男性用に入るうとしたレンを

無理やり女性用へ行かせたようだった。

萌子は女性用のドアをあけて中に入り使用している個室を見ると

今使用中でドアが閉まっているのはその中の1つだけだった。

コンコン！

トイレのドアをノックする萌子。

コンコン！コンコン！

「レン？いるんでしょ？」

ノックをしても返事がないため声を掛ける萌子。

シーーン・・・

ドンドン！

「レン！いるの？なにしてるの？いるんだったらここ開けなさい！」

萌子はさっきの仕事終わりからの流れで少タイラつきながらドアを叩いて叫んでいた。

ドンドンドン…ドンドンドン…

ガチャリ！

ドン！ 「あ……」

少しだけ開いたドアの向こうにうつむき加減のレンが立っていた。

「なんだー！なにしてんのよ？トイレにこもってどっつたの？」

そついわれてもレンは何もいわなかった・・・

「あ？あれ？レンちょっと顔上げて見せて」

萌子はうつむいているレンのあごに手をやって上を向かせた。

「わ~~~~！すっ~~~~い！メイクもばっちりじゃん！

それにヘアスタイルもかわいいし〜 さすがカイ

ンだねー！」

萌子は大きな声を掛けてレンの両肩を叩いた。

しかし・・・

レンは何もいわず黙っていた。

その様子を見ても萌子は

「どうしたの？なにかあった？何でそんな落ち込んでるの？」

と、レンを気遣って声を掛ける。

するとレンはポツリポツリと小さな声で話し出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「え？なに？聞こえないよ？もっとはっきりいいなさい！」

「あうあう・・・・・・・・ないの・・・・・・・・あ・・・・・・・・お・・・・・・・・の・・・・・・・・」

「なに？わかんないよ！レンあんた男でしょ？なにイジイジしてるの！はっきりいいなさい！」

さすがにイラついてきた萌子はレンの頭を軽くはたきながら怒鳴るように言いつた。

ビクッ！

その一喝でレンは背筋を伸ばして顔を上げ、涙目になりながらゆっくりそして

さっきよりもう少し大きな声で言いつた。

「あのね・・・なくなった・・・レンのオチン○○がね・・・きえ・・・
ちやっただの・・・」

「なあくんだ・・・そんなことか・・・って・・・え？なに？何が
なくなつたって？」

「だからー！レンのオチン○チンが消えてないのよー！」

「えー？そんなばかなー？そんな事あるわけないでしょ？」

萌子はそういつとレンのいるトイレの個室へ入ってきて、レンを壁に押し付けた。

ドン！

「アン！いったーい！」

「うるさい！ちょっとだまってて！」

萌子はそういつときなりレンのジーンズを下ろした。

普通では考えられない状況だが、それ以上の出来事に萌子の行動は止まらなかった。

カチャカチャ！ズリズリー！

「あーん！何するんですかー！萌子さんちょっと！ちょっと！
や~~~~ん！」

ジーンズを下ろされてパンティも一気に下げられたレン

その股間が萌子の目の前にさらされたのだった。

両手を萌子に押さえられて手で隠せなくてモジモジするレン……

「やあ~~~~ん……ちよっと……モコ！ちよっと！ちよっと！
やめろって
」

萌子は口をポカ〜ンと開けたままそこに見入って、

「ほん・・・とだ・・・ないし・・・それに・・・女の子のそれに
なっってんじゃん・・・」

そう呟いたのだった。

大坂からの連絡

しばらくして店を出る準備をする2人。

「どうしてよ？何でそんなに落ち込むの？あなた女の子になりたかったんでしょ？」

「そりゃーそうだけど・・・でも、順序ってものがあるし・・・」

いきなりオチン○○なくなったらだれでも動揺しますよ・

「・・・」

「ふうん。そんなものかな・・・わたしオチン○○つけた事ないからよくわかんないや」

「もう！モコさんは！人事だと思って・・・」

「さあもう次は服を買いに行くよ。身体が女の子になっちゃったんだから」

服や下着もたくさんいるでしょ?」

「う……うん、そりゃーそうだけど……」

「なに?まだなんかあんの?」

「だから……まだココロの整理が……」

「あー!ー!ー!もうイライラする!あなたは黙ってついてくればいいの!」

萌子はそう言つとレンの手をとって強引に店の外へ出ていった。

「あー!まってくださいよー!」

手をひかれてよろけながらレンは萌子のあとについていく。

「……」

「……………」

「トヨッ!ー!トヨッ!」

「……………ちょっと!レン!」

「え?あ?はい?なんですか?」

「なんですか?じゃあないわよ!なに?その変な歩き方は?」

「え?へんですか?」

「そのトヨッ!トヨッ!してるのなによ?」

「ああ……………これは……………なんかさつきまで股間にあつたものがない
くなって

おまたが変な感じなんですよ……………だから歩き方も変
になって……………」

「ハア〜．．．あんなね〜．．．まじめに言ってる?」

「だってー!ほんとに急だから変なんですよ!生まれてずっとあったものが

突然なくなって．．．嬉しいやらなんかよくわかんないですよ．．．」

「ほんとにもう．．．先が思いやられるわね．．．まあいいわ、

そんなことより先に何か食べようか?お腹すいたでしょ?」

「はい!何でもいいから食べたい!」

「じゃあ車に乗って」

そう言って二人は車で移動しはじめた。

しばらく走った車は都会から少し離れた小さなラーメン屋の前で止まった。

「ここでいい？このラーメン結構美味しいのよ。それにあまり目立たないしね。」

「はい！ラーメン大好きですから」

レンは嬉しそうに萌子のあとについてお店に入った。

「いらっしゃいませ！」

店内は他にお客が4〜5人ほどいるだけで、端のほうにテレビがあり夜のニュース番組が映し出されていた。

「なんにするの？レン」

「え〜っと・・・このチャーシュー大盛り味噌ラーメンにします」

「アハハ・・・女の子になっても大盛りなんだ・・・」

「だってお腹すいてるんですよ・・・」

「いいよ、じゃあ わたしはこれで」

そういつて萌子は店員に注文しラーメンが来るのを待った。

「んで？次はどこに行くんですか？」

「うん、やっぱりその服じゃあダメだからとりあえず洋服見にいこうか？」

「はい！すっごく楽しみですー！」

「あははは〜。やっとレンらしい笑顔になってきたね」

「なんか色々動揺したけど、よく考えたらこれもみんな大坂が望んだことだし、」

そう思ったらもうなるようになれ！って開き直ってきました」

「そうそう！それでいいのよ」

「へい！お待たせしました！」

そう二人が話していると美味しそうなるラーメンが二つ運ばれてきた。

「わ~~~~おいしそう！いただきまあ〜す」

そういつて二人は食べ始めた。

しかし・・・

しばらくしてレンの箸が止まる・・・

じっと前を見詰めて、動きが止まり固まっている。

「ん？どうしたの？レン？」

「あああ……あれ……おおさか？……なにやってんの……
？あいつ……」

レンの視線の先にはお店のテレビがあった。

それにはニュース番組が映し出されており

「え？おおさか？」

そういつて萌子はレンの視線の先、自分の背中の中のほうへ振り返りテレビを確認した。

ちょうどその時ニュースでは、中東のテロ組織のことが報道されていた。

「たった今入ったニュースによりますと、中東を拠点にしている

テロ組織「真紅のサソリ」が10日前の自爆テロについて犯行声明を出しました。

そして先ほどその代表者の名前と写真も公表されたわけですが・
・どうやら

日本人の模様です・・・名前はオオサカ・・・それとこれが入手された写真です」

アナウンサーはそれだけ言うと、画面いっぱい写真が映し出された。

「え？なに？あれ大坂？ちょっと違うみたいけど・・・」

萌子はテレビとレンの顔を交互に見ながら聞いてきた。

「現在は大坂という事しかわかっておらず、彼がどついつ経路で

中東へ行きなせこのような活動に手をかしているのかもすべて不明です。」

「うん・・・間違いないよ・・・髪の毛も伸びて髭もはえててわかりにくいけど大坂だよ・・・」

「でも！テロ組織のリーダーだって！なんなの？」

「そんなのレンにもわかんないよー！」

ニュースはそれだけ伝えると終了した。

それを見終えた二人は黙ったままジッと座っている。

次の言葉が出ないレン・・・

「ふ〜・・・考えてても仕方ないよ・・・いこっか・・・」

「うん・・・」

ラーメンを食べ残したまま二人は店を出て車に乗り込んだ。

車の中でも無言の2人・・・

するとその沈黙を破るように萌子が言いつた。

「ねえ、さっきのニュースなんだけど・・・」

「え？あ・・・ハイ・・・」

「サリナさんに頼んで、いろいろな所から情報もらってあげようか？」

政治家や報道関係にもたくさんコネあるよ

「……………」

「元気だしなさいよ。彼なら心配ないって」

「うん……心配ないのはわかってるけど……」

「明日早速調べてあげるね」

「うん……有難うございます……」

そうしている間に車は、綺麗なお店に到着した。

萌子がいつも使い慣れているお店……

レンの安い給料ではとてもじゃあないけど来れないようなところだった。

「あ……の……ここはちよつと……」

「え？なぜ？いいものあるよ？」

「いや……私が普段着るにはちよつと高級すぎないかと……」

「ふん……そんな事ないと思うけどな……」

まっ、いいや。じゃあ、レンの行きたい所に連れてってよ

「はい、わかりました。」

レンは少し表情が明るくなり、大坂の事は忘れようとしたその時！

~~~~~

突然レンの携帯から着信音がなされた

「あれ？・・・だれだろ？」

相手の名前を見ると、非通知着信だった。

「すみません萌子さん、ちょっと電話出てみますね」

ピッ！

そういつてレンは電話に出た。

「はい？もしもし、どちらさまでしゅうか？」

「……………」

相手は無言だった。

「もしもし？もしもし？」

すゑん……………

「……………あ……………あれ……………」

少し発したその声に、レンは突然反応した！

「大坂…………？おおさかでしょ！」

「え？・・・あの・・・おたくこそ誰だよ？何で俺の名前わかんだよ・・・」

おかしーなー・・・この電話？・・・香川さんのじゃあな  
かったですか？」

「何言ってるんだよ！おれだよ！レンジだよ！」

すでに声まで女性化し、以前のレンの声とはかけ離れたかわいい女の子の声に、

大坂は気が付かなかった。

「え？レンジ？か？・・・でも声が・・・」

「あー！ー！もう！声なんかどうでもいいよ！」

それよりなにしてるのよ！こっちではもう大変なんだよ！」

「大変ってなにがだよ？こっちはやっとの事で電話かけたんだぜ？

もう色々あってまいったよ・・・」

「だからー！何でテロリストになってんの？しかもリーダーだし・  
」

「へ？なにそれ？　確かにテログループだっていう奴らとは友達  
になったよ。」

でもリーダーだなんてなってないし・・・」

「じゃあ何でこっちでニュースになってんのよ？もう日本では大騒  
ぎだよ」

「ダダダダダダダダ！！うわー！！」

「え！？なに？おおさかー！どうしたのー！！」

「おい！もうやめとけて！あぶないから！！」

「なに？なにしてんの？大丈夫なの？」

「ああ、ゴメンゴメン・・・うしろで銃の手入れしててまた暴発し  
たんだよ・・・あぶねーわ」

「やっぱりあなたにしてんの？」

「それよりお前ほんとにレンジなのか？声が全然違うし

そんなかわいい女の声じゃあなかったぜ！」

「もう！ばか！誰のせいでこんなになったと思ってんのよ！」

涙声で言うレン・・・

「え？なに？どうした？」

・・・

レンは最初からのいきさつを説明した。

するつ・・・

「あゝはははは！そっかゝゝ。そのネックレスがそんな力をね  
」

！！！！！！

さすがにレンも大坂の無神経な受け答えに我慢が出来なくなつて

「こら！おおさか！おまえいいかげんにしろよ！そんな笑い方する  
なら

もう心配してやんねーよ！ばか！

と・・・ついつい男に戻つて怒鳴りたてた！

でも・・・声はすでにかわいい女の子の声・・・どこか憎めない  
怒り口調だった。

「あゝゝゝ・・・ゴメンゴメン・・・まあそう怒るなよ・・・でも  
・・・気・・・」

突然電話の音が小さくなりだした・・・

「え？なに？聞こえない・・・よ」

「気をつけるよ・・・そのネックレス・・・まだまだ厄介なこと・・・あるかも・・・」

プツリ・・・

「もしもし！もしもし！おおさか！」

電話はそこで切れてしまった。

「はあ~~~~あ」

レンは大きなため息を一つついた。



「なに？なんて言ってたの？大坂君大丈夫なの？」

そういつてレンを見る萌子の目はランランと輝いていて、興味シンシンのようだった。

「あー！萌子さん少し面白がってませんか？」

ぎくっ！

「え・・・そんな事ないよ・・・心配してるよ・・・」

萌子は目を横にそらせた。

面白がっているのはわかっていても、やっぱり心配してくれている優しい萌子にレンは

「ウフッ・・・ありがと、萌子さん。大坂は大丈夫だって・・・」

テロリストのリーダーなんかになってないって

「でも？報道では・・・」

「うん・・・きっと何かの間違いですよ。だってあいつははっきりと否定したもん」

「ほんとに？でもさっき銃が暴発とか何とか言ってた？」

「う！・・・うん・・・たぶん・・・大丈夫と思う・・・」

信用したいけど・・・

何かちょっと頼りない大坂のことを不安に思うレンだった。

それからお店を数件回り、下着から洋服メイク用品から靴まで一通り揃えたが

もちろん支払いは全部萌子のカードだった。

「あ……あの……」

「ん？なに？」

「こんなにお金使ってもらって……なんてお礼言えればいいか……」

「あ……そんなの気にしないでいいよ」

「え？……でも……そういうわけには……」

「なにいつてんの？あんた今月からうちの事務所の社員になるのよ。」

今日使ったお金は来月の給料から少しづつ引かせてもらっわけね」

「うん、来月から……って？えー！……！……！……！そんなんですかー」

「……！……！……！……！」

びっくっつ!!!

「急に大きな声出すからびっくりするじゃない!」

「それならそうと最初から!・・・それに・・・うちの社員って、そんな勝手に?」

レン何も聞いてないし・・・」

「ん?何か不満でもあるの?」

「勝手ですよ勝手!だって、何も聞かされてないのに社員だなんて!・・・ん?」

あれ?・・・しゃ?社員???.・・・レンが?サリナさんのところの?」

萌子はレンを見て満面の笑みを浮かべている。

「イヤとは言わせないよ」

もともとレンのいた事務所は大手からの下請けの又下の下

弱小会社のしかもレンはバイト扱이었다。

この不景気な時代に、若いだけでは新しい仕事もなく

せいぜいが明日にはどうなるかわからないバイトどまり。

それが芸能界でもいまや飛ぶ鳥を落とす勢いの名女優となった

サリナを筆頭に、数人の有名タレントを抱える一流事務所の

しかも正規社員としての引き抜きは、まさに夢のような話だった。

「ごめんね、ほんとならもっと早くあなたをうちに引き抜くつもり  
だったんだけど」

レンの事務所の社長との調整が少し手間取って・・・あの社長  
ね・・・

かなりあなたの事気に入っていたようよ」

ドキィ！

「そ……そうなんですか……」

「うん、なんか惜しそうだったもん……」

この引拔がなかったら、あの社長の餌食になってたのは時間の問題だということにレンは気が付いた。

「ほんつとに！ありがとうございます！もえこさん！」

レンは瞳をウルウルと潤ませて、両手で萌子の手を握りお礼を言った。

「あはは、いいのよそんなことは。それより明日からは

香川レンとして、女性社員として仕事にでてきてね。

そのための準備用品は揃えたでしょ？」

「はい！有難うございました」

そして車はレンのマンションの前に到着し、荷物を抱えて降りた。

「じゃあこれで、明日は朝7時までには伺います！」

「うん、たのんだわよ」

ボタン！

車はそのまま走り去っていき、レンは両手に一杯の荷物を抱えていた。

これで明日から・・・

いや、もう今からすでに身体も女の子なんだ・・・

その思いがレンの足取りを軽くさせていた。





敏感な肉体は

キヨロキヨロ

竜也が又待ち伏せていないか気になっていたのかエレベーター付近であたりを見渡すレン。

「よし・・・今夜は誰もいないや・・・そりゃー今頃あいつはお店の時間だもんね」

カチャリ！

鍵を開けて家の中に入り

「はぁ~~~~つかれた~~~~」

ドサッ！

そのままベットへ倒れこんだ。

かわいくカットされた髪の毛が顔にかかる。

（女の子になったんだ・・・）

そっと胸へ手をやる・・・

「あ・・・」

ムニユ

これまで感じたことのない感触・・・

優しく優しく・・・その自分の胸の感触を確かめるレン

「ハアハア……」

しだいに息使いが荒くなってきて徐々に気分が高ぶりだしたレンは  
そこまですると突然動きを止めた。

そして黙って起き上がり、今度は着ているものを順番に脱ぎだした  
のだった。

身に着けている衣服も全て脱ぎ去り完全に全裸になるレン。

最後に大坂からもらったネックレスをはずしてその姿を浴室の入り  
口にある鏡に映しだす。

「あなたは？だれなの？」

今朝とはまったくの別人のような姿に、もう心臓はドキドキと大きな音を立てていた。

キレイに盛り上がったバスト。

男の人にはない腰のくびれ。

丸くかわいいプルンとしたヒップ

完全に女性へと変化した身体は、美しくもありレンの興奮を高めるには

十分すぎるほどの肉体だった。

「あああ……おおさか……」

しかしその時……

レンの脳裏にあの男性が……

竜也の顔が突然入り込んできた

「ハアハア……え？なんで？」

大坂の事を愛しく思う反面、それが竜也に変わる・・・

(なに？ダメだよ・・・こんなの・・・やだよ・・・)

大坂から変わって急に竜也を思い浮かべたレンは

その動揺を隠すかのように思い切ってシャワーを浴びて自分を制した。

ジャーーーーー！

身体を丁寧に洗うレン。

(ダメだダメだ・・・いきなりこの快感は強すぎるよ・・・)

徐々に慣れないと、ずっとエッチな事しまいそうだよ・  
・)

男の時とは、比喩物にならないくらい敏感な肉体は自分を見失いそうになる・・・

そう思ってレンは、風呂場から出てすぐにパジャマに着替えてベツトに入った。

(もう寝よう・・・色々あったから疲れたし・・・明日から女の子の準備に

時間もかかるから、早起きしなくっちゃ)

そんな思いで眠りにつくレンだった。

しかし・・・

（大坂の最後の切れた言葉なんだろう？ネックレスの厄介なことって  
言ってたような気が・・・）

机の上の蒼いダイヤのネックレスは、薄く光を放っていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ジリジリジリ

朝の目覚ましで目を覚ますレン。



時刻は朝の5時

7時に事務所へ行かなければいけないので、2時間かけての準備だった。

ベットから起きて寝ぼけた顔でトイレに行く

トイレのふたをはずして座って

ジヨロジヨロジヨロ~~~~

寝ぼけたまま自分の股間に目をやると・・・



敏感な肉体は（後書き）

原作ではここでかなりエッチなシーンになっています・・・

## 女の子での初出勤

ドタバタドタバタ！

慌てて鏡を覗き込むレン！

「あっちゃ〜〜・・・やっぱ もどってるし・・・」

髪型は女の子のままでも顔つきや声は元に戻っており、時計を見るともう30分はたっていた。

「やばいよ・・・どうしよう・・・?」

今日から女の子で来てねという、萌子の言葉を思い出すレンだった。

（でも・・・なんでだろ?・・・）

そこでレンは昨日の大坂の言葉を思い出した。

厄介な……

「あ……やっぱりペンダントつけてないから……はずしてたら戻るんだ……」

そう思い早速ペンダントを首につけた。

ドックン！

「ああん！……アツイ……」

ドックンドックン！！！！

全身が燃えるように熱くなっていく。

ハアハアハア……

息使いも荒くなり

「昨日の朝と同じだ……」

そしてしばらくするとその異様な感じも落ち着いてきたのだった。

しかしすぐに身体に変化はなかった。

「これも昨日と同じ……」

レンはペンダントをつけたまま、シャワーをあびてメイクにかかり下着を着けて洋服を選ぶ。

ストッキングをはいて

「やっぱり……スカートだね……」

萌子を選んだ少し短めのタイトスカートをはいて準備をする。

ブラをつけたときはスカスカだった胸が、洋服を着終えるころにはムッチリとしたオツパイが出来上がっていた。

レンはその胸を両手で寄せてみると胸の谷間がはっきりと出来た。

「ああ・・・よかった・・・」

女の子になりたいなりたいたいつも思っていたレン・・・

でも実際にその身体を手に入れると、その感動は消えて現実の大変さで

精一杯になっていたのだった。

時間はすでに6時30分。

「やっぱりーい！いそがなくなっちゃ」



レンは大慌てで手荷物を持ち、玄関を出て行った。

（気をつけないと・・・ペンダントをつけて女人化するのが約2〜3時間後、

完全に变身するので約半日・・・）

駅へ早足で向かうレンは、身体の変化時間を確認しなおしていた。

カツカツカツカツ！

今まで履いたことのない、パンプスが小刻みにいい音を奏でる。

（逆にはずしちゃうと、4〜5時間もすれば元の男に戻っちゃうって訳だ）

ネックレスからでる不思議な力が、生命体のDNAに反応して肉体を変化させるのに

必要な時間だった。

（までよ……という事はこれって……）

レンは考えた……

果たしてこのネックレスはレンにだけ効果があるのか？

他の誰でも同じ効果が出るのか？

「あ！……昨日……」

レンは昨日の事を思い出した。

（萌子さんがつけたとき、彼女は幽霊を見たわ・・・だから誰でも効果はあるの。

でも身体に変化はなかった・・・それは？女性には変化はないの？）

そんなことを考えているうちに、レンはサリナの事務所へ到着した。

.....

「おはようございます」

レンはいつものように元気よく挨拶をしながら事務所に入っていた。

「あ？ああ、おはよう・・・あれ？」

最近連日のように子会社からの出向でサリナの事務所に詰めていたレンは

自分がいつもの男の姿ではなく完全に女の子の姿だということを忘れていた。

（げ！いつけない・・・レン今日から女の子なんだ・・・昨日までと違うんだ・・・）

「おはよう・・・あなたは？香川さん？」

事務所にいた社員の朝比奈が声をかけてきた。

「あ、はい。私、香川蓮慈の姉の香川蓮といいます。本日からこちらでお世話になります。」

「あ〜、香川君のお姉さんね。萌子さんから話は聞いています。

今日から頑張ってくださいね。」

「はい！よろしくおねがいします！」

（よかった〜・・・モコさんちゃんと話し通してくれてたんだ）

ガチャリ！

入り口のドアが開くと萌子が入ってきた。

「おはよ！、あ・あら・・・レン！」

「あ・おはよう！」

「かわい〜！〜！」

ぷいっ！

萌子はレンを見るといきなり抱きついてきた。

「似合うじゃない〜、かわいいよ〜」

「ちょっとちょっと！まってくださいよ！いきなりなにすんです

か！みんな見てますって！」

「え？あら〜、いいのよそんな事気にしないの！」

その二人の様子を周りのみんなはニコニコしながら見ている。

そして萌子はレンに抱きつきながら大きな声で言った。

「みんな〜！今日からこの仲間になるレンだよ。みんなもよく知ってると思うけど、」

香川レンジで手伝いに来ていた・・・」

「うんうん・・・姉の・・・」

「レンジはね、本当は女の子になりたかったんでこんな風に変身しちゃいました〜」

「えー！？それじゃあそのままじゃん？」

「やっぱりそうなんでしょう？姉だとか言うからおっかしいなって思ってたのよ。」

朝比奈はあきれれるように言った。

「ちょっとー！そんなふうに本当のことって大丈夫なんですか？」

「え？なぜ？ほんとうじゃん。。。」

「そう……ですけど……」

「それよ……ちよっとな……ちよっとな……ちよっとな……おっ……」



萌子はレンを隣の部屋に引っ張っていき耳元で小さな声で聞いてきた。

「昨夜はどうだった？」

「え？なにが？ですか？」

「バッチーーン！」

萌子はレンの背中を強く叩きながら続けて話す。

「なにとぼけてんのよー！この子はもー！」

「いったー！ーい！ー！なんですかー！」

「だから・・・女の子の身体の感度はどうだったのか聞いてんのよー！」

「え？感度？オシナの・・・あ・・・」

「もちろんしたわよね！オ・ナ・〇・」

カーーー

レンの顔がみるみるまに真っ赤になっていく。

「そりゃー当然よね、いきなりオンナの身体になったら

まず何するってそりゃーオニヤ〇ンするでしょ〜ふっ〜 さあ白  
状しなさい！」

すると顔を赤くしたレンはつつむきながら小さな声でそれに答えた。

「……………」

「え？なに？きこえないよ？」

「あの・・・気持ちよかったです・・・」

「なんだってー！もっとはつきりいいなさい！」

「すごく気持ちよかったですー！！！」

「ふ〜〜ん・・・やっぱりオニヤ○ヤしちゃったんだ・・・レン  
つてエッチな子だったんだ・・・」

「え？？？なにいつてんですか？萌子さんがそういわせて・・・」

ガバツ！

「きゃー！」

すると萌子はいきなりレンのスカートの中に手を入れてきたのだっ  
た。



## 朝比奈につれられて

「なにす！あ！やん！」

「エッチなレンちゃんはこんなの好きでしょ？」

そういつて萌子はレンの股間をまさぐってきた。

「ダメだつて！萌子さん！ああん！」

「ダメつていながら・・・あ・・・あれ？・・・あれ・・・？？  
？なにこれ？？」

そついいながら萌子の手にはレンのまだ変化しきれていない股間の  
あれが・・・

「ねえあなた・・・また男になったの？なんかはえてるよ？・・・  
・・・」

スリスリニギニギ……

「ああん……だからー！ニギニギスリスリはやめてくださいって  
く！」

「ああ……ゴメンゴメン……つい勢いでね……」

そういつて萌子はレンのスカートから手を抜いた。

「はあはあ……じ……実はね……このネックレスがね……」

レンは息を切らしながら昨夜からの状況を萌子に説明した。

「ひええ〜〜〜．．．なんとまあそんなことがあるの〜？」

驚きを隠せない萌子。

「でも、あなたが女体化したり幽霊が見えるだけでももうありえない超常現象だから、

別にそんな事があっても不思議じゃあないか〜．．．」

「ええ．．．まあ．．．なんかよくわかんないけどとりあえずこのネックレスははずせませんね．．．」

「よし！わかりました。とりあえず今日は仕事がんばってね。」

「あ、はい！。本当に有難うございます。一生懸命仕事しますのでよろしく願います！」

コンコン！

その時ドアが軽くノックされた。

「はい、どなたぞ」

ガチャリ！

「ああ、朝比奈さん……こっちへ来てください」

ドアを開けたのはロングヘアのキレイな朝比奈真美だった。

「今日からこのレンに仕事を教えてやってね。まずは外回りでもいいわよ。」

「はい、よろしくね。香川さん」



「はい、こちらこそヨロシクお願いします。」

「まあそんなに硬くならないでいいわよ。レンジ君のときに

随分と仕事覚えたでしょ？だから大丈夫よ。」

「ま、そういう事だからがんばってね」

萌子はそう言つと部屋を出て行った。

そのあとレンは、朝比奈につれられて得意先の事務所に挨拶回りを済まし

そうして時間も夜の8時頃となり、あたりはもう真っ暗になっていた。

朝比奈はレンの横で電話をしている。

「はい。わかりました、それじゃあ私たちはこれで

「このまま帰宅します。お疲れ様でした。」

ピッー

電話を切る朝比奈。

「萌子さんまだまだ遅くまで打合せが入ってるから、

私たちはもうそのまま帰っていいって言ってたわよ。」

「そうですか。わかりました・・・」

「ねえ、香川さん・・・もう少し時間ない？」

「え？なんですか？」

「もしよかったらちょっと付き合ってくれないかな？」

「はい？い・・・いいですけど・・・どこへ行くんですか？」

「うん・・・私の友人がやってる事務所なんだけどね、

萌子さんにはまだ内緒にしてる小さな所なんだ・・・

それで時々相談に乗ってあげたりしてるのよ

「そこへ？これから行くんですか？」

「ええ・・・すぐに用事は済むし、そのあとご飯でもおぼるからな  
あ〜」

「ご飯のおりに釣られて、レンは二つ返事で

「もちろん！いいですよ〜」

と、OKしてついて行くのだった。

.....

それからしばらく歩いて着いたのは小さな雑居ビルの一室だった。

表札には会社名で

「ライラックススタジオ」と、書いてある。

(聞かない名前だな・・・)

レンは朝比奈について中に入っていった。

玄関に入り中を見ると結構奥行きがあり広い感じがした。

そしてその奥のドアを開けたとき、それまでの静寂が打ち消された。

「あああ~~~~ん!! あんあん!!」

「アウアウアアア!!」

「え！！！なに？？？ここって？？？」

レンは目の前にいきなり現れた光景に驚いた。

男性に抱かれて身悶え狂う全裸の女性。

それを照らす照明器具としっかり構えられたカメラ。

その現場はAV撮影と一目瞭然だった。

「ちょっと！朝比奈さん！これって！！」

レンは慌てて朝比奈に聞く。

「うん・・・会社には内緒よ・・・友達の事務所ってAV関係なんだ・・・」

「えー！？そんなんですかー！？でもなぜレンにそれを・・・」

「うん・・・あのさ・・・ちょっとレンちゃんに聞きたい」とがあつて・・・」

「え？なんですか？聞きたいことって・・・」

「うん・・・あのね・・・今朝さ〜萌子さんと話してたの聞いちやっただ〜・・・」

「えー？？あれ・・・聞いちゃった・・・の・・・？」

「ええ・・・だからね・・・」

「だめ！だめですよ！！このネックレスは絶対にはずせませんよ！はずしたら・・・」

レンは強い口調でネックレスを手で押さえて言いつた。

「えー！そこを何とか・・・ねえ〜お願いだから〜」

「だめだめ！それだけは絶対にダメです！これはレンの大好きな人からのプレゼントだし」

「そう？だめ？」

「うん！絶対に無理！」

「絶対？ぜ～～～ったいに？」

「うん！ぜ～～～ったいにむりですよ！」

「ふ～～～・・・じゃあ仕方ないな～～・・・」

朝比奈がそういった次の瞬間！

レンの背後に静かに忍び寄ってきた男がすつとレンの鼻先へ何かを持っていた。

「あ！・・・」

何か強烈な匂いのするそれは、スツと吸っただけで意識がなくなる

超強力な睡眠薬だった。

一瞬にしてその場に崩れ落ちるレン・・・

ドサッ！

「あ~~~~、ごめんね・・・ほんとちょっと借りてまたすぐに返すからね・・・」

そういつて朝比奈はレンの首からネックレスをはずした。



## 奪われたネックレス

「はい！これがさっき言ったネックレスよ」

朝比奈はそれを目の前の男に見せた。

「本当にこれにそんな力あるのかよ？」

彼はこの事務所の社長で朝比奈の高校時代の友人だった。

「そうよ、その証拠に彼女・・・キレイでしょ？」

朝比奈は倒れてそのままソファーに寝かされているレンの方を見て言った。

「彼女昨日までは男だったのよ」

「うそ？マジかよ？」

「そうよ・・・それが1日でああなる？どんなことしても無理だつて」

二人が話しているところへ隣の撮影班のAD一人がやって来た。

「社長、第1部の撮影が終わりました。」

「ああ・・・お疲れ様。少し休憩しててくれ」

「ハイわかりました。」

それだけ言つと立ち去るうとするAD

「あ！おいちよつと待て！」

社長はその若い男のADを呼び止めた。

「はい？なんでしょう？」

「お前な・・・このネックレスつけてみる」

社長はレンから奪つた蒼いダイヤのネックレスをその男に渡した。

「え？なんですかこれ？」

「いいから付けろって！なんでもないから！」

「ええ・・・ああ・・・はい・・・」

若い男は訳もわからずしびしびそれを手に取りゆっくりと首につけた。

朝比奈と社長はゴクリ！と唾を飲んで変化を見ている。

するとネックレスをつけた男はいきなり！

「うっわー！！なんだおまえ！ひひいいいい！！」

と、怯えた声を上げその場でうずくまり震えだした。

慌てた社長は男を押さえ込み

「おい！どうした！大丈夫か！おい！！」

と、声をかけた。

「だめ！このネックレスのせいよ！すぐにはずして！」

朝比奈がとっさに気付きネックレスをはずした。

「ハアハアハアハア……………」

しばらくして若いADは落ち着きを取り戻した。

事情を聞くと、ネックレスをつけた途端に今まで見えなかった人影や声が見えたり聞こえたりしてもものすごい恐怖に襲われたようだった。

「幽霊？声？……今朝はそんな事言っ てなかったけど……」

朝比奈は首を傾げながら社長に言う。

「どっちにしてもこれじゃあダメだよ。つけてもすぐにこの状態じゃあ

男優の気が狂っちゃうよ」

「そう……ね……残念だけど……」

そう言っているとお奥の部屋から一人の男優が腰にバスタオル1枚の姿でやって来た。

「なんっすか？なんか面白い事言ってますでした？」

「おお、竜也か・・・お疲れさん・・・いや実はな・・・」

そう・・・

なんという偶然だろうか

それは昨日からレンに付きまっていた竜也だった。

「あ！あれ？そこで寝てる子・・・あれ・・・？」

竜也はソファーに寝かされているレンの顔を覗き込んでマジマジと見た。

「すっげ〜、まじレンちゃんだよ・・・しかもすっげーかわいくなってるし」

「なんだ？竜也その子のこと知ってるのか？」

「ええ・・・今一番気になる子でしてね・・・でもなんでここに？」

竜也は寝ているレンの顔に自分の顔を近付けながら言った。

それを見ていた朝比奈が、竜也の肩をグッと引き寄せた。



「この子はダメよ～～！うちのチーフマネージャーやサリナさんの大のお気に入りの子なんだから指一本でも触れたらどうなるかわかんないわよ」

「ええ～～そんなんっすか？・・・残念だなあ～～～レンちゃん見た瞬間にほら

さっき出したばかりなのにもうこんなに元気になってんですよ  
ちえ～～」

竜也は自分の大きくなったそれを手で握り出して朝比奈の前に出した。

「ばっ！ばか！もう出さなくていいから！すぐしまいなさい・・・  
！もう！」

こんな現場に出入りしていても自分の目の前にそれをさらけ出されるん

やはり目のやり場に困る朝比奈だった。

それを手で制して社長が言った。

「あははは、まあそういうことだから竜也は次の撮影の為にゆっくり休憩しててくれ」

「あ~~~~はいはい・・・あ・・・そんなことより・・・

さっき言った幽霊がどうとか？あれ？なんっすか？」

「え？ああ・・・あれか・・・あれは・・・」

社長は竜也にこれまでのことを説明した。



当なら

その・・・そのレンちゃんは・・・本当は・・・オ・ト・  
コ・・・なんですか？」

「本当も何もレンは男よ。ただし昨日までね」

「げくくくったい嘘だ！俺彼女に一目ぼれしたんですよ。それが男  
だったなんて・・・」

「そりゃーあなたの目が節穴だったってことじゃあないの？」

「よし！わかりましたよ！俺がそのネックレスつけますよ！

それでなんともなかったら、全部嘘ってことでしょ？」

「だから嘘じゃあないって！」

「俺少しなら靈感あるし、小さいころから幽霊も見たことあるし」

怖いこともなんもないし、大丈夫つすよ。」

「え？本当か？つけてみるか？」

「ええ、いいつすよ。でも絶対に俺が女になるなんてありえないつすよ。あはははは」

「よし！ビデオまわせ！竜也の変化を記録するんだ！」

社長の号令で撮影班が一斉に動き始めた。

「じゃあはい！これつけて」

朝比奈は竜也にネックレスを渡した。

それを取って竜也は無言で裸の身体にネックレスをつける。

「おお〜こりゃあすげ〜や・・・」

「なんだ？やっぱりなんか見えるのか？」

「ええ・・・こりゃ〜ほんとに怖いですね・・・この部屋だけでも4〜5人いますよ・・・」

「そんなにか・・・」

「しかも・・・手がもげてる奴や、脚のない奴・・・でも・・・みんな何もせずにじっとしてますよ・・・」

竜也はその状況にすぐになれたようで、平静を保つことが出来た。

そして・・・

それから数分が過ぎた時・・・

変化は現れた

男から女に代わる場面・・・

ドクン！

「あ・・・」

ドクンドクン！！

「あー！！じじじー！！！」

ついに竜也に変化が現れだした。

「おい・・・どうした？大丈夫か？」

「ええ・・・なんか・・・すごく身体が熱いんですよ・・・しかも



動悸がすごいし・・・」

「ダメならすぐにネックレスをはずすんだぞ。」

「ええ・・・わかってます・・・少し落ち着いてきました。」

それから時間が過ぎていく・・・

1時間・・・

1時間30分・・・

2時間・・・

その状況をカメラは鮮明に捉えていた。

朝比奈や社長はもちろん周りのスタッフや次の撮影の為にスタンバイしていた女優さんや

男優までもすべての人が竜也の変化を息を殺して見入っていた。

「うっうっうっ……うぐぐぐぐぐ……」

竜也は身体を硬直させて震えていたかと思えば、何もなかったかのよう

普通に戻るを繰り返していた。

「おい……マジかよ……すげえな……」

周りのスタッフも息を呑んでその様子を見守っていた。

「あああ……うっうっうっぐぐぐ……アアン……アアア……」

「



竜也がよりいっそう大きな声を上げたその瞬間！

彼の股間はこれまでの男性のものから綺麗な女性のものへと変化した。

「ハアハアハアハア……なんなんだよ……？こんな……  
気持ちいいのって……」

身長は185cmほどある長身で胸にははちきれんばかりのバスト

ウエストはくびれて脚は細くすらっとした脚線美

海外の超有名モデルにもひけをとらない、女性の身体がそこにあった。

「おい！全部カメラに収めたな！」

社長が叫ぶ！

「はい！もちろんですよ！」

スタッフも興奮していた。

「ありがとう真美！これが世間に出れば、うちも一気に成長できる  
ぜー！」

「ええ・・・それより・・・」

朝比奈は冷ややかな目で横にいた2人の男優に言いつた。

「ねえあなたとあなた・・・」

「え？はい？なんすつか？」

「今からああなつた竜也君と撮影できる？さっきまで男だったけど、  
今ならすごい美女だからできるでしょ？」

「ええ？……」

男優二人は前でうずくまっている竜也のほうを見た。

「ええ……竜也と思わなければいいわけで、

全然大丈夫ですよ。やっちゃっていいんですか？」

「ええ……しかもすつごく恥ずかしいやり方で、

思い切り攻めてあげてね？できる？」

「こいつと二人いればたぶん大丈夫ですよ。任せてください」

二人は前でうづくまっっている竜也の横にスッと近付いていった。

しかし・・・

竜也はそれにさえもまったく気が付かない状態だった・・・

レンの時間がそうであったように、いきなり女性の身体・・・

その強烈な快感にのみ込まれて・・・

完全に我を忘れていたのだった。



そこへ、一人の男優がスッと背後から近付いていく。

ゆっくり優しく竜也の肩に手を置くと、

ビクッ！

驚いたように竜也は身体を動かした。

「すっげー反応だな・・・」

「ハアハアハアハア・・・」

返事が出来ない竜也・・・

ほんとうにいさっきまでは、竜也が相手の女優にしていたように  
今では逆にその竜也が、リードされる立場となっていた。

そしてその口から漏れる喘ぎ声は、先ほどまで男だったとは  
信じられないくらい細くて、艶のある声だった。

「ほんと・・・すっげーな・・・これが竜也かよ・・・」

あまりの変化に、愛撫を続けている男優も驚きを隠せなかった。

それよりも……

やはり一番戸惑っていたのは、見事な変身をして女体化した竜也本人だった。

## 撮影

(う・・・嘘だ・・・なんだよ・・・これ？こんな感覚正気でいられるわけないって・・・)

男の時の数十倍もの感覚が、いきなり押し寄せてくる。

レンの時と同じように普通ならすぐにその快感の中毒になってしまう状況だった。

動いてその快感から逃れようとする竜也だが、男優たちは彼を押しさえつけられて逃さなかった。

その表情や仕草に、周りのスタッフたちも驚きを隠せない。

あの屈強な竜也がこつも見事に変化するとは・・・

その思いが撮影所内を支配していた。

「さっきまで男だったことなんかもうまったく頭にないんじゃない？」

背後の男優が口にしたその言葉が、竜也の耳にも聞こえてきた。

しかし竜也の頭の中はすでに男性のそれとは違い完全に女性の脳へと変化していた。

それ故に竜也は我慢できずに男の時ではありえない言葉を発した。

「ああん！おねがい！・・・」

「おいおい聞いたかよ？あの竜也が・・・」

周りで見ていたスタッフや社長、朝比奈までも

その竜也の変化ぶりに驚きの声を上げるのだった。

・・・

そして撮影はそのまま延々と続いた・・・

(なんだ？なに？なに？これなんだ？いたい俺どうなっちゃまったんだ？)

時折、竜也の脳裏に男の時の感情が湧き出て来る・・・

しかし・・・

次の瞬間には女性の脳となった身体がそれらを振り払い、

その強烈な刺激に飲み込まれてしまうのだった。

「もっと激しく竜也を責めなさい！」

朝比奈が士気を高める為に声をかけた。

「竜也のやつ・・・あとで怒んないかな？」

社長がその雰囲気飲まれるのを嫌うように呟く

「あははは！あれ見てみなさいよ。あんな顔してる時の女ってね  
もう死んでもいいくらいの気持なのよ。だから絶対に怒んない  
って。」

それよりも元の男に戻れなくなるかもよ」

朝比奈が言い放ったその一言が、撮影所内に響き渡っていた。

.....

完全に女体化してから2時間ほど、撮影は続いた。



そのあいだ、竜也は変化した女性の身体で何度も何度も気を失い、最後に目が覚めなくなり撮影は終了した。

「よし！OKだ！みんなお疲れ様！」

社長の大きな合図でスタッフも安堵の声を漏らし

男優たちもお互い目を合わせて笑みを浮かべた。

そしてその真ん中で気を失って横たわったままの竜也を残して

周りはテキパキと動き始めた。

## 撮影（後書き）

もっとリアルに撮影場面は書いてたんですが・・・  
これが限界です・・・

## 解放されたレン

「すぐくない？この作品はただのAVじゃあないわよ。」

「ああ……わかってるよ……」

「そつだ……」

朝比奈は社長と話しながらスツと竜也の所へ近寄り

首につけている蒼いダイヤのネックレスをはずした。

「おい、もうはずしちゃつうのか？」

「ええ、もう必要ないでしょ？レンに返さなきゃ」

そう言っつて朝比奈はまだ睡眠薬でぐっすり眠っているレンの首にそれをつけた。

「ああ〜、これで竜也も元の男に逆戻りか〜・・・」

あれだけの美女だからなんか惜しいような気もするな〜・・・」

「なにいつてんのよ！あんな映像が撮れただけで充分でしょ？」

「まあそれはそうなんだけどね・・・」

「ねえねえ・・・それよりさあ〜」

朝比奈は眠っているレンの横に座りながら社長の方を見て話す。

「ん？なんだよ？」

「この子に嗅がせたあの睡眠薬って・・・あとどれくらい効いてる

の？」

「あ？あれか？あれは……え……と……5時間くらい前だから……」

あともう3時間は目が覚めないよ」

朝比奈はニヤリと、微笑んで言う。

「ふ……ん……そうなんだ……じゃあちょっとくらいいいかな？」

そう言っただけで彼女は眠っているレンの脚にスツと手を置き

そのままゆっくと太ももへ這わせていった。

「おいおい……その子に手を出しちゃあお前の立場もまずいんじゃないのか？」

「うふふふふ……私だからいいのよ……それにね……」

「あ……もしかしてお前……」

「そうよ……レズの快感をうえつけて、私なしではいられないようにすればいいんだから」

朝比奈はそう言ってゆっくりとレンのスカートの中に手を入れて股間をさぐる。

「かわいいレンちゃん……お姉さんがゆっくり……ん？……」

すると急に真美の動きが止まった。

「あ？どうした？」

「え？あれ？ええー！」

朝比奈は慌ててレンのスカートを捲り上げてその股間をあらわにした。

「あっちゃ〜〜．．．もうはえてるよ．．．しっかりとした男の子ちゃんが．．．」

「ええー！もう、はえてるのか？でも外見はこんなにかわいい女の子だぜ？」

「ええ．．．まあふたなりとでもいうか．．．」

「童也が女体化するまで3時間ほどかかって、レンちゃんが男に戻るのも

ほぼ同じくらいかかるのかもな．．．」

「と……言うことは……竜也が男に戻るのもうー4時間ってとこね……」

朝比奈は社長の目をジッと見た。

「ん？なんだ？」

「ばかね！男に戻りかけの竜也も撮影するのよ！絶世の美女ふたなり！

しかもCGとかじゃあなくて本物よ！」

「おおー！！さすが真美ちゃん！よく気が付くね」

朝比奈はレンの股間をスッと直してスカートももともとどおりにしたと言った。

「ゴメンネーレンちゃん。また女の子の身体になったら



ゆっくり快感をうえつけてあげるからね〜・・・」

「よし！撮影の準備だ！」

社長はスタッフを再び呼び寄せて号令をかけた。

時刻は夜中の2時

撮影は夜通し続いたのだった・・・

朝比奈はすぐにレンを抱き起こしてタクシーを呼び寄せてそれに乗り込んだ。

「え〜〜つと・・・たしか・・・表通り5丁目の路地を西に入った  
大きなワンルームマンションだったわね・・・」

調べておいたレンのマンションへ行き、タクシーから降りるころに

用意していた薬をまたレンに嗅がせた。

「うづうづ……え……??ああ……頭が痛い……」

「香川さん！香川さん！」

「え？……あ……はい？」

「おきて……大丈夫？……」

朝比奈はレンを揺り起こした。

「あ……ハイ……朝比奈さん？大丈夫ですよ……」

朦朧とする頭でレンは答える。

そしてレンがちゃんと立てるようになってからタクシーを降りた二人。

「大丈夫？撮影中にあなた急に眠り込んで・・・」

「え？そう？ですか？・・・確かネックレスがどうか・・・」

レンは自分の首にかかっているネックレスを手で確認して言った。

朝比奈がレンにネックレスを返して3時間がたった。

「レンちゃん、ネックレスは貸さないって言うからあきらめて

撮影見てたのよ・・・そしたら眠ってしまって・・・疲れてるよ  
うだったから

しばらく寝かせてあげてたの」

「そうだったんですか・・・？疲れてるのか・・・」

「うん・・・もうすぐ夜明けだけど大丈夫？もう数時間で仕事これる？」

「え？もうそんな時間なんですか？」

「無理なら私が言っただけよ」

「ああ・・・大丈夫です・・・これくらいで休めませんよ・・・」

「そっか。じゃあ明日また・・・あ・・・もう今日だね。じゃあとでね。」

そういつて朝比奈はタクシーに残ったまま走り去った。

レンはボーっとしたままエレベーターに乗り込み自分の部屋へ帰ってきた。

ボタン！

「ふう〜ふう・・・ なんかすごく疲れてる・・・それにあの後  
のこと思い出せないし・・・」

確かこのネックレスの事話してて・・・急にそれで・・・眠くな  
って・・・あ・・・」

レンは少しづつ記憶をたどっておぼろげながらも

「急に何か嗅がされて・・・口に何か当てられたんだ・・・そのあ  
と意識が・・・」

ハッとしてまた胸のネックレスを確かめた。

自分の胸も・・・

そして股間も確かめる。

「胸もあるし・・・オチ○○ンも・・・ないし・・・大丈夫・・・  
よね・・・」

自分がどれだけ眠らされていたのか、その時間差が把握できないレ  
ン。

十分に女の子に戻る時間が過ぎていることも気が付かないでいた。

「あ~~~~疲れたよ~~~~」

ドサッ！

そういつてレンはそのままベットに倒れ「むよつたして眠ってしまった。  
った。

一方撮影事務所では・・・



## 精神の崩壊

「ダメか・・・？」

「ええ・・・まったく反応なしです」

社長とスタッフが話し合っていた。

「おい！竜也！おい！しっかりしろ！」

いきなり社長が怒鳴る！

その前には・・・女性？男性？



そのどちらともわからない竜也がうずくまっていた。

「仕方ない・・・おい！ちょっと竜也に毛布を掛けてやれ！」

全裸のままの竜也にスタッフが毛布を掛けた。

ガチャリ！

そこへ朝比奈が戻ってきたのだった。

「どつしたの？撮影は？」

「ああ・・・それがな・・・すぐに女優を呼んで竜也に絡ませたんだ。」

あの手この手でなあゝ・・・」

「うんうん」

「でもダメなんだよ・・・ホラ・・・あの通りまったく無反応でな・・・」

すでに身体は元の男性に戻っている竜也は座り込んだまま動かない。

朝比奈はすぐに竜也の横へ行き声を掛けた。

「竜也君！ねえ！どうしたの？しっかりしなさいよ！」

肩を揺すって大声で問いかけても反応しない竜也に、

彼女は力いっぱい平手打ちを頬に浴びせた。

バツチン！！

「ねえー！りゅーやー！ー！どっしたのー！」

バツチンバツチン！！

それを見ていた社長が

「おいおい！真美！やりすぎだよ！おい！」

そう言って竜也と朝比奈の間に入ろうとした時！

「うっうっ！ー！あああー！ー！ー！」

いきなり竜也は社長の脚にしがみついていた。

「うわ！なに！すんだ！」

ドサツ！

脚を捕まれて転倒する社長。

「ううう……もっとほしい……ください……もっとしてくだ  
さい……」

カチャカチャ

そう言って社長のズボンのベルトをはずす竜也。

「おい！おい！つちよ！ちよっとまてつてー！」

「竜也君！やめなさい！」

朝比奈も懸命に止に入った。

「なんだ？どうした？」

他のスタッフもそれに気付き竜也と社長を引き離しにかかった。

「うっああ！はなせ！離してくれ！」

数人に取り押さえられた竜也はもがき暴れるが、しばらくするとおとなしくなった。

「はあはあはあはあ……」

「どうしたんだよ……？竜也……」

同じ男優仲間が声を掛ける。

「はあはあはあ……ごめん……もう大丈夫だから……

俺どうかしてたよ……すみません社長……」

少し落ち着きを取り戻した竜也。

「ごめん、もう離してくれ……抑えなくてももう暴れないよ……」

「あ……ああ……わかった」

それを聞いてみんなは竜也を開放した。

「すみません社長……俺も今日はあがります」

「あ？ああ・・・でも本当に大丈夫か？もう少し休憩していったらどうだ？」

「いえ・・・もう大丈夫だから帰ります・・・」

そういつて竜也は部屋を出て行き、自分の服に着替えて帰り支度をはじめ。

その隣の部屋で朝比奈は社長と話をしていた。

「ねえ、竜也・・・出来なかったんでしょ？」

「ああ・・・お前が出て行ってすぐに撮影を再開したんだ・・・」

キレイなバストにくびれたウエスト。そこに男性の股間がある

竜也は息を呑むような雰囲気があったぜ・・・」

「でも・・・ダメだった・・・んでしょ？」

「そうだよ・・・なにしても反応がなかった・・・無表情の竜也が

されるままの人形のようにだったんだ……」

「……………」

「そのうち身体が男性化してきて……女優を跳ね除けだして

拒否しだしたんだよ……」

「そうなんだ……」

「まいったよ……うまくいくと思ったのになあ……」

そこまで聞いた朝比奈は隣で帰り支度をしている

竜也の部屋へ入っていった。

服を着替えて扉に背中を向けた竜也が、荷物を片付けている。

ガサゴソ……

「竜也君……大変だったね……」



竜也の背中に声を掛ける朝比奈。

しかしガサゴソと着替えをカバンに詰め込む竜也は

それに返事もせず無視をしている。

「身体はもう大丈夫なの？完全に元に戻ってるの？」

ガサゴソ・・・

返事をせず無視しながら動きをやめない竜也

「男の身体に戻っても・・・立たずに女を拒否しちゃうんだ・・・

あのキレイな身体と強烈な快感が忘れられずに・・・」

ガサ・・・ゴ・・・

その言葉で竜也の動きが止まった。

「でももうダメよ。あれはあの1回でおしまい。」

何度もやれることではないのよ」

ジーーーーー……

バッグのチャックを閉める竜也

それを肩に下げて後ろを振り返り

部屋のドアの横に立っている朝比奈のほうに進んできた。

ドアから出るとき、横にいる朝比奈のほうを見ようともしない竜也。

彼女は竜也の手首をぐっと掴んで言った。

「いい？わかった？もう忘れるのよ！今夜の事はもう忘れるの！」

竜也はそう言っている朝比奈のほうに顔を向けることもせず

彼女の横に立ち止まった。

そして次の瞬間

ガシッ！

きゃー！

竜也は掴まれている手首を振り払い、

その手で朝比奈の首を力強く押さえつけた。

大きな手で掴まれると折れそうな細い朝比奈の首。

それをグッと押さえて頬に指を掛け、壁にガシッと押し付ける竜也。

その彼女の顔に自分の顔を、触れそうなくらい近づけて小さな声で囁いた。

「はいはい・・・おおせの通り・・・わかってますよ・・・」

竜也はそついつと舌を出してツウーつと朝比奈の頬に伝わせた。

その目はまるで冷血な爬虫類のような、冷たい眼差しだった。

ゾクッ・・・

朝比奈は押さえつけられていることもあり、身動き出来ずにいた。

まるで蛇に睨まれた蛙のように・・・

竜也が部屋を出て行くほんの一瞬のことなのに、

彼女には数分にも感じられる冷たいものだった。

ボタン！

「ハアハアハアハア・・・」

竜也に開放された朝比奈はその場にしゃがみこんでしまった。

そして彼に押さえつけられていた首にゆっくりと手を当てる。

「ああ・・・はあはあ・・・なに・・・？あの子・・・わたし・・・  
簡単に殺されて・・・る」

ボタン！

いきなりドアが開いて社長が入ってきた。

「おい！真美！どうした？大丈夫か？」

「ハアハアハア……ええ……大丈夫よ……」

「竜也になんかされたのか？」

「え……？いえ……大丈夫なんでもないわ」

「あいつここをでてまっすぐ出て行きやがって……」

お疲れさんの呼び声も無視して、無言で行っちまいやがった……

大丈夫なのかな……？」

「はあはあ……大丈夫じゃあないわ……あの子

あんな子じゃあなかったでしょ？」

「ああ、お調子者で明るくて……愛想のいい奴だったよ」

「ハッ！レ……ン……」

「ん？なんだ？どうした？」

「レンが危ないわ・・・竜也はまた必ずあのネックレスを・・・レ  
ンを狙うはずよ」

「え？そうなのか？」

「ええ・・・彼はもうあの快感を忘れられないの・・・」

いきなり数時間で完全な女体化を遂げて、その快樂に身を落として

精神までも崩壊したのかも・・・」

「え・・・マジかよ・・・」

「もう一度あの世界に戻る為なら・・・竜也はなんでもするよ・・・」

たとえ人殺しでも簡単にしちゃうと思う・・・」

「おいおい・・・勘弁してくれよ・・・」

「なに言ってるのよ！これくらいの事さばけなくて

どじすんのよ！一流にのし上がるんでしょ？」

「うっくっ……ああ……そうだな」

「とにかく今夜の映像はすぐに編集に回して、

出来るだけ早く流通に乗せるの！どこから圧力がかかって

目の目を見ないうちに消される前にだしゃうのよ！」

「あ……お……おう。わかった、すぐ手配する！」

社長はその場からすぐ離れて、編集にまわす手配をいだすのだった。



## 狂気

朝比奈はサツと携帯を取り出し電話をかけた。

「ツルルルルルル」

しばらく呼び出し音で

「はい？もしもし・・・香川です・・・」

「あ・・・レン？朝比奈です。さっきはお疲れ様。」

「ああ、朝比奈先輩。お疲れ様です。どうしました？」

「あなたいまどこ？まだ家でしょ？」

「エへへへ・・・あれからね、寝ちゃうときっと起きられないと思っただから」

10分程ウトウトしたただけで、すぐ着替えて家出たところです。」

その電話で話ながら自宅マンションのエレベーターを降りるレン。

マンションを出て角を曲がったそのときに、通り筋から徒歩で帰ってくる竜也がいた。

その差はわずか数秒・・・

レンはかろうじて竜也に出会わず、会社への道を進んでいたのだっ  
た。

「そう……もう出たんだ……」

ホッ……

朝比奈は竜也に出合わなかったことで胸をなでおろした。

「わかったわ、わたしももう会社へ向かうから仕事前にちょっと話しあるんだ。」

「お茶でもしながら話さない？」

「いいですよ。朝ごはん食べてないし、モーニングでも取りながらですね」

「そうね、じゃあ会社についたらまた連絡するわね」

ピッ！

一方レンとわずかの差で入れ違いになった竜也は、

自分の部屋の階には行かず、真っ先にレンの部屋に向かっていた。

「はあはあはあはあはあ」

ピンポーン、ピンポーン

呼び鈴を鳴らしてももちろん返事はなかった・・・

「ウツグッ！」

ドンドン！

ドンドン！

ドアを激しく叩く竜也

言葉は発さずに無言でドアを叩きだす。

ドンドン！ドンドン！

次第にその叩く強さも増していき、ついには蹴りだしたのだった。

ガンガン！ドンガン！



相変わらず冷たい目で、視点が定まらず虚ろな表情をしている。

そして聞き取れないくらい小さな声で呟いていた・・・

「ボソボソ・・・ボソボソ・・・邪魔するな・・・邪魔だ・・・  
殺してやる・・・あれは俺のものだ・・・」

ボタン！

自分の部屋に入った竜也。

もし・・・

もしもあの時外で、レンと出会っていたら・・・

もしレンがまだ家にいたら・・・

竜也はなんのためらいもなく、レンを殺害してネックレスを奪って  
いただろう。

その数秒の差で何とか難を逃れたレン・・・

しかしまだその危機に変わりはなかった。

だがレンはまだそれに気が付いていない・・・

部屋に入った竜也は、明かりもつけずに頭から毛布をかぶってベッ  
トの上で座っていた。

眠ることもせずにボソボソとつぶやきながら・・・



## 中東の大坂

一方ここは中東

一人この見知らぬ地へ現れた東洋の男は、

その不思議な能力で見る見る間に周りをひき付けていた。

人のココロを読み従わせる男

周りからの攻撃をいっさい受け付けない神の力を持つ男

東洋のその男の名は

オオサカ

彼はその力で、まず偶然引き込まれたテロ組織を洗脳していた。

その後回りのグループにもコンタクトし、彼を取り巻く組織は巨大なものへと

膨れ上がっていたのだった。

彼の周りには屈強で有能な兵士が数人つき、そのスケジュールも分刻みのものだった。

この日も

「オオサカ、ゴゴカラシンクノサソリ、リーダーノアッサムガ

メンカイヲモトメテイマス」

「ん？え？いきなりだな・・・」

「オソラクマタワナノカノウセイモ・・・」

「まあいいや、また俺一人で会うからと伝えてくれ。」

「エ？マタヒトリデスカ？ソレハ・・・」

「一人だからいいの！お前たちが来ると巻き添えくらって余計に危ないでしょ？」

「ウグツ・・・ワカリマシタ・・・」

「アツサムかあゝ・・・あいつ、考えが凝り固まってて

なかなかわかってくれないんだよなあゝ・・・」

頭をポリポリかきながら呟く大坂。

先日日本のテレビでニュースとして流された自爆テロを行った「真紅のサソリ」

そしてそのテロ組織のリーダーとして報道されたのが日本人、大坂だった。

しかし実情は違っており、数多くのグループをまとめあげだしている大坂に対して、

真紅のサソリが起こしたテロ事件の罪を被せようとしていた誤報だった。

攻撃的で短絡的な組織

「真紅のサソリ」

その中心人物のアッサムは、非情で有名な男だった。

大坂はこれまでも何度かその男と面会を果たそうとしていたが、

しかしそのどれもが畏で、大坂の命を狙うものばかりだった。

それは必ず落ち合う場所へ向かう途中に仕掛けられており、

銃を所持した数人の男に襲撃されたり、

通り道に爆弾を仕掛けられたりもしていた。

アッサムは大坂暗殺に失敗すると、それは自分が仕掛けたものではないと弁明する。

そしてつねに大坂は危険がある所へ出向く時は、必ず一人で出かけた。

そうすれば爆発に巻き込まれても仲間を失わずに済むからで

これまで大坂はここで数多くの人に話をして回っていた。

それは 血を流して得る平和なんか、幻に過ぎないと。

人と人は手を取り合って努力する

それによって得られるものは、ほんのわずかな平和でも

いつしか大きな木となり周りを包むことでしょうか・・・

大坂はその不思議な力で、人々の心に直接語り掛けていた。

民族の為に戦っているテロ組織も、結局仲間や家族を守る為に血を流しているのだ。

人が人を傷付ける、その行為がいかに愚かなことなのか・・・

肉体的に傷付けるのも、言葉で傷つけるのもそのどれもが最低の行為であると・・・

対立している場所へ出向いて、それを解きほぐしまた違う地へ向かって説得を繰り返した。

その功績が認められて、大坂はもはやこの地になくってはならない存在になっていた。

神の子 才オサカ

偉大な指導者 才オサカ

そう呼ばれるようになっていたのだった。

しかし日本にはこの事実がまったく伝わらず、

嘘の報道が流されればすぐそれだけが伝わっていた。

なぜなら、この地はあまりにも危険すぎた。

日本人のみならず各国の報道マン、カメラマンなどが

次々と捕らえられて見せしめにカメラの前で公開処刑されるのが続いた為、

足を踏み入れるものがなくなったほどだった。



しかし大坂が現れてからの数日で、事態は急変していた。

そしてこの日、最大にして最も凶暴なテロ組織

「真紅のサソリ」との接触が実現しようとしていたのだった。

## 敵との遭遇

大坂は指定された車で指示の道を進んでいた。

周りにももちろん護衛などいない。

どこから攻撃されてもいいように、大坂一人の行動だった。

そして車の中で一人運転する大坂は、のん気にも鼻歌を歌っていた。

「フフ~~~~ン あ~~~~い~~~~しい~~~~てるからね~~~~って」

ずっと自分の着メロにしていた絢香の三日月。

それはレンに命を救ってもらった曲だった。

「あ〜あ・・・いつになったら日本に帰れるんだろ？早く帰って  
レンジにあいて〜よ〜」

不思議な力を得て神のように呼ばれている大坂。

しかし彼も人の子

寂しく辛い思いで一杯だった。

次もほんとに銃弾をとめられるのか？

爆発に巻き込まれてもあの力は発揮できるのか？

それらの不安がいつも、大坂を苦しめていたのだった。

しばらく進んだ車は、人気のない山の中で数人の男に停車させられた。

4〜5人の男はすべて巨体で完全武装していた。

「オリロ！」

マシンガンのようなものを向けた男は、車の中の大坂に怒鳴った。

「あゝはいはい・・・降りるんだね・・・」

バタン！

車から降りた大坂はドアを閉める。

そして前の男は大坂に銃を向けたまま動かずに合図した。

後ろに回った男が大坂のボディチェックをし

そして・・・

次の瞬間！

横にいた男がいきなり大坂の首もとを手で押さえつけて

サツと出したサバイバルナイフのような大きなナイフでスツと切り裂いた！

まさに一瞬の出来事だった！

大坂の横について1秒ほどの間にそれは行われて

その技は殺人マシンのごとく、一瞬で人の命を奪うものだった。

寸分の狂いもなく首の動脈をかききっている刃先・・・

しかし・・・

本来なら飛び散るはずの大量の血がまったく出ない・・・

「ウーウグッ！」

それどころかそのナイフを手にした男が苦しみだしたのだった。

そして大坂は言った。

「馬鹿なことはやめようや・・・俺は何をしても殺せないっていうのが

まだわかんねーのかよ・・・まったく・・・」

顔だけその男のほうへ向けて続ける。

「そんなナイフで首をえぐられたら痛いんだよ？お前にそれ・・・わかるの？」

「オウ！ウウウ・・・ウググググ」

男は懸命に身体に力を入れて抵抗しようとする。

しかし・・・

徐々に大坂に支配されたその男の身体は

大坂を切り裂こうとしたナイフを手にしたそれは、自らの顔付近まで上がってきた。

「アウウー!!マテ!ウウ!!」

ナイフの切っ先を自分の顔に向けて近づけた。

「ウグググググ!!」

「ドウシタ!ナニヲシテル!!」

周りの仲間もあわててナイフを手にしているその腕を押さえつけようとする。

「アガガガガガガ!!」

刃先はその男の・・・そう・・・右の眼球に近付いてきた。



目を閉じる行為も自由にさせないほど、その男は大坂に身体を支配されていたのだった。

徐々に自らの目に刺さろうと近づく刃先。

「ハアハアハアハア……」

それがもう眼球に1ミリほどの距離まで達した瞬間！

いきなりその男は ガックン！と、その場で崩れ落ちた。

ドサッ！

「アウウウ……ナニガオコッタ？」

周りの兵士も状況がつかめない。

「大丈夫だよ、死んじゃあいないよ。ちょっと首筋の頸動脈を

圧迫しただけだから。しばらくしたら目を覚ますって」

大坂は他の兵士にそう言った。

「おい！おまえ！」

次に大坂は強い口調で一人の兵士を指差して続ける。

「ウツ！」

指された兵士はビクツツと緊張が走る

「お前はこの気を失ってる奴を連れて帰るんだ。こんな所にほおっておけないしな。」

しばらくすると何か野生動物のイサにされちゃうだろ？」

「ウ……アア……」

「他の奴らはアッサムへの案内役だろ？早く連れてけよ」

それはまさに圧巻だった。

## 敵アジトの惨状

大坂の噂は彼らの耳にも入っていた。

死なない男

神の子

しかしその情報のどれも信じがたい内容ばかり……

ナイフで奴の首をかき切っても死なないのか？

その噂の真相を確かめようとするが故の行動だった。

「まったく・・・お前らのリーダーってのはもう・・・

学習能力ってものがないのかね・・・何度も何度も殺そうとしやがって」

大坂は残った兵士と一緒に別のジープに乗り込みまた走り出した。

それから数時間ほど車は走り、まわりはすでに暗闇に包まれる夜になっていた。

そしてようやく車は、テログループのアジトに到着したのだった。

332

「やれやれ・・・やっとついたのか・・・」

そういつて大坂は車から降りて、兵士たちの後について進んだ。

山間にある小さな建物

どうやらそれが真紅のサソリのアジトのようだった。

しかし……

異様な違和感を感じる大坂……

「ん？あれ？なんかへんだ？」

ゾクッ！

大坂の身体に悪寒が走る！

「なんだこれ？こんな感じ……」

数人の兵士は大坂の前に立ち、入り口から建物へ入っていった。

大坂は横についている兵士に話しかけた。

「おい・・・お前ところのアジトは見張りの一人も立たせないのか？  
なんか静か過ぎないか？」

「アア・・・ソウイエバソウダ・・・オイ！チヨットマテ！」

先に入り口を開けようとした兵士を呼び止めるが、しかしその声も届かずに

ガチャリ！ と、扉は開かれた。

・・・

シーン……

部屋の中の静寂にようやく異常を察した兵士たちは

ドアの左右に分かれて中の様子を伺いだした。

カチャッ！

手にした銃の弾装を確認し、無言で手で合図を送って一斉に中に踏み込む二人の兵士たち。

そして外でその様子を大坂はもう一人残った兵士と注目していたが当然中の様子はわからなかった。



しかし大坂を迎えに来た彼らは、特別な訓練をつんだ傭兵たちだ。

それ故に彼らも建物の異様な雰囲気を感じての行動をとっていたのだった。

それからしばらくすると、中に入った一人がスツと出てきて手で入れと合図し、

それを受けて大坂と兵士は中に入っていった。

.....

中は真っ暗だった・・・

しかし・・・

部屋全体に充満している匂いは、今にも吐きだしそうな血の匂いだ  
った。

パチリッ！

一人の兵士が部屋の電気スイッチを入れた。

いきなり明るくなったそこは、まさに地獄絵図のような・・・

部屋中血だらけで、多くの兵士の死体が転がっていた。

その死に様は悲惨で、しかもすべての死体の内臓と脳がなくなっ  
ていたのだった。

訓練された兵士たちでさえ、その匂いにたまらず手で鼻を押さえて見ていた。

もちろん大坂はこれほど悲惨な状況に出くわしたことも初めてだった。

こらえきれない彼は、口を押さえて一人部屋から外へ飛び出していきなりゲロをぶちまけていた。

「ウゲエー！！！うえ！うえ！」

死体を見慣れている兵士と違って、大坂には強烈過ぎた。

しかし兵士たちはそんな大坂にかまわず現場を散策しだした。

「オイ・・・ドウオモウ？コノジヨウキヨウハ・・・」

「アア・・・コンナコロシカタデキルモンジャアナイ・・・」

トテモニンゲンノスルコトジャアナイ」

「アア・・・ハラワタトノウガナクナツテイル・・・」

マルデナニカニクワレタカノヨウニ・・・」

その時・・・

グルルルル・・・

部屋中がかすかにうなり声が響いた。

ビクッ！

いきなり銃を身構える兵士たち。

「ナニカイルゾ・・・ウエノカイダ・・・」

「ヨシッ！」

兵士二人は同時に上の階へ上がって行った。

そしてもう一人は外で嘔吐している大坂のもとへ駆け寄る。

「オオサカ、ダイジョウブカ？」

「ああはあはあ・・・もう大丈夫だ・・・さすがの俺もあんなの見

慣れてないからな・・・」

「ソレハシカタナイ・・・デモソンナコトヨリナニカイルゾ」

「そりゃあそうだ・・・あんなの人のすることじゃあないよって・・・あれ？あとの二人は？」

「ウエノカイカラコエガキコエタカラシラベニッテル」

するとその時！

ダダダダダダダダー！！

いきなりマシンガンを連射する音が響き渡った。

「ウウウー！ウギャー！！！！」

ダダダダー!!

ガッシャーーン!

2階の窓が破られて一人の兵士がいきなり投げ出された!

その身体は大坂と横の兵士の前まで飛び出して落ちた。

ドッサ!

「オウ! ナンダコレハ!」

それは先ほど二人で上の階を見に行った兵士のうちの一人だった。

しかしその兵士も、ほかの遺体同様すでに内臓と脳をえぐり取られていたのだ。

「ウウウー! ハナセ!」

続いて声が二階から聞こえた！

そして次の瞬間！

二階のベランダに兵士の姿が見えたが・・・

「グウウウウギャー！」

その姿はいきなり軽々と持ち上げられ宙に浮いたのだった。

「おいおい？・・・なんだよ・・・」

そのベランダに兵士の後に続いて姿を現したものは、何本もの触手をクネクネと出して



その真ん中には大きな口と鋭い歯をうごめかしている化物だった。

「ナンダアレハ？バケモノ？」

その長い触手は兵士の身体に巻きついて軽々と持ち上げていた。

そして他の触手がいきなり兵士の脳天からズボツ！と突き刺さった。

「ウウゲツ！！」

兵士は白目をむき、舌を出して全身を痙攣させている。

ビクッビクッビクッ！！！！

口からは涎が流れ、股間からは尿も便も垂れ流しの状態だった……

頭に刺さった触手はその兵士の脳みそを一気にすすりあげ、そして次にそれは兵士の腹に

ズボツ！！と突き刺さり、同じように一気に内臓をすすり上げたのだった。

バトル！

そして最後に何もなくなった腹の皮を引き裂いて

先ほどと同じように大坂の目の前に投げ捨てられたのだった。

ドサッ！！

「アワワワワ・・・」

隣にいる兵士が震えていた。

いくら屈強に訓練された兵士でも、怪物相手となると余裕も何もなかった・・・





そして低い声で唸り声をあげている。

「ヒイイイイ・・・」

兵士は大坂の背後に隠れてしまった。

怪物の正面に一人立つ大坂！

怪物は何本もの触手をくねらせて大坂との間合いを詰めてくる。

そしてついに触手の届く距離になったその時！

鋭く大坂めがけて突進してきた！

だが！次の瞬間！

自らの手のひらを怪物のほうに広げて伸ばす大坂！

一瞬にして触手も怪物の動きも静止した。

そして・・・

大坂はゆっくりとその手のひらを　グググッ！っと、握りだした

「ウグググググググギャア・・・」

その手の平に掴まれるかのように怪物の身体も変形し、大坂の額に汗がにじみだした。

その手の平も震えるほど・・・

怒りと力を込めて兵士に言った。

「おい・・・よくみとけや・・・お前たちの仲間の仇をとってやるよ」

そついうと大坂は、半開きだった手の平を勢いよく ゲツ と握り締めた！

「くたばれ！」

ガッ！



その瞬間！

怪物の身体は強烈な力で握りつぶされて　バツシャー！！！！っ  
と、

あたり一面にその体液が飛び散ったのだった。

しかしその体液でさえも有害な物質かもしれない・・・

だからそれもまったく浴びないように大坂はコントロールしていた。

自分の周りに念力で防御壁を作るかのようにして、後ろにいる兵士も守られたのだった。

「おい、少し後ろに下がろう・・・」

大坂は兵士にそう言って飛び散った体液の外に出た。

「スマナイ・・・オマエニイノチヲスクワレタ・・・」

「いいんだよ、そんな事・・・それよりありゃーなんだ？」

「ワカラナイ・・・オレモアンナノハハジメテミタ・・・」

「ここらでよく出る化物ってわけじゃあないんだな？」

「アア・・・ミタコトナイ・・・ガ・・・」

「ん？どうした・・・」

「アレハオソラク・・・シヨクブツダ・・・」

「はあ~~~~?植物~~~~???」

「アノツブサレタシガイノセンタンニ、ホウシノヨウナモノガミエ  
ル」

「孢子?なんだ?」

「モシカシタラアレガカゼニノツテアチコチニマカレタラ・・・」

「えー!?あんなのがあちこちで出てみるよ!人類滅亡しちまうぜ!  
なんせ銃がきかなかつただろ?」

「アア・・・スグニハウコクシナイト・・・オオサカモイツシヨニ  
キテクレ」

「一緒にって・・・?アツサムはやられてたんだろ?誰に報告する  
んだよ?」

「イイカラ・・・ワタシタチノヤトイヌシダ」

「雇い主って・・・お前らテログループじゃあないのかよ？」

「民族の信念とかそんなんじゃないのかよ？」

「ワタシタチハ、カネデヤトワレテイルヨウヘイダ」

「傭兵だどー？」

「アア、ソレデコウシテテログループニクワワツテ

チアンヲワルクスルノガワレワレノシゴトダ」

「・・・つたく・・・んで？だれなの？雇い主って？俺は誰に会えばいいの？」

「メガーラヤ・・・」

「え？メガ・・・え？」

「メガーラヤ・・・ダ」

「ええー??メガーラヤって・・・メガーラヤ国王かよ!!??」

「アア、ソウダ。メガーラヤコクオウガ、ワタシタチノヤトイヌシダ」

「ちょっとまって!お前なに言ってるのかわかってんのか?

国王ってこのテログループの最大の敵だぞ!」

「ソウダ・・・コクオウハナイミツニテログループトツナガツテイタンダ・・・」

「はあ~~~~・・・まったくやってらんないよ・・・腐ってるなあ~~~~この国は~~~~」

二人は話しながらここまで来た車まで戻りそれを使って移動を始めた。

「ダレガコクオウデモ、テロハナクナラナイ」

「はいはい、それで？」

「ソレナラテログループニスパイトシテセンニュウシ、

ソノジヨウホウヲヌスムノト、テロヒガイヲオサエコムコト」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ソレガワレワレノニンムダッタ」

「ちよつと待てよ・・・お前らそれなのに最初俺を殺そうとしゃが  
つたな」

「アレハオマエノウワサヲタシカメルタメニ、ワレワレガドクジニ  
シタコトダ

アッサムガメイレイシタコトデハナイ」

「あゝはいはい・・・ほんとにもう・・・勘弁してくれよ・・・  
死んでたらどうするんだよ？」

「ソノトキハソノママハウチシテダイチニカエル・・・」

「殺して放置かよ！」

「アッサムニハコナカッタトハウコクスルツモリダッタ」

「うげ〜〜さいあく〜〜」

「シカシジヨウキヨウガイッペンシタ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「アンナバケモノガアチコチニデルトナルト・・・」

「わかったよ、それよりお前衛星電話持っていないか？」

「ん？アア・・・コレガツカエル」

兵士はトランシーバーのような大きな電話を取り出した。

「お！さんきゅ〜」

ピッ！

ピッ、ピッ！ピッピッピッ！

大坂はそれですぐに自分の仲間に連絡をした。

「ああ、俺だ・・・大丈夫だ、そっちは？ん？なんだって？聞こえねーよ・・・」

車は走りながら途中ひとつの小さな村に差し掛かった。

キキキキイー！

「うわっと！！なんだよ急にブレーキ踏みやがって！」

「ゼ・・・ゼンメツダ・・・」





## 帰還

「あ？なに？全滅って？・・・あ・・・わりいーまたあとでかけなおすわ」

ピッ！

大坂は電話を切って外を見渡した。

「なんだこれ？」

その小さな村は完全に崩壊していた。

村のいたるところから煙が上がっていくつもの死体が転がっており、

老人も幼い子供もそれに含まれていた・・・

「おい・・・これって・・・」

「アア、コレハバケモノノシワザジャアナイ。ニンゲンガヤッタモノダ・・・」

「いったいなにが起こってんだよ・・・」

呆然とその景色を見渡す二人はしばらくして再び走り出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

大坂はもう一度電話を掛けて、仲間に事情を説明している。

「だからー！アツサムは死んだの！化物に食われて死んだの！え？  
なんだって??？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そりゃーおかしいって・・・・・・・・んで？おう・・・・・・・・おう・・・」

ええー！！！！？ああ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・わかった・・・

「こつちにも情報を持っている奴いるから一緒に帰るわ！それ  
まで無茶すんなよ！」

ピッー

「ふう~~~~」

携帯をきって大きなため息をつく大坂

「ナントイッテタ？」

「あのな・・・アッサムな・・・生きてるって・・・」

「ソナバカナ！ソレハアリエナイ！」

「いや、実際に生きててテレビに出てるんだって！」

「テレビニ？ソレノハウモオドロキダ！」

カレハカンゼンニハンザイシャデオワレテイルノニ

「それがなあ・・・一緒にテレビに出てるのは

おたくの雇い主で今から会いに行こうとしてるメガーラヤ国王  
なんだよ」

「エ？ソナバカナ？」

「しかもな・・・国王はアッサムと一緒にあってこの国の肅清を唱えだしたんだと・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「これから気に入らない地区、民族はどんどん排除するらしいぜ・・・」

「ジャアサツキノムラモ・・・」

「そうだな、恐らくそれで攻撃されたんだ・・・」

それで多くの人間を捉えて収容所へ送ってるらしいんだ」

「シュウヨウシヨ？ナゼダ？ソナトコロヘイレテモシヨクリヨウ  
ナドナイノニ・・・」

「なんかありそうだな・・・」

車は国王のもとへ向かって走っていたのだが・・・

「おい！とりあえず国王の所へ行くのはキケンだ。まず俺のアジトへ向かおうや」

ブウオオオオオオオー！

「ワカタタ・・・オオサカニハイノチヲスクワレテイル・・・オ  
レハオマエノイウトオリニスル」

車は向きを変えて再び走り出した。

「アッサムと国王が手を組むなんてあり得るのか？」

「ソレハゼツタイナイ！ソレコソナニカノマチガイダ！」

「しかし現にこうして・・・でも・・・そこが鍵かもな・・・」

それから数時間走って、車はようやく大坂のアジトへ到着した。

キキキー！

到着と同時に仲間に迎えられる大坂。

「ヨクゴブジデ！」

「オオサカサマ！！！」



それを見た兵士は目を丸くして

「ヤッパリオマエハイダイナヒトナングナ・・・」と、呟いた。

.....

アジトの建物の中に入って先の部屋に進む大坂。

そして一番奥の部屋に入るとそこは、コンピューターが並んだ近代化された

作戦室のような部屋だった。

バタン！

「オカエリナサイ！リーダー！」

と、「ここでも無事の帰還を喜ばれる大坂だった。

「おいおい、リーダーって呼ぶなって……」

「ア……ハイ……スイマセン」

「そんなことより、国王とアッサムのテレビ放送見せてくれや」

「ハイ、スグニウツシダシシマス」

メカに詳しそうな若い兵士が、パソコンを操作して映像を出そうと  
しているその時、

ドタドタドタ……！

廊下を騒がしくこの部屋に向かってくる音がした！

バタン！

次の瞬間部屋のドアがいきなり開いて、頭からヘルメットをかぶり、

砂埃を防ぐ為のゴーグルとマスクをして完全に

顔をふせている兵士が勢いよく入ってきた！

「ん？？なんだ？」

「オオオオオオ！！！！！！オウオウ！！！」

その兵士は部屋に入るなりいきなり大坂のもとへ行き激しく抱きついてきた！

「うあがつ！　　っちよっちよっつとまで！！！」

「ウググググウグアグアグ」

兵士はマスクをしている為になにを叫んでいるのかまったくわからなかった。

「抱きつくなって！ちょっと待ってって！おいおい！」

大坂は抱きつかれて自分の顔に当たるヘルメットが痛いらしく、

ガンガン！

「だから痛いって！」

そういつて、その兵士のヘルメットと、マスク、ゴーグルを引き剥がした。

するとその下の顔は、外見からは想像できないくらいとてもかわいい女性の顔が現れた。

ヘルメットからこぼれた髪の毛は、肩まで伸びた細くて綺麗なものだった。

そして顔をあらわにしたその兵士はいきなり大坂に激しいキスをしてきたのだった。

「うおづぐぐぐぐぐぐぐぐぐ！」

大坂の身体をきつく抱きしめてまるで獣のような強烈なキス・・・

大坂はたまらずそのキスから逃れて言った。

「おい！おい！ちょっとまって！ストップ！！ナツキ！ストップだ！！！」

両手でその女性兵士の顔を挟んで、強い口調で言う。

その兵士は目にいっぱい涙を浮かべて大坂の顔を見つめていた。

彼女はシャリファー・ナツキ・ビンティ・サルド・アブドル・ラフマン

その名前にナツキと入っていた為、大坂は彼女を日本名のようにだと面白がって、

ナツキ！ナツキ！と呼んでいた。

彼女の両親は民族解放運動に参加していて、

その抗争に巻き込まれ10年ほど前に亡くなっていた。

孤児となった彼女はテログループに拾われて、

戦士としての訓練を受け、女性ながら屈強な兵士へと成長していたのだった。



## 国王の策略

しかし数日前から大坂が現れて、彼女のテログループを洗脳し

また彼女自身も大坂の魅力に引き込まれた一人だった。

「オオサカ・・・ヨクブジデ・・・」

涙を流して大坂の帰還を喜ぶナツキ。

「わかったわかった、喜んでくれて嬉しいよ。でも・・・ちよっと離れてくれ・・・」

そういわれてナツキはようやく大坂から離れたのだが・・・



いきなり横にいる大坂といっしょに来た兵士に向かって銃を突きつけた！

「ダレダ？オマエハ？」

カチャリ！

「わー！ちよつと待てって！」

大坂は慌ててその銃口を手で押さえてナツキを制した。

「こいつはアッサムの所にいた兵士だよ。だけどな・・・」

大坂はナツキやその司令室にいるほかの仲間にもここに来るまでの事を説明した。

.....

「バカナ！アツサムハマダコクオウノトコロニイルヨ！」

ナツキが大坂に叫ぶように言った。

「ああ・・・そうらしいなあ・・・」

すると横に座っていた兵士が

「サキホドノエイゾウノジュンビガデキテイマス」

と言って、モニターに映像を流し始めた。

大坂と一緒に来た兵士がその映像を食い入るようになっている。

「なあ……おまえさあ……名前なんていうの？」

「ん？オレハ、ハレード……」

「あ……長いのはいいや……なんて呼べばいい？」

「ウ……アア……ソレナラ、ムハンマド、トヨンデクレ」

「わかった、ムハンマド、んで？「れどづ思じっ？」

二人は映像から目を離さずに喋っている。

そこには国王とアッサムがお互い硬い握手を交わして、

これからの国の方針について語り合っていた。

そしてその次に国王が、大規模な粛清を実施すると告げて映像は終わっている。

「しかしこれが本当なら、大変だぜ・・・」

「アア・・・シンジラレナイ・・・」

「虐殺なんてもんじゃあないぜ・・・これは人類史上最悪な大量殺戮だよ・・・」

まわりのみんなも大坂の言葉に聞き入っていた。

「それに・・・途中少し出ていた、あの捕らえられた人達な・・・あれはどうするつもりなんだ？」

ムハンマドがさっき言ったように、この国には収容しておく施設も食料もないはずだぜ・・・」

「ソノトオリダヨ・・・オオサカ・・・ツカマッタヒトタチハ、ミンナコロサレル・・・」

ナツキが大坂の目を見て訴えた。

「そうだろ？・・・まあとにかく俺はこれから国王に会って来るわ・・・」

「ジャアコチラモゴエイヨツケテ・・・」

「だめだめ！俺一人で行かないとだめだよ」

「デモ・・・コンドコソブジニカエレナイカモ・・・」

ナツキは大坂の腕を掴んで涙声になりながら言った。

「アア、ワタシモハンタイダナ・・・」

ムハンマドまでもが大坂を一人で行かせることに反対する。

「ドンナワナガアルカ・・・イクラオオサカデモ・・・」

まわりの他の兵士たちも、さすがに国王の所へ乗り込むのは無謀としか思えないのだろう・・・

彼らも口々に反対を唱えだしていた。

「わかったよわかった・・・じゃあ数人のチームを組んで

近づける所まで潜入する。そこでまず情報収集だ」

部屋の兵士たちに緊張が走る。

それに大坂はテキパキと指示を与えていった。

「いいか、まず一番大事なのは自分の命だ。無茶はするな。

危なくなったらすぐに引き返すんだ」

そう言う大坂に周りの兵士たちは背筋を伸ばして答えた。

編成されたのは3チームだった。

大坂はナツキをつれてムハンマドと一緒に再接近を試みる。

他の二チームはその周辺で情報収集となったのだった。

「出発するのは夜中の3時とする！おそらく到着するのは明け方になるだろうから

みんなそれまでゆっくり休憩しておくようにな

「ハイ！リヨウカイシマシタ！」



兵士たちは各々散会し、個々の休憩室へと散らばっていった。

「ムハンマドもあの案内役について行って休憩を取ってくれ。

今夜出たらまたしばらくは休息なしになるからな」

大坂は彼の手を握り締めて目を見据えて言っていた。

ムハンマドは大きくうなずいて、案内役に連れられて部屋を出て行った。

「ナツキ！おまえもだ！ゆっくり休んで出撃に備えろ！」

大坂に言われたナツキは バツ！と敬礼し

「イエッサー！」と返事してクルリと転回し部屋を出て行った。

そして大坂も、見張り役にこの場を任せて自らの部屋に帰って行くのだった。

部屋に入った大坂は、そのままなだれ込む様にベッドに倒れこみ、ドロのように寝てしまった。

それから数時間がたち・・・大坂は夢の中にいた。

しかし・・・

その部屋に近付く足音があった。

完全に訓練されて消されている気配・・・

だがそのわずかな気配も、今の大坂には簡単に気付かれてしまっていた。

大坂の部屋のドアが、音もなくスツと開いて黒い影は侵入してきた。

ベットで眠っている大坂のもとへそれは近付いてきた。

息を殺しながら・・・

音もなく大坂の背後に忍び寄ってくる・・・

しかし・・・

「ウグウツ・・・カラダガ・・・」

それに気付いている大坂の力によって侵入者はその動きを止められてしまった。

## 愛する人

「ふあゝあゝあ……誰だよ……まったく……」

眠気眼をこすりながら大坂は侵入者を確認した。

「あ……え??あ……あれ???おまえ?」

パチッ!と部屋の電気をつけて現れたのは、ナツキだった。

しかもその姿は先ほどまでの兵士の姿ではなく

見事な女性のラインを表している、全裸のナツキだった。

大坂の力によって動きを止められているその姿は、

手を横に広げてバストも股間もさらけ出していたのだった。

「ア……ウ……」

ナツキは顔を真っ赤にし、恥ずかしさいっぱい表情で耐えていた。

その姿を見て大坂はナツキの拘束をといた。

バツ！

自由になったナツキは、勢いよく大坂の胸に飛び込んできた。

「おおおい！ちょっと！おいおい！」

綺麗なナツキのバストに大坂の顔が埋もれた。

「うっぶぶぶぶ……ちょっとまって……」

ナツキはそのまま止まることなく夢中で大坂に抱きつく。

「うがっ！ちょっとまってっ！！」

大坂は懸命にナツキの身体を引き剥がし、両肩を押しさえて言った。

「どうしたんだ？ナツキ？おまえ……いつたい……？」

少女の時から兵士の訓練を受けて、鍛え上げられたその肉体は見事だった。

しかも小柄な体格のわりに、服を着ているときはわからない綺麗なバストが目を奪う。

キュとくびれたウエストに肉付きのいいヒップは

もはや少女の身体ではなく大人の女のものだった。

「オオサカ・・・ナニモイワナイデ・・・」

「何言ってるんだよ・・・おまえ・・・」

.....



ナツキはいきなり動揺する大坂の唇を奪った。

「あつうつ・・・ナツキ・・・」

そしてそのまま身体の向きを変えて、大坂のズボンとパンツを下ろそうとした。

「あ！だめだつて！ちょっとまってって！」

ナツキは再び大坂に抱き起こされた。

大坂は両方の手のひらでナツキの顔を挟み、自分の顔を近づけて言った。

「おまえなにしてんの？裸だし・・・わかってんのか？なにしているのか？」

大坂はまるで子供を諭すように言う。

孤児になったのが六歳の時・・・

それから十年間、彼女はただひたすら戦闘の訓練のみを教え込まれて生きた。

その彼女が目にいっぱい涙をためて、恥ずかしさからか顔を赤らめながら話した。

「コノアト・・・サクセンニデルト・・・モウワタシハ、シンデシ  
マウカモシレナイ・・・」

大坂はナツキの唇にそっと指を当てて

「喋らなくてもいい・・・頭に思い浮かべな」と、そう言った。

もともと大坂は、この国の言葉などわからなかった。

それより考えを読むほうがスムーズに理解できるので、

ナツキはそういわれて頭に思い浮かべた。

「わたしはこのあと死ぬかもしれませんが・・・だから・・・

このまま死ぬより・・・大坂に抱かれない・・・

お願いです・・・死ぬ前に心から愛した人に抱かれないのです・・・

「ばかつやる・・・死なせるかよ・・・俺が絶対に守ってやる・・・

」

ナツキの一途なその愛情に、大坂も答えた。

「嬉しい・・・大坂・・・愛してる・・・」

ナツキはそう言いながら、満面の笑みを浮かべて大坂にキスをした。

大坂もそのキスを受ける・・・

それは長く深いキスだった。

舌と舌が絡み合い、お互いの顔を掴み激しくむさぼるようなキスだった。

すでに全裸のナツキは大坂のシャツとトランクスを脱がせた。

二人は互いに肌と肌を寄せ合い抱き合っていた。

## 愛の証

大坂はナツキを強く抱きしめてゆっくりと彼女を確かめた。

「アア・・・アアン・・・」

ナツキの口から甘い声が漏れ出した。

綺麗な小麦色の肌に形のよい乳房、その先にはピンク色に染まった乳首が揺れていた。

大坂はそんなナツキを愛しく優しくまるで赤子を抱きかかえるようにした。

「ウウウ・・・アアアン・・・オオサカ・・・アイシテル、アイシ

テル」

大坂は身体を起こしナツキの上に覆い被さるようにして聞いた。

「ナツキ、ほんとにいいんだな？」

最後に大坂にそう聞かれて、ナツキは再び幸せそうに満面の笑みを浮かべて小さくうなずいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「アアアア！！ウウ！イ・・・イタイ・・・！！」

顔をしかめて痛がるナツキ・・・

ベットには鮮血が染み付いた。

大坂はナツキに優しくキスをして動きだす。

「アアウ・・・アンアン・・・」

「初めてだったのか？・・・大丈夫か？」

「ダイジョウブ・・・ダイジョウブダカラ！」

次第に痛みもひき痺れたような感覚がナツキを支配しだした。

「アアア！！オオサカ！オオサカ！ウレシイ・・・モット・・・モット！！！」

大坂の動きも一層早くなり、達しようとした時・・・



「うー!!いくぞ・・・」

「キテ!ナカニ・・・オオサカノアカチヤンガホシイ!!」

ナツキは脚を彼の身体に巻きつけて、逃れられないようにした。

「ああ!おい!ばか!あつう!..!」

.....

そして

大坂はそのままナツキの中で果てた・・・

.....

大坂の腕枕で眠るナツキ

とても幸せそうな彼女の寝顔を見て

大坂は複雑な心境だった・・・

作戦開始！

そして、いよいよ作戦開始の時刻

選ばれた精鋭たちは、各々配置について大坂の指令を待っていた。

「よし！みんな時刻を合わせる！あと3分後に一斉に出発し、王国都市部に潜入する！」

目の前の十数人に緊張が走る。

「何度も言うように絶対に無理はするな！先に話した様に、

妙な怪物の姿も確認されている・・・充分注意しろ！」

「イエッサ！」

「それでは各自配置につけ！」

その号令で一斉に車に乗りこむ兵士たち！

大坂はナツキの運転するジープに乗り込んだ。

そして三台の車両は出発した。

午前3時・・・

車両は道なき道を進んでいた。

まわりがまだ薄暗い中・・・

三時間ほど走った後にようやく目的の王国が見えてきた。

大坂は無線機で他の二台に指示を出していた。

「チームBとCはこの周辺の人民街を調査するように。俺らは王国内部に侵入する！」

そういつて大坂の乗る車だけが真っ直ぐに進んでいった。

・・・・・・・・

東の空が薄っすらと白んできて、朝日が昇ろうとしていた。

王国の城下町では日が昇ると同時に少しずつ人が見え始めた。

国がこんな状態でも、商店などを開ける準備をしているようだった。

それから数時間が過ぎて、城下町は賑やかな雰囲気にも包まれた。

405

行きかう人々はこの町の外での惨劇を知らないかのように普通に生活をしていったのだった。

「なんかおかしくないか？変だろ？やっぱり・・・」

大坂はムハンマドとナツキに言った。

賑やかな町・・・

平然と暮らす人々・・・

まるで夢でも見ているような世界だった。

・・・

そこへ一台の大型トラックがやって来た。

「ん？なんだ？かくれる！」

三人は建物の影に身を潜めてやって来るトラックを見ていた。

「あ……あれは……人？か……」

トラックの荷台にはあふれんばかりの人が乗せられていた。

町の人たちはそれがごく普通の出来事のように関心を示さずに普通に見送っている。

407

「お前たちはこのあたりで待機！」

「エー!？」

「ここで待ってるんだよ!」



大坂はそう言っていていきなり一人でそのトラックの後方へ近付いて

スツと身をかがめて後部に飛び乗った。

一瞬の出来事でまわりの人達も気がつかずにトラックは大坂を乗せたまま城に入っていた。

「グツ！オオサカ！バカ！」

悔しがるナツキ！

「シカタナイ・・・ココデオオサカカラノレンラクヨマトウ・・・」

ムハンマドはナツキにそう言って周りを見渡した。

するとムハンマドのいる目の前に、いきなり建物の影から数人の男たちが現れた。

その中心にいるのは、前日まで一緒にテロ活動をしていたアッサム本人だった。

「ウグッ！」

あまりにも突然の事で、ムハンマドも身を隠すことが出来ずに

まともにアッサムと目が合ってしまう・・・

最悪の状況だった・・・

アッサムに自分が裏切っていることが知れる・・・

捕らえられたらもちろん命はない・・・

ムハンマドに緊張が走るが、

しかし

彼と目が合い、完全に確認しているにもかかわらず、アッサムに反応はなかった。

そして緊張するムハンマドの横を何もなかったかのように通り過ぎていったのだった。

「フウ・・・ハアハアハアハア・・・」

アッサムが通り過ぎてしばらくして、ムハンマドはガクリと体の力を抜いた。

とっさに身を隠せたナツキが横に近付いて来てムハンマドに聞いた。

「アレハアッサム？ダロ？」

「・・・ハアハア・・・アア・・・マチガイナイ・・・」

「ジャアナゼ？オマエニキガツカナイ！？」

「ワカラナイ・・・キノウマデイツシヨニイタノニ、キガツカナイ・・・マルデベツジンノヨウダ・・・」

ナツキは汗だくで下を向いてつぶやくムハンマドの肩に手を置いて、

通り過ぎたアッサムの後姿を見ていた。

## 敵との遭遇

一方トラックに乗って進入した大坂は、車が停車する寸前に飛び降りて身を隠していた。

そしてすぐに無線機でナツキたちと連絡を取る。

「ガガガ・・・こちら大坂・・・現在トラックは城内部の

庭園前に停車して荷台の人たちを下ろしている・・・」

「ガガガガ・・・リョウカイ・・・バカオオサカ・・・ムリシナイ  
デ！」

「へいへい・・・バカは余計だよ・・・」

下ろされた人たちは騒ぎもせず、整列して順序良く歩きだしていた。

そしてしばらくするとまた次のトラックが入ってきた。

その後も次から次へと荷台に人を乗せたトラックが入ってくる。

「おいおい……ほんとにこんなにたくさんどうするんだよ……」

414

大坂は少し戸惑いを見せながら溢れかえった人の中にもぐりこみ

その列にまぎれて城内部へと進んでいくのだった。

「しかし……こいつらは……なんで?」

大坂の疑問は捕虜として連行されているにもかかわらず、

誰も騒がずに無表情で命令に従って進んでいることだった。

まるで何かの催眠術にでもかかっているかのように……

城の奥はいくつもの道にわかれていた。

まるで迷路のようによくつもの通路にわかれており、途中人々は少しずつ分散されていった。



そしてかなり進んだ頃・・・

大坂の耳に突然切り裂くような悲鳴が飛び込んできた。

「うびぢやあああああああああ！……！」

「うひひひひひうげやあああ！……！」

グツチャ！！グツチャギヤチャ！！！！

「……！！なんだ……！？？」

見回してもどの部屋からなのかわからなかった。

大坂はスツと列から離れて単独で動こうとした。

するとその背後からサツと近付いた兵士が大坂の身体をはがい締めにした！

ガツッ！

「ナゼウゴケル？ナゼイシキガアル？」

兵士はそつつぶやきながら大坂を拘束しようとする。

しかし大坂は

「放せ・・・」と、

そう一言発しただけで、兵士の両手は大坂から離れた。

「ウグツ！ナンダ！？カラダガ？」

大坂の念能力によって兵士に強烈な力がかかる。

「ウゴケナイ・・・」

.....

大坂は前にアッサムの兵士に襲われた時のように首の頸動脈を圧迫して意識を奪おうとした。

グツグツ！

「アウウウウ……」

ガック！

すると兵士はいきなりその場に崩れ落ちた・・・

「しばらく眠っててくれや」

大坂は先ほどの悲鳴が聞こえた場所を探すべく、その場から離れようとした時！

ガッ！

「え？」

気を失って倒れているはずの兵士にいきなり足を掴まれた。

兵士は大坂の足を掴んでグッと持ち上げます。

「おいおい！？ちょっと！！」

気を失ってるはずなのに・・・

大坂の判断がその疑問の為に一瞬遅れた。

そして次の瞬間！

兵士は大坂の掴んでいる右足を一気に引き上げて、グルン！ッと回して放り投げた！

その力はとても人間のなせる物ではなく、70kgはある大坂の身体を、

片手で片足を持っただけで軽々と振り回して投げたのだった。

「ぐわっ！」

大坂の体が中に舞った！

そしてそのまま壁に激突するかと思われた寸前に、ピタッ！っと、空中で停止した。

「はあ〜っ……びっくりした……なんだよもう……」

一瞬遅れた判断で投げられはしたものの、再びその念力で自分の身体をコントロールする大坂

彼のこの力は自分の意思で何でも動かすことが出来るものだった。

銃弾でも身体に当たる寸前で停止させる事が出来た。

爆風も身体の周りにその力を働かせて影響を受けなく出来る。

サイコキネシスというにはあまりにも強力な力を大坂は身につけていた。

彼の身体はそれによってコントロールされて、今は宙に浮いて停止していた。



そして兵士の手の届かない空中から、様子を伺っている……

「なんで？あいつ……意識ないはずなのに……」

確実に意識を奪ったはずなのに、その兵士は中に浮いている大坂を見て

何の動揺も見せずハンドガンを取り出して大坂に向けて構えた。

カチャリ！

「え？おおい！」

バンバンバン！！

容赦ない銃弾が大坂に浴びせられた。



## 敵の意識

しかしその弾丸は大坂の前で停止しそのまま地面に落ちた。

コトコト！コトリ！

大坂は右手をグツと握り締めて、兵士の自由を奪う。

「ウグググググ・・・」

まるで見えないロープで両手を縛られたかのような兵士。

「ダメだな・・・意識を奪ってもだめだと・・・どうすりゃあいいんだ？」

敵とはいえむやみに傷付けることを嫌う大坂。

膠着状態に入ると思われたその時！

グチユグチユ！グツシャー！

いきなり兵士の頭部が裂けて、中から異様な物体が湧き出てきたのだった。

「ウゲツ！なんだあれ！！？」

大坂の拘束力を上回る力が、兵士を動かしていた。

「すっげー力だ！うぐぐぐぐ」

兵士の顔は避けて緑の異様な塊がせり出て、中心には鋭い歯のようなものが見えた。

そして両手の先もブチッ！っという音とともに裂けて数本の細い触手が飛び出てきた。

ビシュッ！！

それらが大坂めがけて凄まじい勢いで飛んできた！

ビシュッ！ビシ！ビシ！

大坂は慌てることなく両方の手のひらを自分の前に出してスツと横に広げると、

触手は大坂に届くことなくその寸前で停止した。

「……………こいつ……………あの時の……………化物と同じじゃあないか……………」

それはまさにあのアッサムのアジトで見た、巨大人食い生物に似た姿が

兵士の身体から現れたのだった。

兵士の身体はもはやその原型をなくしてボロボロの皮と衣服だけが無残にも残されていた。

「なんてことだよ……こいつら……人間になりすましがる……」

大坂を拘束しようとした時は、まだ兵士の姿で普通に話もしていた。

しかし彼に攻撃されて自由を奪われたときには、本性を表し反撃に転じた。

……

うごめく触手……

本体の身体からは緑の樹液のような液体がヌメヌメと滴り落ちていく。

「きもちわりーな・・・」

大坂は地面に降りて、その化物に対峙していた。

「さて・・・どうしたものか・・・」

グゲゲゲゲ！！

その化物は大坂の普通でない能力に戸惑い、攻撃するのをためらうかのように静観している。

「なんかこいつ・・・攻撃してこなくなった・・・あ・・・そうだ・・・」

大坂は知能がありそうなその化物の頭の中を読もうとした。

「うえっ?!なんだこいつ?」

その化物の心の中は

( コロス・・・クロス・・・殺して食う！ ) と、その繰り返しばかりだった。

「一旦戦闘モードに入ると、ただの殺戮マシンかよ・・・」

大坂がそう思った時に、怪物は痺れを切らしたのか突然飛び掛ってきた。

グワッ！！

大坂にまきつく触手！

一瞬締め上げられているかのように見える状況だった。

しかしそれは大坂の身体には触れずに、数ミリの隙間を残してブロツクされていた。

まるで見えない薄い鎧を纏っているかのような大坂の身体だった。



そしてそれは彼の全身を覆っており、指先までもがその状態で

「しかたねーか！」

大坂はそういうと両手をその化物の口に突っ込んで、左右に引き裂こうと力を入れた。

もちろん彼の腕の力で引き裂くことなど出来ない。

その力は彼のサイコキネシス・・・念動力によるものだった。

グググググー！！

「ウギヤギヤギヤギヤー！！！！」

引き裂かれまいと必死にこらえる怪物。

しかし大坂の力の前には無力だった。

グワツシャー！

バリバリバリ！！！！

無残にもその全身は真っ二つに引き裂かれた。

大坂の前に残骸がピクピクと痙攣をおこして力尽きていた。

「ほんとに……こりゃー動く人食い植物だな……」

いつまでもこの場で立ち止まっている場合ではなかった。

この死骸を見つけて他の仲間がいつやって来るかわからないため、

大坂はすぐに身を隠し、先ほど悲鳴が聞こえてきた部屋の搜索に向かうのだった。

## 人を食う

しばらく進むと広い大広間に出た。

大坂はその大広間を見下ろせる二階の部分に姿を現したのだった。

そしてそこで彼の目には信じられない光景が飛び込んできた。

広い部屋の中心には巨大な食人植物の姿があり、ここに連れて来られたと思われる人間が

何人もその触手に捕らえられてガッシリと巻きつかれ固定されていたのだった。

部屋の隅で一人の女がそのままに触手に捕らえられたばかりで

「いやあああああ！！！！！！！」

シユルシユルシユル！！！！

その女に触手は目にも止まらぬ早業で巻きつき、その先端が彼女の首筋に打ち込まれた！

チクツ！

細い先端は針のようになっていて、彼女の首に刺さったかと思うとすぐに抜けて、

そのまま彼女は固定されてしまった。

即効性の麻酔薬のように、先ほどまで悲鳴を上げていた彼女も

そのあとはまったく反応せず、気を失っているようになった。

そして動きの止まった彼女の鼻に再び触手は進入していき、何かを注入しているようにみえた。

それとは別にその隣で、捕らえていた男の脳天から先ほどの細い触手ではなく、

太く硬い触手が突き刺さった。

ズボッ！

「ウアガガガガガガガガ！！！！！！！！！！」

それは脳みそだけでなくそのまま脳天から身体の中を下り、

体内の内臓や血液などの水分を一気に吸い取っていく。

ドサツ！

すべて吸い取られた死骸は、皮と骨と髪の毛だけになりミイラのような状態でよこたわった。

その死骸を数人の人間が片付けだす。

何人もの人間を捕らえて集めていたのは、このように奴隷として操るかもしくは

怪物たちの食料にするためだったのだ。

そして先ほど巻きつかれて、針のようなもので刺された女性がスルスルと

触手から開放されると・・・

ガック！

気を失っている彼女はその場で崩れ落ちた。

しかし・・・



倒れた次の瞬間彼女はスクツと立ち上がり、そしてそのまま広間からゆっくり歩いて出ていった。

「あの娘はもう・・・さっきの兵士みたいに身体の中にあの化物が入っている？かもな・・・」

どうやらここにつれてこられる時もあの針のようなもので刺されて意識を失わせて

何らかの方法で催眠状態にしていたようだった。

と・・・その時！

ピーピー！ピーピー！

いきなり大坂の無線機が鳴り出した。

.....

「やべー！」

慌ててその音を消して身を隠すが、すでに手遅れだった。

その音に気が付いた兵士が、下の階から一斉にこちらを見た。

「ダレカイルゾ！スグニソウサクシロ！」

ガヤガヤドサドサ

捕らえられた人を救うことも出来ずにその場から離れることを悔しがる大坂。

「くっそっ！どうにも出来ないか！」

ここで一気にあの巨大食人植物を殲滅することは出来た。

しかしそれだけで事態は解決するのか？

他の場所にもこんなのがいるのなら根本的に作戦を立て直さないと・  
・

そう考えて無線機を取り、その場から逃走しながら通信を開始した。

「ガガ・・・大坂だ・・・どうした？」

連絡はナツキからだった。

「ガガガ・・・オオサカ？タイヘンダ・・・オソワレテル・・・ガ  
ガガ・・・」

「なんだ？よく聞こえないぞ！ナツキ！」

「ガガガガガ・・・ハヤクキ・・・テ・・・」

「おい！ナツキ！どうした！？」

「ガガガガガガ……」

そこからはいつさい無線が通じなくなった。

「くそっ！やっぱり外でも……」

大坂は追っ手を振り切り、敵に追い詰められるとそれらを引き裂いて  
殲滅しながらも城の外部へと急いだ。

ナツキや他の仲間の身を案じながら……



人を食う(後書き)

次回は舞台を再び日本に戻して・・・です。

## 朝比奈とレン

ここで再び場所を日本に戻して・・・

レンはようやく会社へ到着した。

そしてそれを待ち構えていたかのように朝比奈が現れた。

「おはよう、香川さん」

「あ・・・おはようございます。」

「おはようって言うてもほんのさっきまで一緒にいたからなんか変

な感じだね。」

「アハハ・・・ほんとですね・・・」

朝比奈はすぐ近くの喫茶店で話をしようとレンを誘った。

まだ日が昇りかけた薄暗い朝、レンはここで意外な真実を知らされるのだった。

.....

「.....」



「ほんつとじいめん！」

すべての事を聞かされたレンは黙ったまま言葉もでなかった。

「ほんとにそんな事がおこるものなのか興味半分で試してみたくな  
っただけなのよ・・・」

「興味本位って！そんなんで睡眠薬まで使いますか！！」

レンはキッ！と、朝比奈を睨みつけて言った。

「だから・・・ほんとにじいめんなのよ・・・」

「わかりました！もういいですよー！」

「え？じゃあもう許してくれるの？」

「もう二度とこんな事しないって誓ってくださいよ！」

もう済んだ事でどうしようもないし！」

「うんうん。もう絶対にしないよ」

「わかりました。じゃあもう会社へ戻りますね！」

レンがそう言って席を立とうとした時、朝比奈はレンの手を掴んで呼び止めます。

「あ……ちょっと待って……」

「え？なんですか？まだなにかあるの？」

「あなたね・・・竜也って子知ってる？」

「え？はい？竜・・・？」

「うん・・・リュウヤ・・・リュウヤ君」

レンの目が泳ぎだす

「竜也君なら知ってますよ・・・苗字までは知らないけど、

朝比奈先輩が言ってる人と同じかどうかわかんないけど・・・」

「モデルみたいに背が高くてね、イケメンでホストなの・・・」

「うん・・・たぶんレンが知ってる・・・人ですよ」

「竜也君もあなたを見て知ってるっていったもん」

「え？レンを見て知ってるって・・・どこですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「竜也君どこでレンを見たっていったんですか？」

今度は朝比奈がまともにレンと目を合わせずらくなっていた。

「あの撮影場所だね・・・」

「え？え？え？・・・撮影？・・・」

「そうよ・・・あなたが眠ってしまったあそこで」

「えー！あんなところで竜也君！なんでー！？」

「何でって・・・そりゃースタッフじゃあないわよ・・・」

「カァー！」

「レンは竜也の男優姿を想像して顔を赤らめる・・・」

「わたしの目の前であの竜也が・・・」

他の女性と・・・

そう想像するだけでなぜかドキドキしてしまうレンだった。

「そ・・・そんな・・・ところへ来たレンを見て・・・」

「え？なに？」

「そんなＡＶの撮影場所にいるレンを見て、竜也君なんか言ってませんでした・・・か・・・？」

目をそらしながら朝比奈に聞くレン。

「そのままその場であなたを食っちゃいそうな勢いだったわよ」

「えー！？食っちゃうって・・・！？」

一旦席を立ち去ろうとしたレンが ドカツ！っと、もう一度腰を掛  
けなおした。

朝比奈はレンの手をグッと握り締めてしっかりと目を見据えて話  
だした。

「いい？ここから先はしっかりと聞いてね・・・」

「え？しっかりとって・・・？」

## 真相

朝比奈はレンのネックレスをはずしてから、事の細かく説明した。

スタッフがつけたこと

そのあと竜也がつけて、身体の変身を成し遂げたこと。

そして・・・

・ 竜也の精神が崩壊して、もう一度そのネックレスを狙っていること  
・



それらをすべてレンに話した。

レンはその話を下を向いて黙って聞いていた。

拳をぐっと握り締めたまま、体が小刻みに震えだし

フルフル・・・

下を向いているレンの手に大粒の涙がポタリ・・・ポタリと落ちだした。

「ひ・・・ひびく・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

朝比奈はもう何も言葉が出なくなっていた。

「ひどい！そんなことって！ひどすぎますよ！あなたそれでも人間ですか！」

レンは朝比奈を罵倒した！！

「ちがう！ちがうの！わたしも！こんなつもりじゃあなかった！」

「彼の・・・竜也さんの一生を壊して？それでいいの？」

レンは興奮して涙ながらに朝比奈に訴えた！

「香川さん！よく聞いて！」

うろたえるレンの手を一層グツと強く握り朝比奈は強い口調で話した。

「これは事故なの。そのネックレスをつけることは竜也が自ら申し出た事。」

その効果も承知の上で彼は付ける事を進んで承諾しました。」

「……………うう……………ひつく……………」

「そして撮影中もまったく動揺を見せずに身をカメラに任せていたわ……………」

「…………………………………………………………………」

「ただ……………そのあともとの身体に戻ると……………その急激な快感と変化に

精神がついていかなかったのよ……」

「だから……だからそれは事故だって言っんですか……？」

「そうよ！あなたもこの厳しい芸能の世界に入るのならそれくらいの覚悟は持たないと！」

バチンッ！！

いきなりレンの右手が朝比奈の頬を張った！

「そんな覚悟持てない……そんな世界ならレンはもういいです！」

ダッ！

レンはそう言ってその場から立ち去った。

座席にひとり残された朝比奈。

レンに叩かれた左の頬が赤く染まり、その頬に手を当てて

下を向いて動かない朝比奈・・・

その身体が先ほどのレンのように小刻みに震えだした・・・

髪の毛が顔にかかって表情は見えないが、しかしその震えが次第に大きくなり

頬に当てた手でサッと髪の毛をかきあげると、その表情は

うつすらと笑みを浮かべて

「クッククク・・・あの子もなかなか気がきついじゃあない・・・」

そう呟きながら朝比奈は席を立った。

店を出て会社へ向かうレン。

歩きながら頬を伝う涙をぬぐっていた。

グスツ・・・

早朝でまだ人が少ないオフィス街。

風がタイトスカートの中に吹き込んでくる。

カツカツとまだ履きなれないヒールの音が響きわたっていた。

「なんでよ・・・？おおさかぁ・・・あなたのくれたこのネックレスで・・・一人の人が・・・」

レンはネックレスをギュツと手で握り締め、独り言のようにつぶやきながら会社へ向かっていた。

それからしばらくして、事務所へついたレンはいつものように朝の掃除をして

他の人が来るまでの準備をしていた。

これは、前の会社にいたときからおこなっていた事で、そのうち少しずつ社員が出社してきた。

「あ、おはよう香川さん。いつも早いわね」

「……おはようございます……」

「あ〜おはよう〜！あ〜カガワ〜いつも掃除ありがとう〜」

「いえ……これも仕事ですから……」



みんな口々にレンに挨拶をしていった。

そして

「おっはよ〜〜」

ひときわ大きな声で萌子がやって来た。

「おはようございます〜!!」

みんなが一斉に萌子に挨拶する。

サリナのチーフマネージャーである萌子は、ここでもみんなをまとめる存在だった。

「ん？なんかレン・・・元気ない？それに顔色悪いぞ・・・」

萌子はレンの顔を覗き込んで言った。

「え・・・？そんな事ないですよ・・・」

レンは目をそらせて否定する。

それを見た萌子はギュッとレンの顔を手で挟んで自分の方へ向けさせて聞いてきた。

「なあ~~~~~んで？めえ~~~~そらすかな？」

「ああああついひやいれす」

両方の頬を挟まれて喋れないレン。

「あなたが目をそらせるときはね、何か隠してるかやましいことがある時なの！」

ギクッ！

顔をはさまれて正面を向けられても、目の玉はスツと横に流れるレン……

はさんでいる萌子の手をグッと掴んで自分の顔から離させて言いだした。

「いたいです！やめてください！ほんと、なにもないです！

昨夜遅くなっちゃってほとんど寝てないので、疲れてるだけです！」

「こはレンも萌子の目をしっかりと見て言っていた。

「……………ほんとあゝ？ほんとになにもないの？」

「うん、ほんとですよ。疲れてるから元気がないように見えたんですよ。」

「それならいいけどさあゝ……………あまり無理しちゃあだめだよ」

スリスリ

「ぎゃあー！」

萌子は笑いながらレンのお尻をなでていた。

「あはははゝゝ！いいわゝゝその反応は完璧に女の子だねゝ」

レンは、ぷうゝゝと頬を膨らませ口を尖らせて言う。

「まったく！バカモコ……………やってることはエロ親父と変わんない

「じゃない！」

「ウツヒヒヒヒ！ばかね！エロ親父がこんなことしたら

洒落になんないけど、あたしだからなんでもOKなのよ」

「しんじらんない！」

ガチャリ！

レンと萌子がそんなやり取りをしている最中にドアが開いて一人の女性が入ってきた。

「あ……………」

レンの動きが止まった。



## 朝比奈の策略

「あら、朝比奈さんおはよう…」

萌子が声を掛ける。

「おはようございます…」

朝比奈はレンのほうへ目も向けずに萌子に挨拶をしてスツとそばに近付いた。

「チーフにお話があるので、少しお時間いいですか？」

「ん？・・・ああ、10分くらいならいいわよ。」

このあとテレビの番組でプロデューサーと打合せだから手短にお

願いね」

「すみません。そんなにお時間は取らせません」

そう言って萌子と朝比奈は隣の会議室へむかった。

部屋を出て行くときに朝比奈は、チラッとレンのほうへ目をやり

ギロツ！っと睨むような表情を見せた。

(なに？なにによ？なんで睨むのよ・・・モコさんに何の話？竜也君のこと？昨日のこと？)

レンの頭の中でいろんな思惑が浮かんでいた。



二人が隣の部屋に消えて5〜6分たっただろうか・・・

ガチャリ と、ドアが開いて二人が出てきた。

「あはは〜。わかったわ、それじゃあそれをお願いね」

「はい、わかりました。この件はその方向で進めさせていただきます。」

472

「うん。まあ、障害も多いと思うけど、あなたのやりたいように

やってみれば？失敗なんか恐れてちゃあダメよ」

「はい！有難うございます。」

朝比奈がチラッとレンのほうへ目をむけた。

「それとそのパートナーにやはり香川さんを指名したいのですが」

「ん？レンちゃん？・・・ん・・・彼女にはまだ早くない？」

「いえいえ、彼女は以前からこの業界にいましたし、大変飲み込みも早くて優秀です。」

「まああね・・・前の会社でも、かなりこき使われてたみたいだけだね」

「はい、ですのでこのさい、私に預けていただければと！」

萌子は朝比奈の目をジッと見ながら話していた。

そしてポンツ！つと肩に手を乗せて言った。

「そんなに言っんならレンちゃん連れて行ってもいいわよ。」

レンにはこの会話は聞こえていない。

ただドアの前でなにやらこちらを見ながら話している事しかわからなかった。

474

萌子は朝比奈の顔に自分の顔を近づけて続ける。

「ただし・・・あったことはすべて報告しなさい。嘘をついたり隠したりしたらわかるのよ・・・」

「・・・ハイ・・・もちろんです」

「それとね・・・レンを泣かせたらあなたただじゃあおかないわよ」

そういつて萌子は自分の舌をチロツと出して朝比奈の頬に向けて舐める素振りを見せました。

朝比奈はバツ！と肩に置かれている萌子の手を払いのけて言いつた。

「やだなあゝ、私がチーフに隠し事したり嘘ついたりするわけないでしょゝ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

萌子は黙って朝比奈を見ている。

「それに香川さんは見所があるので、しっかり鍛えるつもりなだけですよ

何言ってるんですか?」

朝比奈は笑みを浮かべながら、冗談っぽく萌子に言った。

萌子はスツと顔を横に向けて大きな声で

「レ~~~~ン！お~~~~い！ちょっと来て~~~~！」

と、レンを呼んだ。

他のスタッフとの打合せに入っていたレンはヒョコツと顔を上げて

「はい？なに？」と、言っつて萌子のほうへやって来た。

「あなた今CMチームの打合せに入ってるんでしょ？」

萌子が聞く。

「はい、そうですよ。今日から入るようにと……」

「それもついいわ。今日からならまだ何も支障ないでしょ?」

「はあ?もついいわって?」

「今日からあなたね、新番組になるドラマチームに入って

この朝比奈について仕事教えてもらいなさい。」

レンは大きく目を見開けて、朝比奈の方を見た。

「よろしく!カ・ガ・ワさん!」

朝比奈はスツと右手を出して握手を求めてきた。

萌子はレンを見て続ける

「新人のあなたがいきなりドラマチームっていうのは、

ちょっと無理があるんだけど、彼女がどうしても言うからね

」

レンはジッと朝比奈を見つめて動かなかった。

「だからレンは彼女に感謝するのよ。花形の仕事なんだから」

動かないレンを見て朝比奈は自らレンの手を掴んでグッと握手させた。

鋭い目つきでレンを見つめて、ニッと口を広げて笑顔を見せる朝比奈。

「頑張りましょうね・・・レン・・・」

レンの手を握る朝比奈に力が入った。

グググググッ！

「あ・・・い・・・っっ」

痛みで顔をしかめるレン。

「あ……ごめんごめん！つい力が入っちゃって！

　　気負いすぎてるのかしら……アハハ……ごめんね」

そついいながら笑って手を放す朝比奈だった。

「じゃあ私はこれで行くわよ。あとは宜しくね」

萌子はそついつて部屋から出て行った。

朝比奈は素早くCMチームへ行き、説明してレンを引き抜く段取りを整える。

そしてスツとレンの手首を掴んで

「さあ、早く来なさい……」



そう強い口調で言って部屋から出て行くのだった。

レン・・・洗脳される

「いったい！痛いですよ！離してください！」

手を引かれて誰もいない部屋に連れて行かれたレン。

バタン！

カチャリ！

ドアを閉めて鍵まで掛ける朝比奈。

「あなたね・・・チーフには何も言ってないようね・・・」

さっき朝比奈が萌子に話していたのは、仕事の打合せに見せかけて

萌子が何か知っているかどうかを探っていたのだった。

萌子がレンに好意を持っているのは、周りから見ればみんなわかっていること。

その萌子が昨日のことを知れば、必ず朝比奈を責める筈だった。

しかし先ほどはそんな素振りも萌子は見せず、レンを自分に付けてくれと頼んだのも、

萌子が知っていれば承知するはずないことだった。

朝比奈はそこまで計算して動いており

「当たり前じゃあないですか・・・萌子さんは関係ありませんよ」

そこまでの事に気が付かないレンだった。

「それはそうとあなたさっきは、もうこの業界から身を引くって言うてなかったっけ？」

「う・・・うぐっ・・・」

「威勢がよかったのもあの時だけなのね！」

朝比奈はレンを強く睨んだ。

「そ・・・それは・・・萌子さんにも悪いし・・・」

レンの声が小さくなる・・・

「え？なに？なにが悪いの？」

「やめるとせつかく引き抜いてくれた、萌子さんに申し訳ないし・  
」

ドンー！

朝比奈が大きく机を叩きました！

その音にビクッ！っとするレン。

「結局あなたはいつもそう！今朝は私の頬を張ってあんなこと言い張ったのに、」

だれだれに申し訳ないからって・・・」

レンは完全に朝比奈の迫力に飲まれてしまっていた。

「あんな偉そうに言ったのに、結局何も出来ないじゃん！」

「ちがう！ちがうわ！」

レンが言い返そうとした時、その反撃を許さない朝比奈は

「ちがわない！あなたはね、弱いよ。だから強い私の言うことを聞かないとダメなの！」

朝比奈はレンに身体を近づけて、グツと肩を掴んで言いはなった。

「何も怖くないよ。いい？レン？竜也は今危険な状態なの。私もそれには心を痛めてる。」

レンは少し震えながら朝比奈の話聞いていた。

「あなたは弱いからそれをどうすることも出来ない。」

朝比奈は口をレンの耳のすぐ横に持ってきて話を続ける。

「だから強い私の言うことを聞かないといけないの。わかる？そうすれば、すべてうまくいくのよ。」

レンは身動きできなくなっていた・・・

朝比奈の独特な話し方が、レンの身体から力を奪っていく。

そして耳の横にあった口をスツとレンの顔の前にやり、唇が触れんばかりの距離で話を続ける。

「かわいい子……レン……ほんとにあなたって……」

(アア……アン……やだ……なに?)

この状況に戸惑いながらも、まるで金縛りにあったかのように動けないレン。

それどころか、身体は興奮状態へ……

「ハアハアハア」



自然と息が荒くなるレン。

スサササササ！

タイトミニから出るレンの両足の間、同じミニから伸びた朝比奈の脚が割り込んでいき、

お互いのパンストの擦れる音が鳴る・・・

そしてその感触がレンの感覚をくすぐるのだった。

「アアアン・・・あ・・・あん」

次の瞬間、先ほどまで触れそうにしていた朝比奈の唇がスツとレンの口をふさいだ。

「ウウウウウンンンン・・・」

朝比奈はレンのスカートを捲り上げて、差し込んだ自らの脚の

太ももをレンの股間へグリグリと押し当てていた。

そして片方の手は優しくレンの胸へ・・・

合わせた唇はネットリと優しくレンの口を這い、舌を絡め合わせていた。

(うああああ・・・なに？ダメ・・・)

レンは今の状況が理解できずにいた。

始めから終わりまで朝比奈のペースで、気が付けばキスをされて身体を弄られている。

そしてスツと唇を離れた朝比奈は

「さあ、わかったでしょう？私の言つとおりにして。問題も解決しましょ」

と、レンに言い聞かせるように言った。

「あ……………はい……………」

レンはそう返事することしか出来なくなっていた。

（ウフフフ……………ほんとかわいい子。萌子が気に入るわけだわ。）

朝比奈はレンを見てそう思いながら、一緒に部屋を出て行くのだった。

お姉様

その日レンは朝比奈と一緒に他数人のスタッフと

新番組の打合せと挨拶回りで必死だった。

朝から・・・いや、昨夜から色んな事がありすぎて混乱することもあるが、

いざ仕事に入るとそれも忘れて、足手まといにならないように

懸命に朝比奈についていくのだった。

朝比奈はその日1日のスケジュールを見事にこなしていき、

他のスタッフや他の関係者からも絶大な信頼を得ていた。

昨日始めて朝比奈に逢って、夜に彼女の友人のAV撮影会社へ一緒に行き、

それから眠らされて・・・

レンは朝比奈のことをまったく知らないまま、この日の朝に怒りから

暴力という形を彼女にぶつけた。

しかしそんなレンを朝比奈は自分の横に引き抜いてくれて大抜擢してくれた。

それに、今朝のあのキスは・・・

「レンは弱いの！だから！」

あの朝比奈の言葉がレンの頭の中で響いた。

（弱いもん・・・レンは弱いよ・・・だから何よ・・・だから強い人が好きだもん・・・）

私の言うとおりにしていれば間違いない！

だから一緒にこの問題も解決しましょう！

その朝比奈の言葉に、巧みに心をコントロールされていくレン。

今レンの心の中では、朝比奈への怒りが消えていき

次第に信頼感さえも芽生え始めていたのだった。

朝比奈のこの日の仕事振りは素晴らしく、一流スポンサーの代表者や  
各界の有名人にさえもまったく臆することなく

堂々としたその振る舞いは、レンにとって輝いて見えたのだった。

そして夜の9時

全ての仕事が終わりに、現場でそのまま解散となり

「おつかれさまです！」

「おつかれ〜っす！！」

スタッフもそれぞれ朝比奈に挨拶をしてそのまま別れだして

「はい、おつかれさま！みんな明日も忙しいから今夜は早く帰るのよー！」

朝比奈がその声をかけていた。

そしてレンもその場から離れようとした時

「レンー！」

と、大きな声を朝比奈から掛けられた。

「は！はい！」

その透き通るような声に、レンはビクッ！っとして立ち止まり朝比奈のほうへ駆け寄った。

「はい、あの・・・なにか？」

「何かじゃあないでしょ！ごはん！いくよ！」

「え？ご飯・・・ですか？」

「のみに行くの！付き合いな！」

朝比奈はレンの手をグッと握ったまま顔は道を走るタクシーを捜し



ている。

「え？飲みにですかー？」

チカチカ

朝比奈の上げる手を見つけたタクシーがウインカーを点滅させながら走り寄ってきた。

ドアが開くとレンはそのまま投げ込まれるように車内へ乗り込んだ。

きやつ！

それに続いて朝比奈が乗り込んで運転手へ行き先を告げる。

「もぉ〜チーフ・・・乱暴なんだから・・・」

彼女たちの仕事では、そのチームごとの責任者をチーフと呼ぶ。

今朝までは朝比奈と名前で呼んでいたレンも

今日から同じチームへ配属された為、チーフと呼ぶのだった。

「あはは、ごめんごめん！あ……それと、仕事終わったらチーフって呼ばなくていいよ」

「え？はい？……でも……じゃあなんて……」

「なんでもいいの！今朝みたいに朝比奈！って名前で読んでもいいし、」

「おばさん！……っていいよ。」

「な！なにいつてんですか！おばさんって、そんなの呼べるわけないでしょ？」

「それに今朝も朝比奈さんってちゃんと書いてました！」

「あはははー！ちゃんと書いてる相手にいきなりビンタするか！  
ふっふっ！」

「……………それは……………スイマセンでした……………  
でも！」

チーフ……………あ……………いや、アサヒナ……………さんも悪いん  
ですからね！」

朝比奈はレンの頭に手のひらを乗せてグリグリと下に押し付けて続  
ける。

「あれはもう誤ったでしょ？？ごめんなさいって！」

あんたも男なら男らしく……………って今は女なんだ……………

「

「はいはい、もういいですよ……………もうなんとも思ってますん」

「あ！そっだ！」

朝比奈はレンのアタマをさらに押さえつけて

「あたしね〜、あなたみたいな妹がほしかったんだ」

だからプライベートではお姉さんって呼んでよ

「えー！ー！レンがチーフのことお姉さんって言うんですかー！？」

「なによ！何か不服でもあるの？！」

朝比奈はレンの顔に自分の顔を近づけてギロツ！つと、睨んで言う。

ドッキッ！

レンは今朝のキスを思い出して、また身体が硬直する思いだった。

## 奇妙なコンビ

「そんな・・・ことないですよ・・・不服なんてあるわけ・・・」

レンの目は朝比奈の唇を見つめてしまう・・・

「よっし！じゃあお姉様って呼びなさい！」

「え？・・・おねえさ・・・ま？・・・」

レンは恥ずかしくて下を向いて小さな声でボソボソと言っただけだった。

それを見た朝比奈はレンの手をグッと握って鋭く強い目つきで睨みながら言った。

「声が小さいよ！それに返事は はい！マミお姉様か、お姉様だよ！」

ドキドキドッキドッキ！

レンはまた得体の知れない興奮の為、動悸が激しくなっていた。

「はい・・・お姉様・・・」

レンは恥ずかしがりながらも、身体をよじらせて精一杯の声で小さく返事をした。

その弱々しい仕草に朝比奈は・・・

(なん・・・なんなの・・・？この子・・・か・・・かわいいー！  
！この子がわいいじゃない！

食べちゃいたい！今すぐ！食べちゃいたい！・・・うつつうつつ・・・  
ああ・・・

メチャクチャいじめていじめてじっくり泣かせたい・・・わ・・・  
)

そうつ心に思うのだった。

一方レンは

（お姉様って・・・なんか恥ずかしいな・・・でも・・・お姉様  
カッコイイ・・・）

なんかすごく美人で堂々としてて・・・あんな女性って・・・  
レン・・・憧れちゃうな・・・）

などと、肉食獣に目を付けられているとも知らずに

その罠にズルズルと引き込まれていくのだった。

.....

そのまま車は走り朝比奈がレンを連れて行ったのは、

意外にもごくありふれた普通の居酒屋だった。

萌子に誘われた時は普段出入りできないような高級店ばかりだったのでレンは内心ホッとした。

そこで向かい合って席に着き、まずは生ビールを手にして

「はい、おつかれさま」

カチン！

と、グラスを合わせて一息ついた。

ゴキユゴキユゴキユ！！

ここでも朝比奈の見事な飲みっぷりに、レンは目を奪われるのだった。

「プツファ~~~~！おいし~~~~い！~~~~！~~~~！」

少し口をつけたレンも

「はい、仕事のあとのビールはやっぱりおいし〜ですわね」



そう答えた。

それからいくつか料理を頼んだ朝比奈はライターを灯してタバコに火をつける。

「ふう〜〜〜〜．．．ねえ．．．レン？」

レンは手もとの料理を口に頬張りながら答える。

「ふゃい？モグモグ．．．にゃんです？」

「今朝の話なんだけどさあ．．．竜世のこと．．．」

レンの動きが止まった

「あなた今朝は怒って出て行ったから、あの子の話できなかったでしょ？．．．」

「あ．．．ハイ．．．本当に叩いたことはスイマセンでした．．．」

「んん？叩いたことなんかどうでもいいわよ。それより竜也がね・・・」

レンは朝比奈の話を黙って聞いている。

「竜也ね・・・もう、狂ってたわよ・・・」

「え・・・？狂ってる？？」

「ええ・・・彼ね、完全に前の彼じゃあなくなってた。」

あまりの快感に完全に精神が崩壊してしまってたわ・・・」

それを聞いてレンは、自分が始めて変身した夜のことを思い出し

レン自身あの快感は忘れることが出来なideいた。

でもそこで踏み止まれたのは、レンの心がもともと女の心だったからかもしれない。

それにこの変身を与えてくれたのは、大好きな大坂だからでもあった。

しかしそれを正常な男性が、いきなり数時間で完全に女性化して、

すかさず凄まじい性の快楽を与えられたら・・・

精神がついていかずに崩壊するのも、うなずけることだった。

「じ・・・じゃあ・・・今、彼はどうしてるんですか？」

「わからないわ・・・ただこれだけははっきり言えるよ。竜也は必ずあなたを狙ってくる！」

もう一度そのネックレスを自分のものにして、あの快楽を求めようとするわ。」

レンは首のネックレスを手で掴んでギュッと握り締めた。

「だからあなたはしばらく自分の家に帰らないほうがいいわ。」

きつと竜也はあなたの帰りを襲つよ・・・」

「えー！だって・・・でも・・・じゃあー！どつすればっ！レインはどつすればいいんですか？」

「・・・仕方ないわね・・・」

「えっ？」

「しばらく私の家に来なよ。泊めてあげるわ」

「え？え？はい？アサヒナ・・・あ・・・お姉様の家に・・・ですか・・・？」

「うん。うちなら竜也も場所わかってないし、安全だよ。」

それにこうして出来るだけしばらくは一緒にいる方がいいよ

あの竜也が・・・

あの優しい竜也が狂ってしまって、襲ってくるなんて信じられなかった。

「それにあなた今女の身体なんでしょ？だから私も安心だし・・・」

朝比奈はレンの身体を舐めるように見ながらいつのだった。

「は？あ・・・いや・・・女の身体って・・・ネックレスをはずすと  
またすぐに男の身体に戻っちゃいますよ・・・」

「ウフフフ・・・戻っちゃってもいいわよ・・・レンならぜんぜんぜんかまわないわ」

朝比奈はレンの手を握り指を絡めながら言いつた。

ドキドキドキドキ・・・

(なんだろ・・・？なんでこんなドキドキするの？朝比奈さんって・・・女性なのに・・・)

レンはまるで男性に口説かれているような錯覚を起こしてしまつ。

(ああ・・・この子ツたら・・・きつとドキドキしてる・・・なんてかわいいんだろ・・・)

すぐにひん剥いて縛って思いっきり恥ずかしい格好させて・・・

叩いてヒイヒイ言わせて・・・泣かせたい・・・それからそれから・・・)

ジュン！ジュワ・・・

(ダメダメ・・・想像するだけで濡れてイッちやいそう・・・もうグシヨグシヨだわ・・・)

ほんこの子・・・やばい・・・萌子なんかに渡すのはイヤ・・・

）

朝比奈はアルコールの力もあつてか、レンを見る目が潤んできていた。

そして顔は紅潮し両方の足に力を入れてギュツと閉じてレンの手を握っていた。

「あ・・・あ・・・ちょ・・・イタイです・・・お姉様・・・手がイタイ！」

レンをいじめる想像でつい力が入る朝比奈は慌ててその手を離し

「ああ、ごめんごめん！つい考え事しちゃって・・・」

「ほんとに……そんな乱暴なところあるんだから……もっと優しくしてくださいね」

レンの言葉に他意はまったくなかった。

本当に朝比奈のそんな荒いぶつきらばうな態度に対してのものだったのだが……

しかし彼女は今の異常事態に備える意味もあり

レンを自分の家にかくまうのがベストと判断したのだった。

上司と部下でもと男の女と女の姉妹という奇妙な組合せが始まるうとしていた。





## 奇妙なコンビ（後書き）

これより第三章へ突入とさせていただきます。

この先は再びR18に戻りますので御了承お願いします。

こちらからどうぞ

<http://novel18.syosetu.com/n7368u/>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8167t/>

---

蒼いダイヤ 第二章

2011年9月20日18時31分発行